

オサエが施されている。口縁部直下にヘラ描が認められる。64-2は北側棺身に使用された円筒埴輪である。これも全形を捉えることができ、突帯は4条を数える。底部から口縁部にかけて直線的に外傾する。外面調整はタテハケのちB種ヨコハケを施すが、ヨコハケは突帯間に1段の場合と2段の場合とが認められる。内面調整はヨコ・ナナメハケのちユビナデ・オサエである。

III区・円筒棺11//埴輪棺墓（第65図）

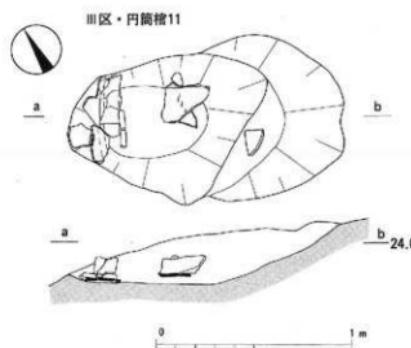
本埴輪棺墓は上面の削平と両端部の著しい攢乱のため、掘方、棺身とも全容は不明である。掘方の規模は現存長1.68m、幅0.64m、深さは最大15cmを測る。平面形は不明だが、主軸はほぼ北一南方向である。掘方内には黄褐色粘質土が充填され、棺身を固定している。この粘質土が棺身のどこまでを覆っていたかは明らかではない。掘方底面は南から北に向かって僅かに高くなるが、粘質土の充填により棺身は水平に置かれている。

棺身はいずれも口縁部を欠く円筒埴輪3個体で構成されている。北側に底部を南に向けた円筒埴輪を据え、その底部に中央円筒埴輪の体部を挿入している。そして中央円筒埴輪底部と南円筒埴輪の打ち欠いた体部を合わせている。遺存する南小口部では朝顔形埴輪の口縁部を立てて閉塞としている。副葬品や人骨は出土しなかった。被葬者の頭位も不明である。

65-1は中央棺身に使用された円筒埴輪である。底部から4段が遺存している。外面調整はタテハケのちB種ヨコハケを突帯間に1段施す。半円形と円形の透孔が穿たれており、器面には黒斑を有する。65-2は南側棺身に使用された円筒埴輪であり、底部から4段が遺存している。

半円形の透孔が穿たれている。外面調整はタテハケのちB種あるいはC種ヨコハケ、内面調整はヘラナデ、ユビナデ・オサエを施している。65-1・2とも埴輪棺墓の専用品の可能性が高い。

III区・円筒棺11//埴輪棺墓（第66図）



第66図 III区 円筒棺11

本埴輪棺墓は上面および東側が削平されており遺存状況は極めて悪い。掘方の規模は現存長1.4m、幅0.85m、深さは最大32cmである。平面形は不明であり、主軸は北西-南東方向である。斜面に設けられているため、北西端部の立上りの傾斜は緩やかである。

棺身および小口部閉塞の構造は不明であり、棺身に使用された円筒埴輪片が数点検出されたのみである。破片は同一個体である。副葬品や人骨は出土しなかった。被葬者の頭位も不明である。

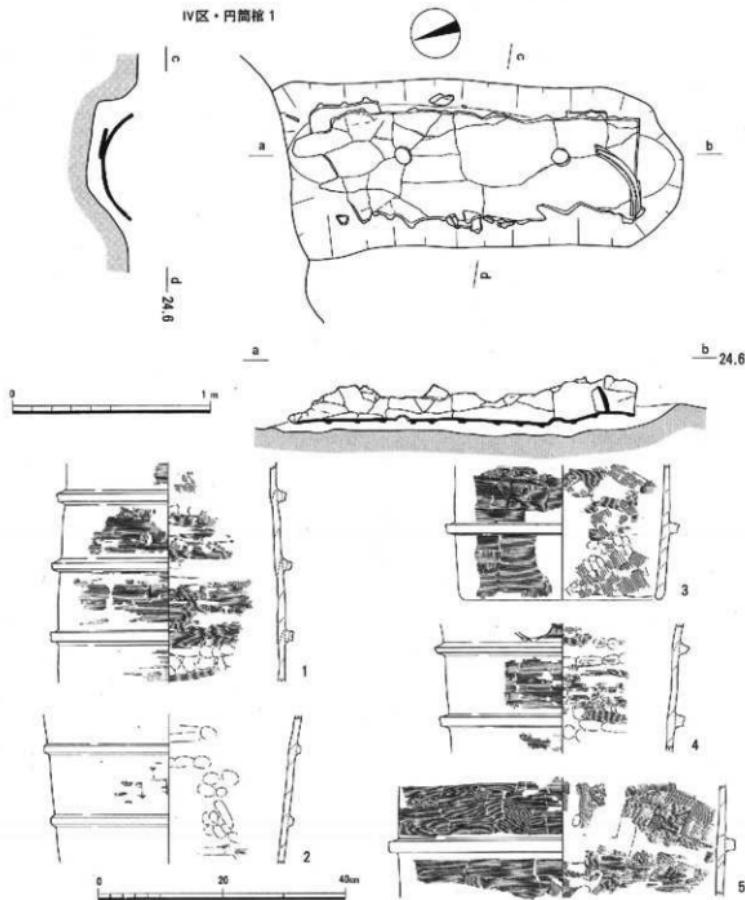
IV区・円筒棺1//埴輪棺墓（第67・68図）

本埴輪棺墓は上面が削平されている上、掘方北端部にも攢乱を受けている。掘方の規模は現存長2.0m、幅0.85m。深さは10cm程度が遺存している。平面形は隅丸長方形と推測され、主軸は北-南方向である。掘方の底面は南から北に向かって低くなるが、両端部の比高差は2cmと僅かである。

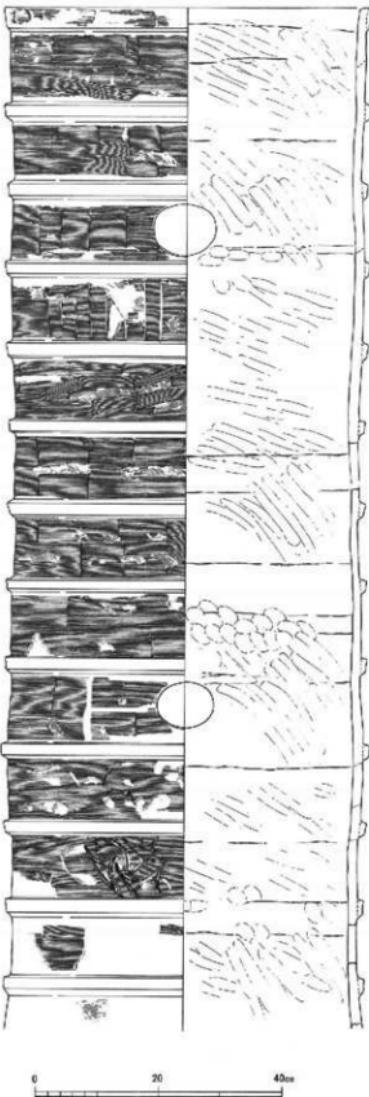
棺身には大型の円筒埴輪を使用している。口縁部を南に向けて置かれており、別個体の円筒埴輪片により南小口部を閉塞している。棺身と掘方底との間には埋戻し土が5cmほどの厚さで敷かれているが、棺身は水平に据えられておらず、掘方底同様に北側に下降している。副葬品、人骨は出土しなかつ

た。掘方底および棺身の傾斜から被葬者は南頭位の可能性がある。

使用された埴輪は全て普通円筒である。68-1は棺身に使用されたもので、口縁部以下13段が遺存している。口縁部は幅4.0cmの粘土帯の貼付けにより肥厚し、突帯も幅2.0~2.5cmで、断面台形を呈する。外面2次調整はB種ヨコハケで、基本的には突帯間に2段施す。また4段目で顕著であるが、B種ヨコハケの静止痕が幅をもち、調整が断続的となる。11段目に直弧文風のヘラ描があり、その上段にも内容不詳のヘラ描がみられる。67-5は南小口部閉塞に用いられた円筒埴輪である。その他67-1~4の円筒埴輪が出土しており、これらは棺身の固定のため掘方との間に挟み込まれたり、透孔を塞ぐために使用されたものであろう。



第67図 IV区 円筒棺 1 構成埴輪 (1)



第68図 IV区 円筒棺1構成埴輪 (2)

IV区・円筒棺2//埴輪棺墓 (第69・70図)

本埴輪棺墓は上面が削平を受けているものの、ほぼ全容を捉えることができる。掘方の規模は長さ2.3m、幅約0.8m、深さは10cmほどが遺存している。平面形は東側が広い隅丸長方形を呈し、主軸は東-西である。掘方の底面は西から東に向かって低くなり、両端部の比高差は7cmである。

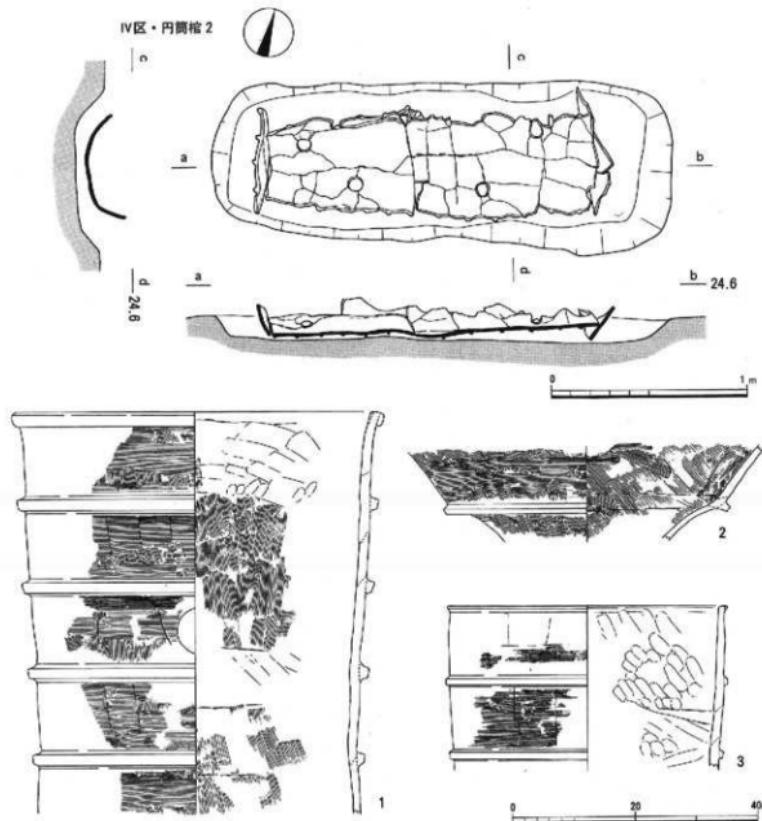
棺身として円筒埴輪2個体を合口にして置き、両小口部には棺身とは別個体の埴輪片を立てて閉塞している。副葬品や人骨は出土しなかった。掘方底は東側が低くなっているが、棺身は逆に西側が低く、約7cmの高低差が認められる。このことや掘方の広狭差から、被葬者は東頭位であったと考えられる。

70-2は東側の棺身に、70-3は西側の棺身に使用された円筒埴輪である。朝顔形埴輪の口縁部片70-1は東小口部の閉塞に、円筒埴輪69-1は西小口部の閉塞に使用されていた。このほか円筒埴輪69-3と朝顔形埴輪の口縁部片である69-2が検出されているが、これらは棺身の固定のために掘方との間に挟み込まれたものであろう。使用された円筒埴輪のうち69-1・3、70-2・3は外面の2次調整がいずれもB種ヨコハケであり、しかも突帯間によって1段の場合と2段の場合とがみられる。静止痕はいずれもほぼ垂直である。また69-1および70-3の透孔の脇にはヘラ描が認められる。

IV区・円筒棺3//埴輪棺墓 (第71図)

本埴輪棺墓は上面が削平されているほか、南半も擾乱を受けている。この擾乱によって棺身の南半は完全に失われていたが、掘方はほぼ全形を捉えることができる。掘方の規模は長さ1.93m、幅0.7m、深さは15~20cm遺存していた。平面形は1やや不整な長方形を呈し、主軸は北-南方向である。掘方底面は南側が北側より高く、比高差は10cm程度である。

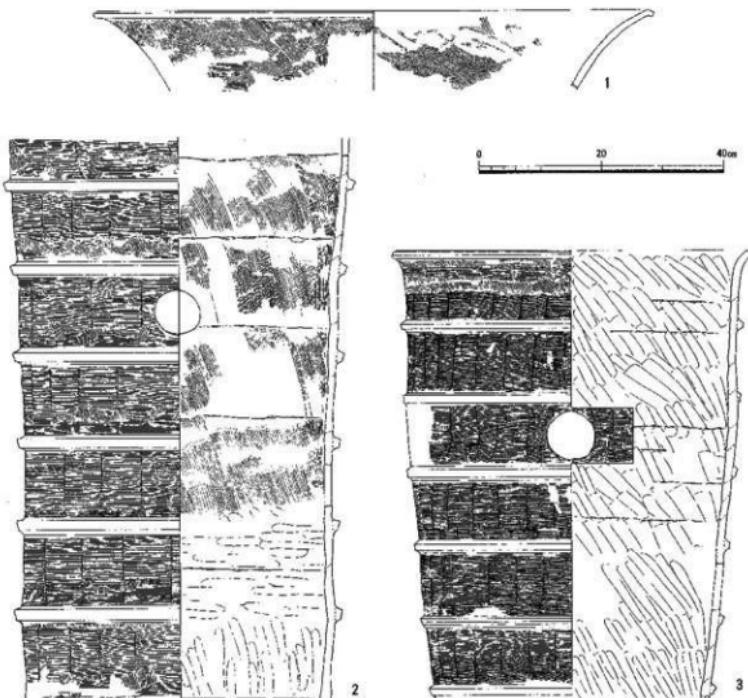
棺身には円筒埴輪が置かれていた。底部側を北側に向けて据えられている。棺身端は掘方北端にほぼ接しているため、本来底部は打ち欠かれてい



第69図 IV区 円筒棺2構成埴輪（1）

たと考えられるが、口縁部は攪乱のために打ち欠かれていたのか、あるいは攪乱で失われたのかはわからない。しかし棺身南端部から掘方南壁までの距離が約0.7mあり、遺存している透孔の位置から考えると口縁部が存在したとしても、口縁部から掘方南壁との間に相当の空間が生じる可能性がある。したがって別個体の埴輪がこの空間に存在し、棺身は2個体の埴輪で構成されていた可能性が高い。また小口部の閉塞については、南小口部は不明だが、遺存する北小口部では閉塞が確認されなかったことから、本埴輪棺墓では小口部は閉塞されていなかったものとみられる。ただし棺身とは別個体の円筒埴輪片も出土しているので、棺身が固定されたり、棺身の透孔が覆われた可能性はある。掘方底は南側が高く、棺身もまた掘方底には接しているので、被葬者は南頭位であったと考えられる。副葬品、人骨は出土しなかった。

71-1は棺身に使用された円筒埴輪で、口縁部と底部を欠く。体部最大径64cm、現存高106cmの大

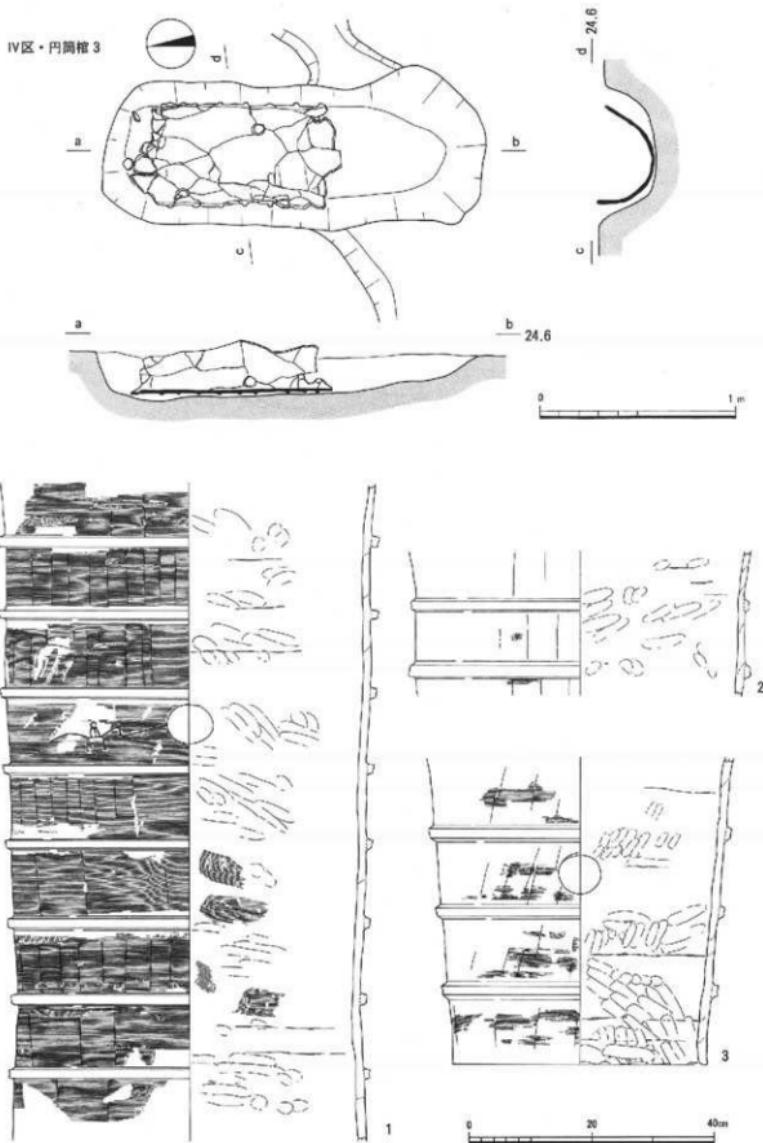


第70図 IV区 円筒棺2構成埴輪(2)

型品であり、9段が確認される。外向2次調整はB種ヨコハケで、各突帯間とも1段施している。静止痕は垂直であり、しかも間隔は短い。透孔の脇に乗馬人物がヘラ描されている。馬頭の前には手綱が延びている。人物については表現が不明瞭ながら、頭、胸、腕が描かれているようにみえる。またこの馬の尾から尻にかけての形状と同じ弧状のヘラ描が上の段にも認められる。ただしこのヘラ描は一度描かれたのち、器面を指で撫でつけ線が消されている。内面調整はユビナデだが、一部にヨコ・ナナメハケも認められる。他に71-2・3の円筒埴輪も出土しているが、これらは棺身の固定あるいは棺身の透孔を塞ぐために使用されたのであろう。71-2は口縁部、底部とも欠失した体部片である。器壁は磨滅しているが、外向の2次調整はB種ヨコハケで、突帯間に1段施す。内面調整はユビナデである。71-3は底部から4段が遺存している。外向調整はタテハケのちB種ヨコハケであり、ヨコハケは突帯間に2段施す。静止痕は斜行している。内面調整はユビナデ・オサエである。

IV区・円筒棺4//埴輪棺墓(第72・73図)

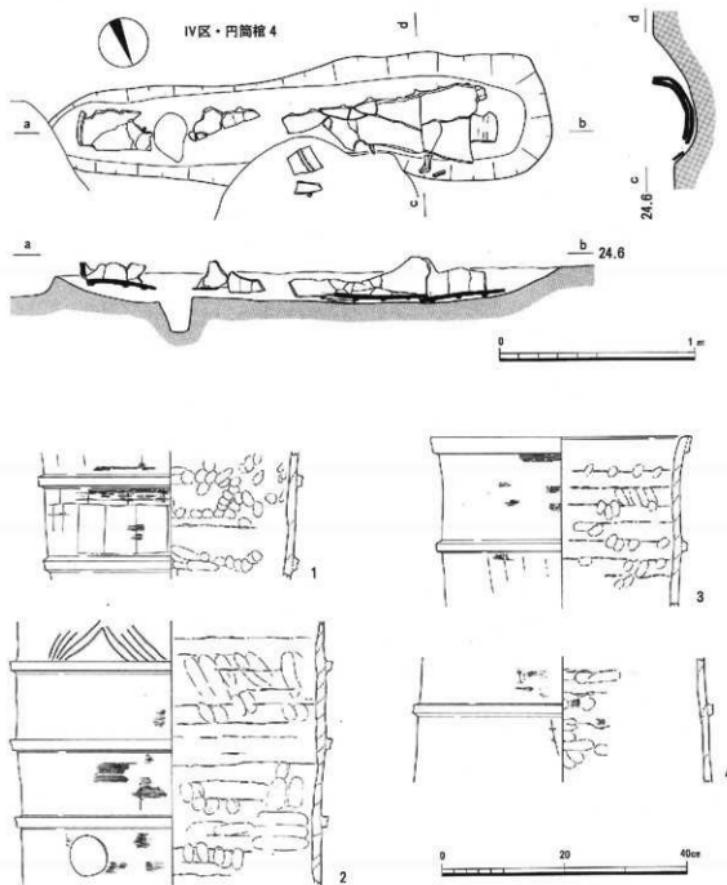
本埴輪棺墓は上面の削平が著しく、掘方東端部と中央北側にも攢乱を受けている。掘方の規模は現存長2.5m、幅は西小口部付近が0.65m、東小口部付近で0.4m、深さは15cm程度が遺存している。本来の長さは2.6mほどと推測される。平面形はやや不整な隅丸長方形を呈し、主軸は東一西方向である。



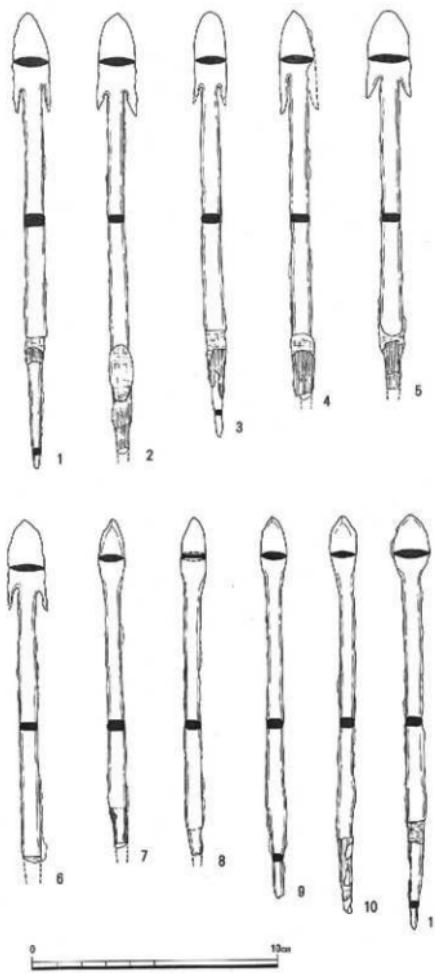
第71図 IV区 円筒棺 3、構成埴輪

掘方底面は平坦でほぼ水平である。

棺身の遺存状況は悪く、特に中央部分では埴輪片が散乱しているのみであるが、2個体以上の円筒埴輪を組合せていたものと考えられる。西側棺身と東側棺身の間からは別個体の円筒埴輪が出土した。この破片が棺身なら3個体の円筒埴輪を連結していたことになるが、棺身の固定など補助的に使用された可能性もあり断定できない。また東小口部では円筒埴輪の小片を立てて閉塞している状況がかろうじて確認されたが、西小口部の閉塞については不明である。人骨は出土しなかった。掘方底面は平坦だが、両小口部の広狭差から、被葬者は西頭位であった可能性が考えられる。また中央付近の棺身下から鉄鐵11点が、先端を西小口部方向に並び挿えた状態で出土した。棺身を据える前に副葬されたものである。



第72図 IV区 円筒棺 4 構成埴輪



第73図 IV区 円筒棺4副葬鐵器

72-2は西側棺身に使用された円筒埴輪である。口縁部および底部を欠いている。複線三角形のヘラ描が認められる。72-3は東側棺身に使用された円筒埴輪である。口縁部以下2段のみが遺存している。72-4は東・西両棺身の間から出土した円筒埴輪である。棺身の可能性もあるが、小片であり断定は困難である。出土した72-1～4のいずれの外面2次調整もB種ヨコハケだが、72-2は突帶間に1段しか施さないのに対し、72-1・4は2段施している。また棺身下から鉄鎌11点が出土した。鉄鎌はいずれも長頭鎌(第73図)で、腸抉柳葉式と鑿頭式の2形式が認められる。腸抉柳葉式鉄鎌の形状から陶邑・須恵器のTK23型式～TK47型式に併行する時期のものと考えられ、埴輪棺墓の築造も当該期であるとみることができる。

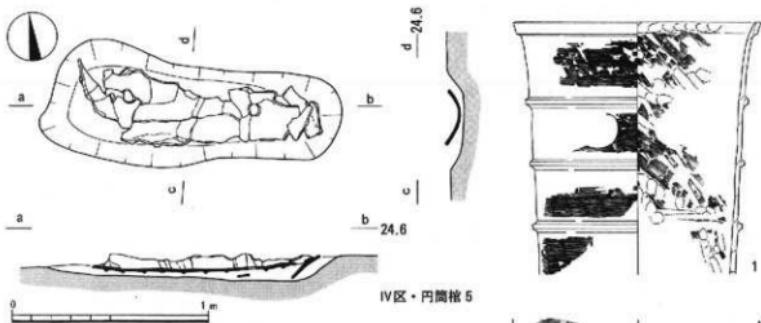
IV区・円筒棺5//埴輪棺墓(第74図)

本埴輪棺墓は上面が著しく削平されている。掘方の規模は長さ1.5m、幅は西小口部付近で0.6m、東小口部付近で0.4m、深さは最大で12cmほどである。平面形は不整な隅丸長方形であり、主軸は東-西方向である。掘方底は西から東に向かって低くなっている、東小口部と西小口部の比高差は約5cmである。

棺身には円筒埴輪1個体を使用し、底部を東に向けて置いている。西小口部には別個体の円筒埴輪片を立てて閉塞しているが、東小口部の状況は削平のため不明である。

また掘方底面は東が低くなるのに対し、棺身はほぼ水平に置かれている。掘方幅は西側が広く、棺身も径が大きくなる口縁部側が西小口部方向にあることから、被葬者は

西頭位であった可能性がある。しかし、平面形については削平が著しいこと、棺身の径については底部と口縁部側の差が僅かであることから上述の根拠が弱いことは認めざるを得ず、確定はしがたい。人骨および副葬品は出土しなかった。なお棺身の内法は現状で1.0m程度であるが、削平の影響を大きく受けた掘方西半部についても底面は緩やかに立上り始めており、削平の影響を考えても本来の棺



身の長さがこれを大きく上回るとは考えにくい。したがって本埴輪棺墓は、改葬もしくは小児埋葬の可能性がある。

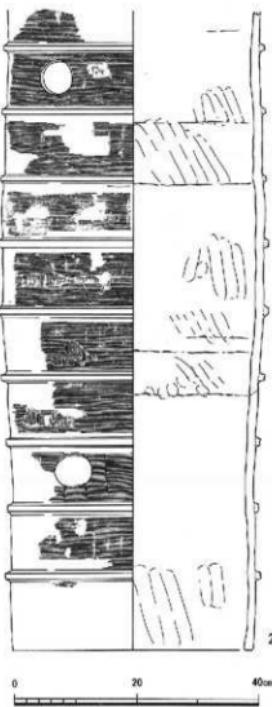
74-2は棺身に使用された円筒埴輪で、口縁部が失われているが、底部から10段が遺存している。外面調整はタテハケのちB種ヨコハケで、ヨコハケは突帯間に1段施す。なおこのB種ヨコハケは調整のストロークが長く、現状では静止痕のみられない突帯間もある。内面調整はユビナデである。74-1は西小口部の閉塞に使用された円筒埴輪である。口縁部は粘土帶貼付けにより肥厚している。外面調整はタテハケのちB種ヨコハケで、突帯間に1段施す。ヨコハケの静止痕は斜行している。内面調整はナナメハケ、ユビナデ・オサエである。

V区・埴輪棺墓1//埴輪棺墓（第75・76図）

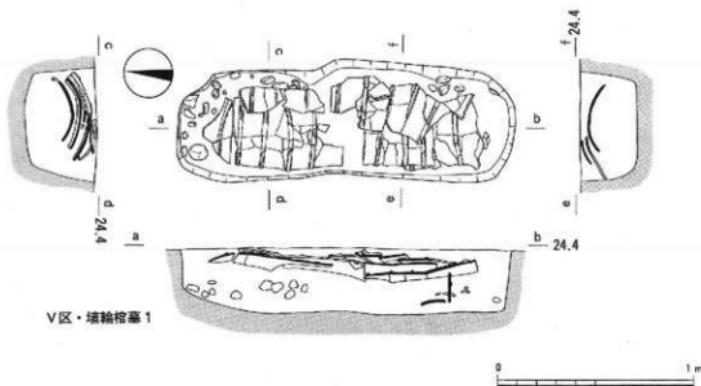
本埴輪棺墓は遺存状態が良好である。掘方の規模は長さ1.68m、幅0.59m、深さは33cmを測る。平面形は不整な長方形を呈し、主軸は北-南方向である。掘方底面は西から東に向かって低くなる。両小口部の比高差は約8cmである。

本埴輪棺墓は中央部が若干攪乱を受けているが、その構造全体を明らかにすることは可能である。通常の埴輪棺墓と異なり縦割りにした円筒埴輪片で被葬者を覆ったもので、被葬者の下や脇に埴輪片は配されていない。北・南両半ともそれぞれ円筒埴輪片を3枚内向きにして重ねている。また南小口部付近では外面を上に向ける円筒埴輪片が掘方底面から約7cm浮いた位置で水平に置かれている。さらにその小口部寄りの位置では、内面を北に向けた円筒埴輪片が垂直に立った状態で検出された。

この埴輪片も掘方底面から約7cm浮いた位置にあり、両埴輪片がレベルを揃えて置かれている状況が看取される。こうした南小口部の構造は被葬者の頭部保護にかかるものとみられるところから、被葬者は南頭位であったと考えられる。なお副葬品、人骨は出土しなかった。

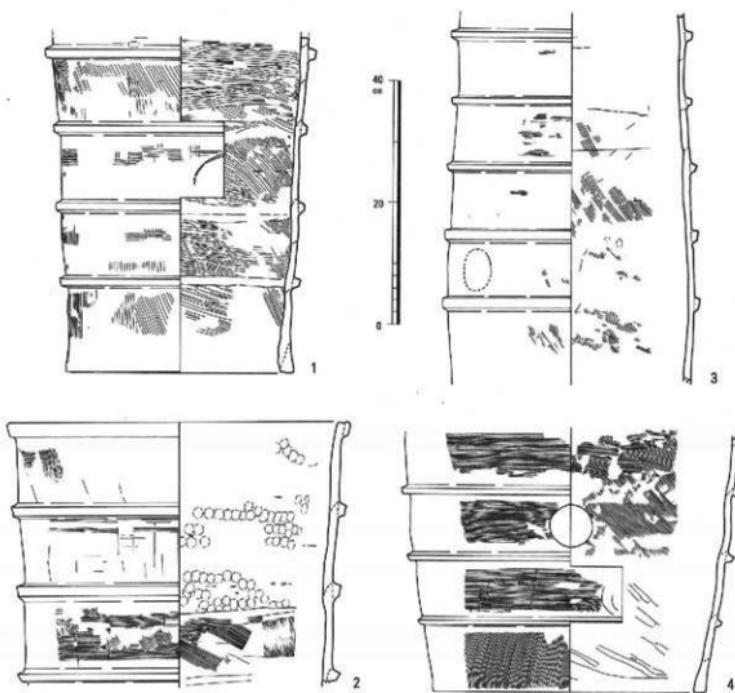


第74図 IV区 円筒棺5 構成埴輪

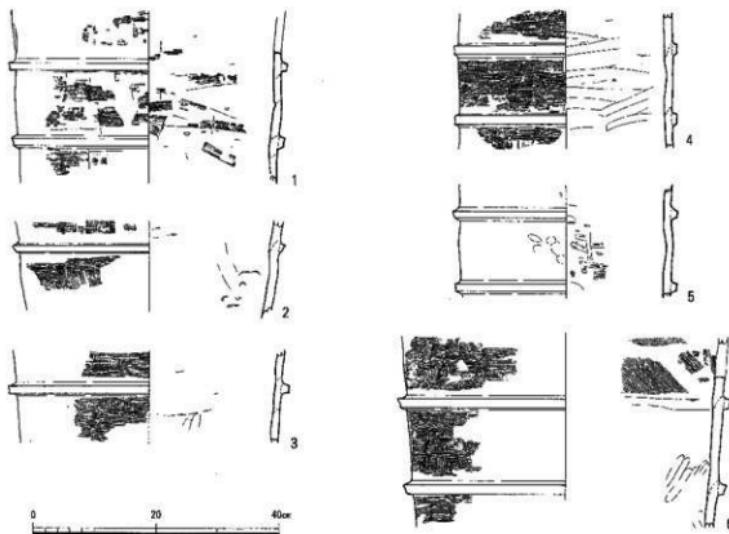


V区・埴輪棺墓 1

0 1 m



第75図 V区 墓輪棺墓 1、構成埴輪 (1)

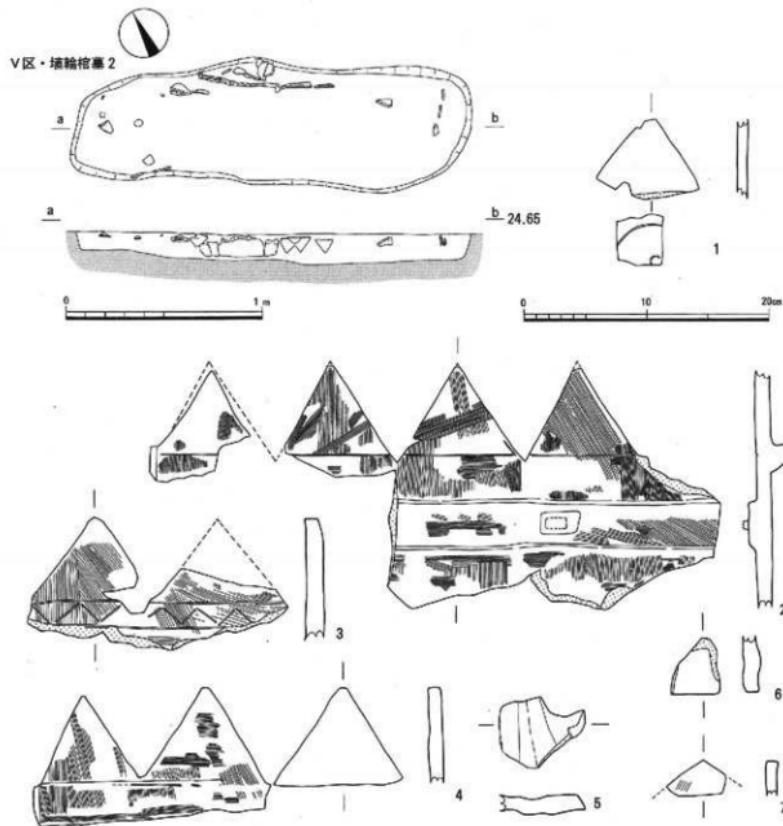


第76図 V区 塚輪棺墓1構成埴輪（2）

75-1~4、76-1~3・6は被葬者を覆っていた円筒埴輪である。このうち75-1~4は主要な埴輪であり、全周の1/3~1/4ほどの比較的大きな破片である。75-1は底部以上の破片である。外面調整はタテハケのちヨコナデだが、ヨコハケは不明瞭であり、底部から2段目、3段目の突帯間に僅かに観察されるにすぎない。内面調整はヨコ・ナナメハケである。この埴輪のハケメは2~3条/cmと粗い。75-2は口縁部以下の破片である。口縁部は粘土帶貼付けにより肥厚している。外面調整はタテハケのちB種ヨコハケで、突帯間に2段施す。内面調整は口縁部から3段目以下にはタテ・ナナメハケを施すが、2段目以上はユビナデ・オサエである。75-3は口縁部および底部を欠く円筒埴輪である。ただし、図示した最下段が底部になる可能性もある。また接合可能な破片がほかにもあり、推定される残存高は95cm程度である。外面調整はタテハケのちB種ヨコハケ、内面調整はユビナデ・オサエである。75-4は底部以上の破片で、外面調整はタテハケのちB種ヨコハケ、内面調整は底部から2段目まではユビナデ、それ以上はナナメハケが残る。76-1~3・6は小破片である。いずれも外側調整はタテハケのちB種ヨコハケである。76-4・5は被葬者の頭部を覆っていたとみられる円筒埴輪である。いずれも小片である。76-4は垂直に立てられていた破片で、外側調整はタテハケのちB種ヨコハケ、内面調整はユビナデである。76-5は水平に置かれていた破片で、外側調整はユビナデのみ、内面調整はヨコハケ、ユビナデである。

V区・埴輪棺墓2//埴輪棺墓（第77・78図）

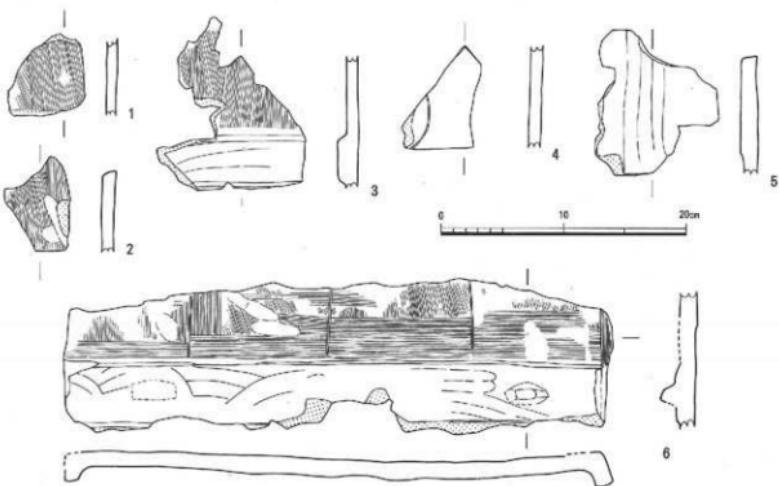
本埴輪棺墓は上面が削平されている。掘方の規模は長さ2.5m、幅0.68m、深さは最大19cmが遺存していた。平面形は不整な隅丸長方形で、主軸は北西-南東方向である。掘方底面は若干の起伏があり、北西から南東に向かって低くなっている。両端部での比高差は6cmである。



第77図 V区 墓輪棺墓2、構成圓形埴輪（1）

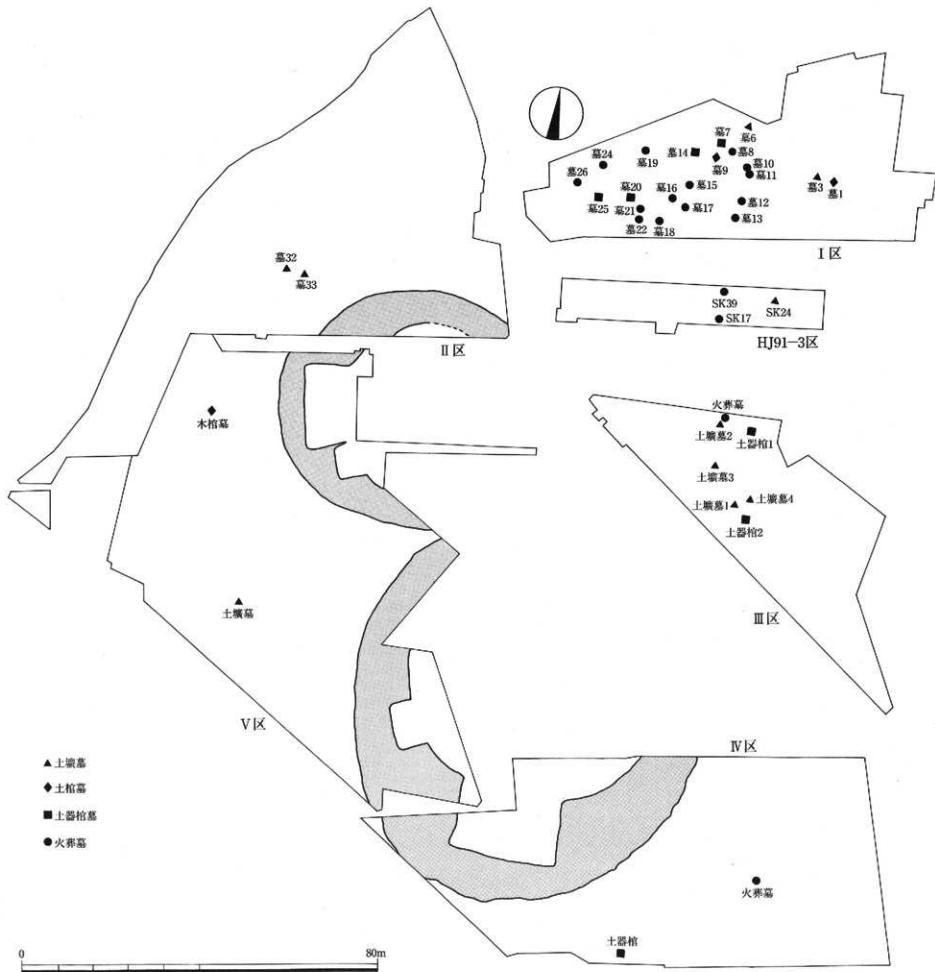
この埴輪棺墓2も通有のものとは異なり、埴輪片で掘方内を囲った構造であったとみられる。埴輪は打ち欠かれた円形埴輪が使用されており、複数個体の破片で構成されている。北東側辺および南東小口部では同一個体とみられる圓形埴輪の頂部三角形飾りを逆位に据えており、さらに北西小口部には別個体の円形埴輪を立てている。削平のため、南西側辺では破片はほとんど検出されなかったが、北西小口部付近に数点が検出されていることから、本来は全体を囲っていたと考えられる。なお掘方底面上には埴輪の敷設などはない。また被葬者を覆う蓋などの存在についても、上面が削平を受けていたため不明である。副葬品や人骨は出土しなかった。掘方底の傾斜から被葬者は北西頭位であった可能性がある。

77-1～7、78-1～6は掘方内で出土した圓形埴輪である。77-1～4・7は頂部三角形飾りと考えられる破片である。77-1は頂部三角形飾りの下に2重の同心円を描いている。78-4は僅かに



第78図 V区 塙輪塙墓2構成圓形埴輪(2)

頂部三角形飾りが確認でき、同心円になるとみられる文様が描かれている。胎土、色調からみて77-1と同一個体の可能性がある。77-2は頂部三角形飾りを区切るように水平に1条の沈線が施されており、その下に突帯が巡る。突帯の幅は3~3.5cmであり、突起の剥離痕が1箇所残っている。図の左端が一方の隅となるが、突帯が隅を回るかどうかは不明である。なお内面にも梢円形の剥離痕が認められる。仕切り板の剥離痕は円形であり、長径2.5cm、短径1.5cmと小さいことから、ここには円柱状の支えが入っていたのではないかと思われる。外面調整はハケ、内面調整はユビナデである。77-4は77-2とほぼ同じ特徴を有し、さらに胎土、色調、焼成なども類似していることから同一個体の可能性が高い。ただ本例では頂部三角形飾りの下に入れた沈線を擦り消している。図上に現れている沈線のラインは、ナデ付けた粘土が剥離したことによって確認されたものである。77-3は頂部三角形飾りの下に平行する沈線を入れ、2条の沈線の間を鋸歯文で埋めている。外面調整はハケ、内面調整はユビナデである。内面には粘土紐の接合痕が消しきれずに残っている。77-7は頂部三角形飾りの可能性があるものの、頂部の角度は110度と鈍角であり、60~70度程度である77-1~4とは様相を異なる。あるいは他の部位かも知れない。77-5、78-1~3・5・6は体部の破片である。78-6は最も大きい体部破片である。図の左右両端部が隅となる。隅を回った両短辺には透孔の一部が残っている。破損が著しいため明確ではないが、突帯は長辺にのみ貼付けられ、短辺には延びないようである。また突帯から垂直に延びる沈線が3条描かれている。外面調整はハケで、突帯の部分のみはユビナデを施す。内面調整はユビナデである。77-5、78-2にも透孔の一部が残っている。77-6は底部の可能性がある破片である。この破片の端部は僅かながら孤状を呈することから、隅部付近にあたるものとみられる。なお77-5・6、78-5は内外面とも調整はユビナデのみである。いずれも色調、胎土が類似しており、同一個体の可能性がある。



第79図 土塚墓・木棺墓・土器棺墓・火葬墓の分布

第8節 土壙墓・木棺墓・火葬墓などの調査

府宮道明寺南住宅地区では埴輪棺墓のほかに、土壙墓、木棺墓、土器棺墓、火葬墓が検出されている。それぞれの検出数は土壙墓9基、木棺墓3基、土器棺墓7基、火葬墓16基である。以下にその詳細を報告する（第79図）。

I区・墓3//土壙墓（第80図）

本土壙墓は両小口部が別の造構に切られているため、本来の形状は不明である。現状での掘方の規模は長さ2.2m、幅0.65mを測り、深さは20cmである。平面形は長方形、もしくは隅丸長方形と推測される。主軸は北—南方向である。覆土は暗褐色砂礫土である。木棺の痕跡などは確認されなかった。人骨も出土していない。被葬者の頭位は不明である。土壙中央部東寄りに土師器皿1点（80-1）が正置で副葬されていた。この土師器皿から、本土壙墓の時期は9世紀後葉と考えられる。

I区・墓6//土壙墓（第80図）

本土壙墓は上面が著しく削平されている。掘方の規模は長さ2.25m、幅0.9m、深さは8cmが遺存するにすぎない。平面形はやや歪な隅丸長方形を呈し、主軸は北東—南西方向である。底面は平坦で、ほぼ水平である。覆土は砂礫混青灰色土である。木棺の痕跡は確認されなかった。人骨も出土していない。被葬者の頭位は不明である。土壙北東隅で土師器の杯1点（80-3）と小型壺3点（80-2）が出土した。いずれも土壙底面よりやや高い位置に正置で副葬されていた。これらの土師器から、本土壙墓の時期は7世紀後葉と考えられる。

II区・墓32//土壙墓（第80図）

本土壙墓は上面が幾分割平されているが、比較的遺存状態はよい。掘方の規模は長さ2.24m、幅0.85m、深さ26cmを測る。平面形はやや不整な隅丸長方形を呈し、主軸は北西—南東方向である。底面は平坦である。東小口部寄りで縦割りにされた円筒埴輪（80-4）が出土した。枕あるいは頭部を覆ったものの可能性がある。この推測が正しければ被葬者は東頭位であったことになる。その他副葬品や人骨は出土しなかった。なお円筒埴輪は底部片であり、外面装飾はタテハケのちB種ヨコハケである。ヨコハケは突帯間に1段施す。また底部から1段目の突帯の下1.5cmに小孔が穿れている。

II区・墓33//土壙墓（第80図）

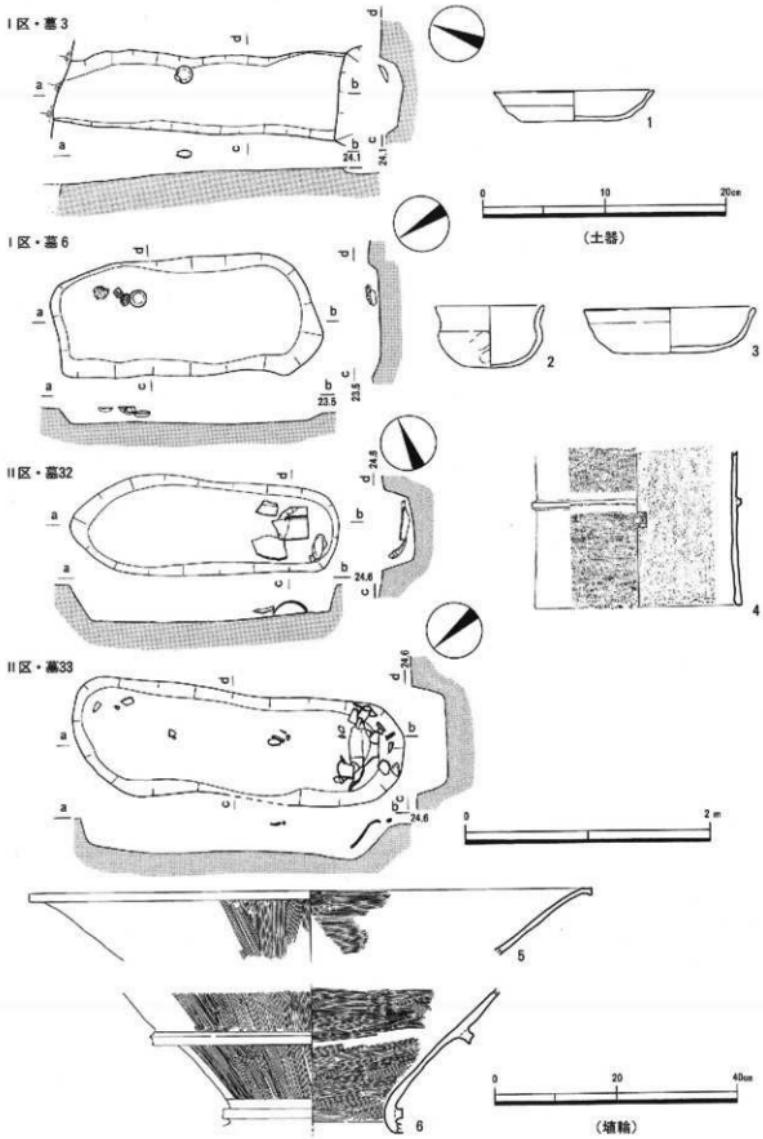
本土壙墓は上面が幾分割平されているが、比較的遺存状態はよい。掘方の規模は長さ2.7m、幅0.8m、深さ28cmを測る。平面形は隅丸長方形を呈し、主軸は北東—南西方向である。底面はほぼ平坦である。北東小口部から口縁部を壇内に向けて立てられた朝顔形埴輪片が出土した。被葬者の頭部を覆ったものである可能性もあり、この推測が正しければ被葬者は北東頭位であったことになる。その他、壇内から円筒埴輪の破片も出土しているが、覆土への混入かも知れない。80-5・6は北東小口部で出土した朝顔形埴輪である。接合しないが同一個体と考えられる。口径90cmを測る大型品である。

III区・土壙墓1//土壙墓（第81図）

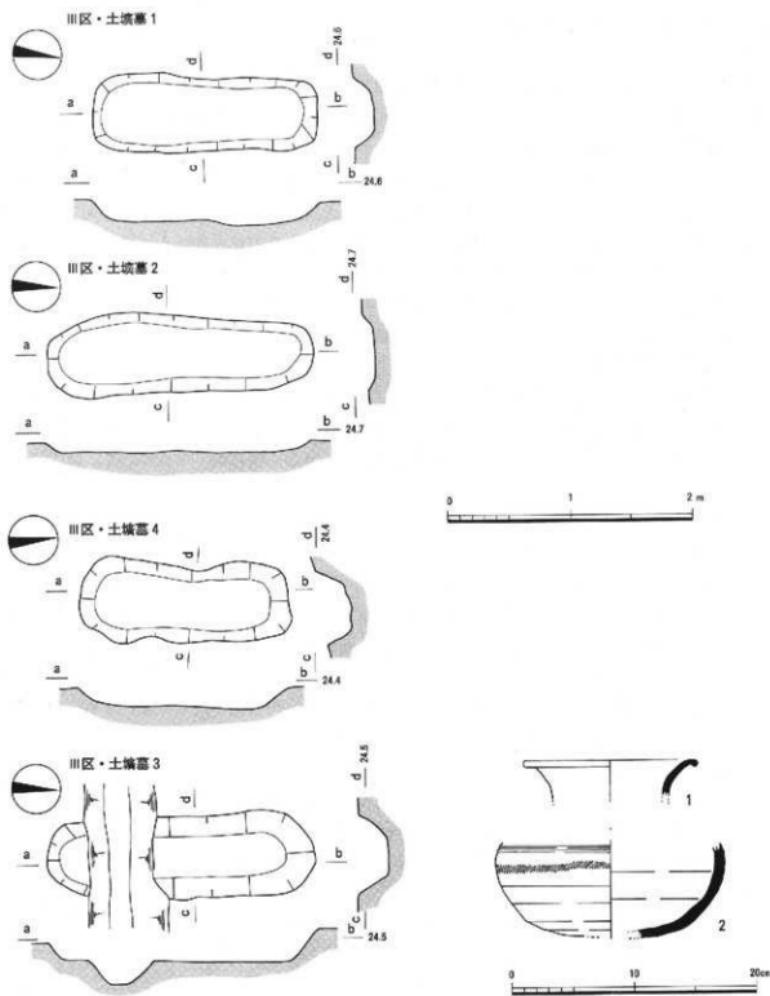
本土壙墓は上面が削平されている。掘方の規模は長さ1.84m、幅はやや広い南側で0.62m、深さは20cmを測る。平面形は隅丸長方形を呈し、主軸は北—南方向である。底面には若干の起伏があり、掘方中央から北側が1段下っている。その比高差は6cm程度である。覆土は黒褐色砂質土である。この覆土の中から埴輪片が出土したが、混入品とみられる。その他副葬品や人骨は出土しなかった。土壙の広狭差や底面の状況から、被葬者は南頭位の可能性がある。

III区・土壙墓2//土壙墓（第81図）

本土壙墓は上面がかなり削平され、深さも10cmを測るにすぎず、遺存状態はよくない。長さは



第80図 I区 墓3・墓6、II区 墓32・墓33、出土遺物



第81図 III区 土塙墓 1・土塙墓 2・土塙墓 4・土塙墓 3、出土遺物

1.8m、最大幅0.66mで、平面は長円形を呈する。底面はほぼ平坦である。主軸は北—南方向である。遺物の出土はなかった。

III区・土壙墓4//土壙墓（第81図）

本土壙墓は上面が削平されているが、深さは最大20cmを測る。長さ1.7m、最大幅0.7mで、平面形は不整な隅丸長方形を呈する。底面はほぼ平坦であるが、北に僅かに下降している。主軸は北—南方向である。遺物の出土はなかった。底面の傾斜から、被葬者は南頭位の可能性が推測される。

III区・土壙墓3//土壙墓（第81図）

本土壙墓は南側に攢乱が入っているが、全容は捉えることができる。掘方の規模は長さ2.19m、幅はやや広い北側で0.7m、深さは24cmを測る。平面形は長円形を呈し、主軸は北—南方向である。掘方底面はほぼ平坦であるが、南から北に向かって緩やかに下り、その比高差は4cmである。人骨は出土しなかった。また掘方の両小口部の広狭差と掘方底の傾斜が一致しないため、被葬者の頭位方向は推測できない。覆土中より須恵器壺の口縁部（81-1）と体部（81-2）の破片が各1点出土した。この須恵器壺が本土壙墓に伴うものとすると、その時期は7世紀前半と考えられる。

V区・土壙墓//土壙墓（第82図）

本土壙墓は小型方墳の北側周溝と重複している。その概要は第6節で述べたが、周溝が埋没したのち本土壙墓が形成されたと考えられる。掘方の規模は長さ、幅とも1.5m、深さは26cmを測る。平面形はやや不整な隅丸方形を呈す。底面は若干の起伏があり、北から南に低くなっている。両端部の比高差は5cmである。

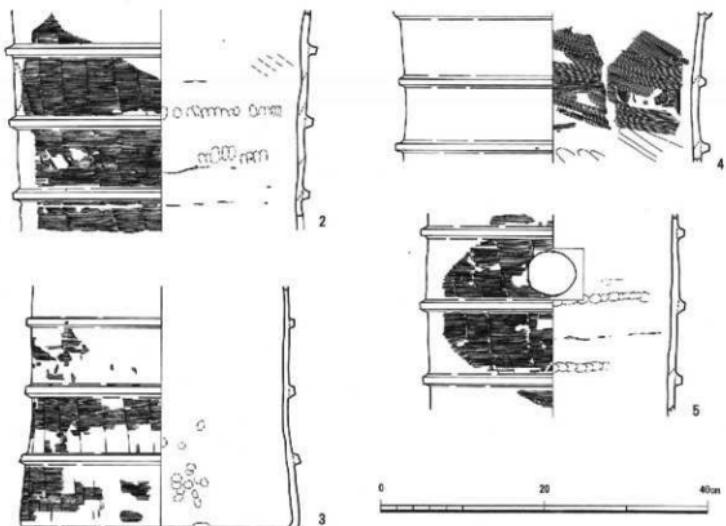
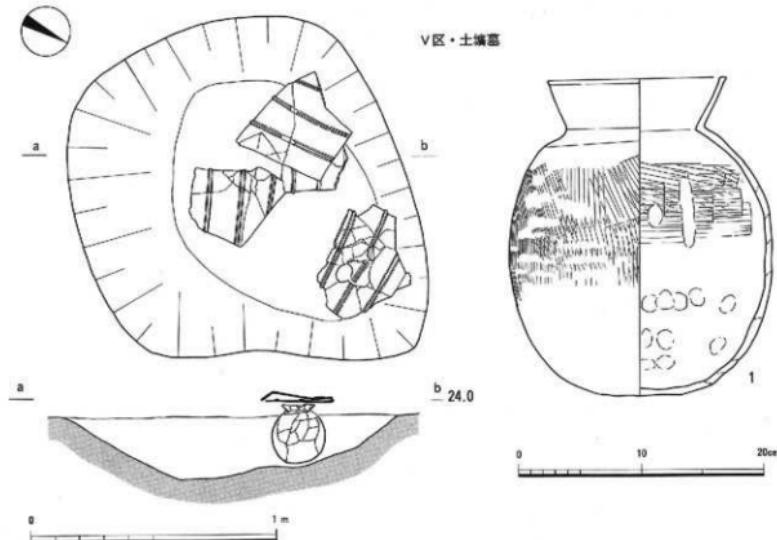
底面から約20cm上で円筒埴輪の破片4片が水平状態で出土した。82-2～4は墓壙中央付近で、82-5は北隅近くで検出した。このうち82-5は被葬者あるいは被葬者を覆う有機質の上に置かれた考算が強い。土壙底面の傾斜からも、被葬者は北頭位の可能性が考えられる。さらに西側では赤色顔料（ベンガラ）を充満した土師器甕が土壙底に正置状態で置かれていた。その口縁部の上に円筒埴輪片82-3・4が重ねられ蓋とされていた。82-2は位置がずれているが、本来は蓋として置かれていた可能性が高い。土師器甕は布留式土器であり、その中でも新しい様相を示している。一方円筒埴輪は、川西氏のIV期に該当する。さらにB種ヨコハケはいずれも突堤間1段であることから、IV期の中でもやや新しい。したがって土壙墓の時期は5世紀中葉と考えられる。

I区・墓1//木棺墓（第83・84図）

木棺墓は北小口部の一部および東側辺に攢乱を受けているが、ほぼ全容を捉えることができた。掘方の規模は長さ2.95m、幅1.2m、深さは最大40cmを測る。平面形は長方形を呈し、主軸は北—南方向である。掘方底面は起伏が若干あり、また中央が僅かに下っている。墓壙壁は南小口部を除いて垂直に近い角度で掘込まれている。

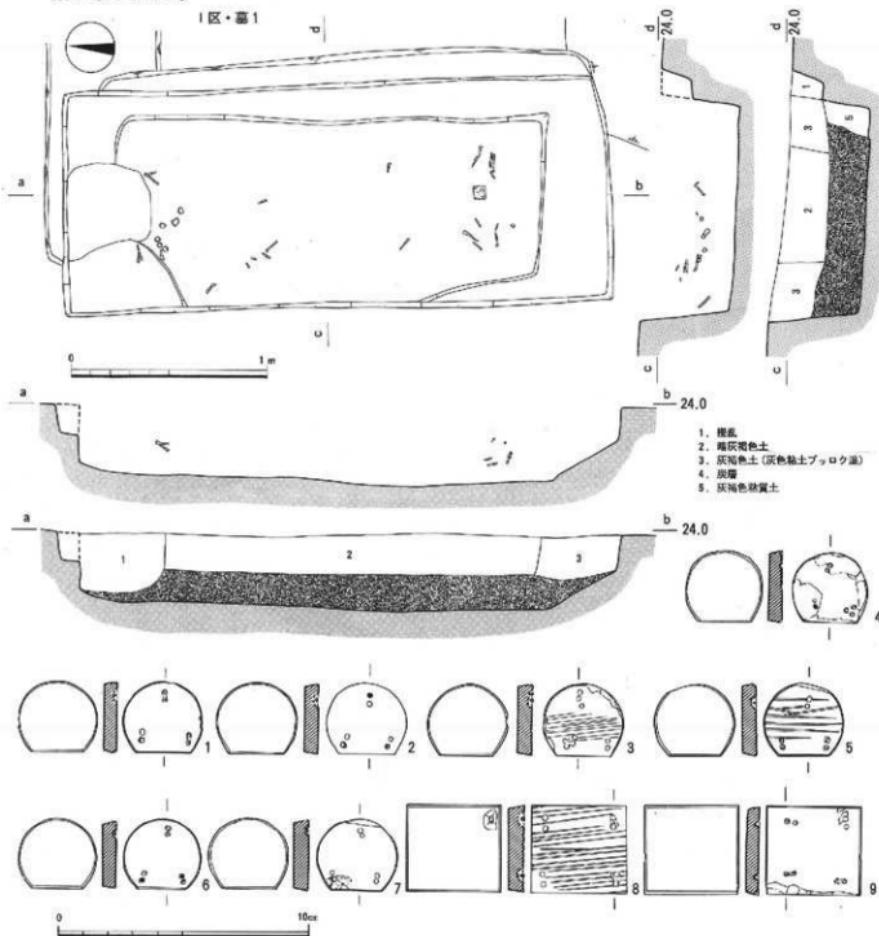
この掘方にまず粉状の炭を15～20cmの厚さで充填している。ただ東辺の一部では炭層に先行して灰褐色粘土が底に置かれている。木棺は墓壙下半を占めるこの木炭層上に置かれたとみられる。木棺自体の痕跡は残っていないが、掘方上半を占める暗灰褐色土（2層）と灰色粘土ブロックの混じる灰褐色土（3層）との境が直線的に立上っていることから、前者は木棺内堆積土、後者は木棺と墓壙との間の埋戻し土と考えられる。

遺物は暗灰褐色土から須恵器、土師器の細片が少量出土したほか、鉄釘25本が暗灰褐色土中および木炭層上面にくい込むように、石鈴9点のうち2点が攢乱から出土した以外は、墓壙北側で木炭層上部や木炭層に接して出土した。また漆片が墓壙南側で木炭層上部にくい込むように出土した。鉄釘

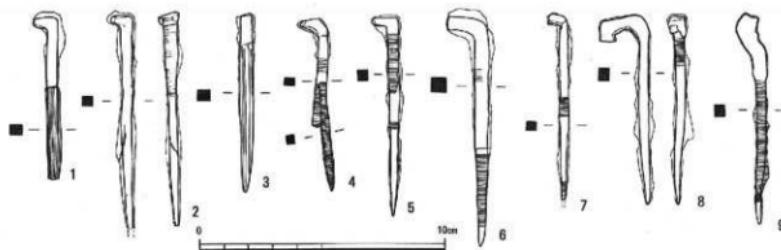


第82図 V区 土壤墓、出土遺物

は墓壙の南北に分かれて出土し、その状況から木棺の規模はおよそ長さ1.8m、幅0.5mほどと推定される。また鉄釘に付着した木片の痕跡から棺材の厚みは3.5cm前後であったとみられる。鉄釘の全長は最小5.6cm、最大9.3cmで7~8cmが主である。身部の断面は方形で、太さ4~5mmほどである。頭部は多くが曲折状である。石鎚帶は巡方2点、丸柄7点で、いずれの石材も角閃石安山質溶結凝灰岩である。2点の巡方はともに正方形に近く、表面と側面は丹念に研磨されている。裏面の4隅に2孔1対の孔を穿っている。漆片は土圧による破損が著しく原形を全く留めていないが、容器であったと推定され、遺存状態から1辺10cmほどの大きさとみられる。本木棺墓の時期は8世紀後葉~9世紀前葉と考えられる。



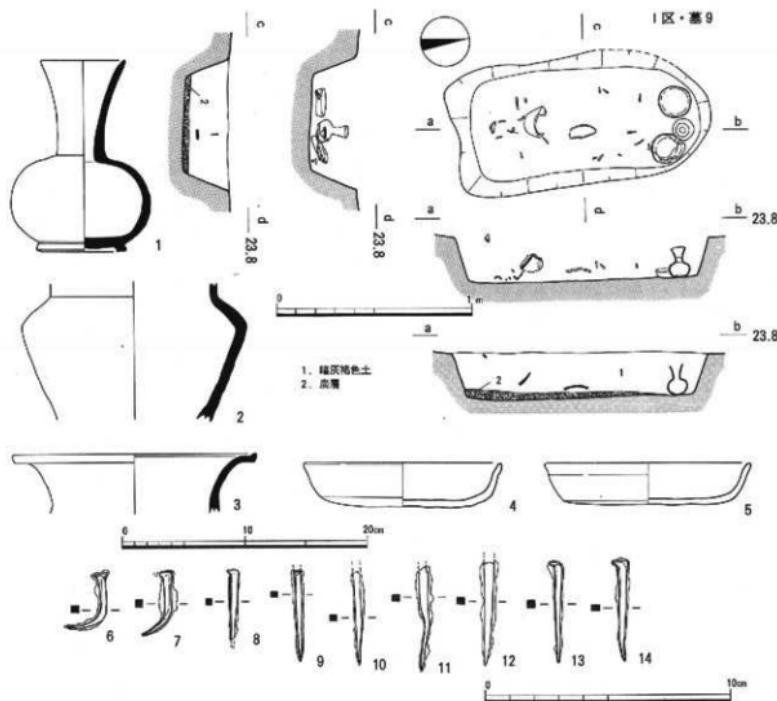
第83図 I区 墓1、副葬石鎚帶



第84図 I区 墓1出土鉄釘

I区・墓9//木棺墓 (第85図)

本木棺墓は北西部分が一部攢乱されているが、全容はほぼ捉え得る。掘方は長さ1.3m、幅0.6m、深さは25cmを測る。平面はやや重な隅丸長方形を呈し、主軸は北一南方向にとる。墓壙の掘込みは直



第85図 I区 墓9、出土遺物

線的で、底面は平坦である。

墓壙内覆土は暗灰褐色土の單一層であるが、その下の墓壙底土には北端付近を除いて厚さ3~5cmの薄い木炭層が散かれていた。この木炭層の上面および上部から鉄釘18本が出土した。人骨や木棺の痕跡は認められなかったが、鉄釘の出土状況から、木棺の規模は長さ0.7m、幅0.4m以内と考えられる。またこの木炭層が認められない北端付近では須恵器長頸壺1点を挟んで東西に土師器杯が各1点上向きに置かれていた。須恵器や土師器は墓壙壁とほぼ接しており、しかも鉄釘や木炭層の分布がその一群にまで及ばないことから棺外に副葬されたものとみられる。また、覆土中より須恵器の広口壺1個体分の破片が若干分散して出土した。これは破碎され、木棺上に置かれたものかも知れない。

85-1は北端部に副葬された須恵器長頸壺、85-4・5は85-1を挟んで置かれた土師器杯、85-2・3は棺上に置かれたとみられる須恵器壺である。85-1は丸みを帯びた胴部を有する器高15.8cmの比較的小型の壺である。85-4・5はほぼ同形、同大で、外面調整は口縁部ヨコナデ、体部から底部がユビオサエ、内面調整はヨコナデである。85-2・3は同一個体とみられる。

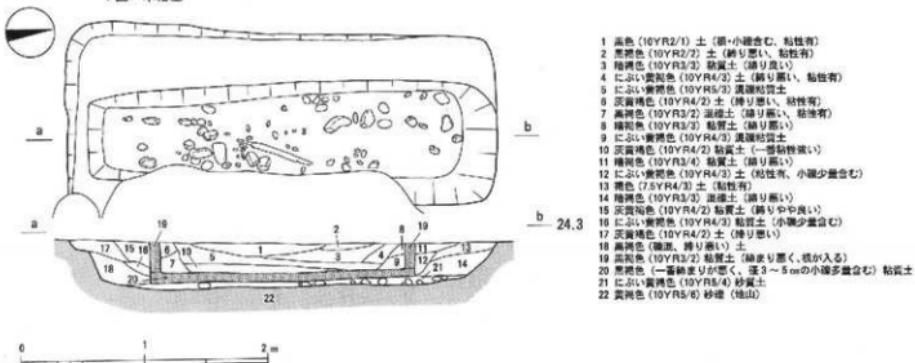
木棺墓の時期はこれらの副葬品から8世紀中葉～後葉に比定される。

V区・木棺墓//木棺墓(第86・87図)

木棺墓は上面が削平されている上、東側が大きく攢乱されているが、東側辺以外の様相はほぼ捉えることができる。墓壙は長さ3.5m、幅1.37m、深さは最大で39cmを測る。平面形は隅丸長方形を呈し、主軸は北一南方向による。西側辺および南小口部から東側辺の南寄りにかけては2段に掘削されているが、北小口部から東側辺にかけては段がみられない。

木棺自体は遺存していないが、土層断面をみると木棺の痕跡が明らかに認められ、小口板および底板の形状を明確に捉えることができる。そして小口板と底板が直角に組合っている構造から、鉄釘の出土はみられないが、本木棺は組合式であると考えられる。小口板が底板の上に載るかあるいは底板の端部脇に接しているのかは不明瞭であるが、少なくとも底板は小口板より外に延びてはいない。木棺内の覆土は小口板脇の黄褐色土を基調とする6~9層と中央の大部分を占める黒褐色土を基調とする1~5・10層に分けられるが、前者は木棺の隙間からの流入土、後者は蓋材の破損にともなっ

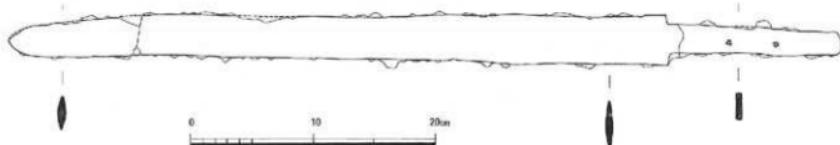
V区・木棺墓



第86図 V区 木棺墓

て落ち込んだ墓壙埋戻し土と考えられる。また、墓壙底上には木棺幅と対応するとみられる範囲に礫が粗雑に敷かれている。これは墓壙底が段丘疊層に達しているために、その底面の起伏を解消し、木棺を安定させるためになされた調整であろう。この木棺墓に伴うような周溝が認められないことから、本土壙は古墳の主体部ではなく、単独の埋葬施設と考えられる。

なお10層の上面に沿って鉄劍1点が出土した。斜めに傾いた鉄劍は切先と茎尻で14cmほどの高低差がある。こうした状況から、鉄劍は本来蓋上に置かれていたものと推測される。鉄劍は全長68cm、茎長14.8cm、刃部最大幅4.1cm、茎幅2.2cm、同厚0.6cmを測る。鋳化のため鎧は明瞭でない。茎に目釘孔が2箇所認められる。



第87図 V区 木棺墓副葬鉄劍

I区・墓7//土器棺墓（第88図）

本土器棺墓は他の造構により南半上部が切られているが、ほぼ全容を捉えることができる。掘方の規模は推定長1.3m、幅0.75m、深さは45cmを測る。平面形は長円形を呈し、主軸はほぼ北—南方向にとる。掘方底面は北から南に向かって下っており、比高差は10cmを測る。

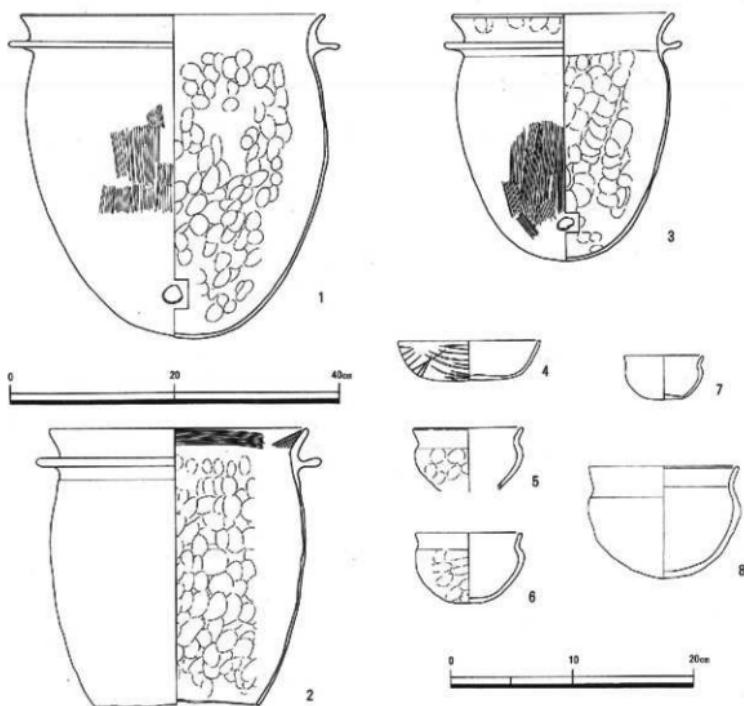
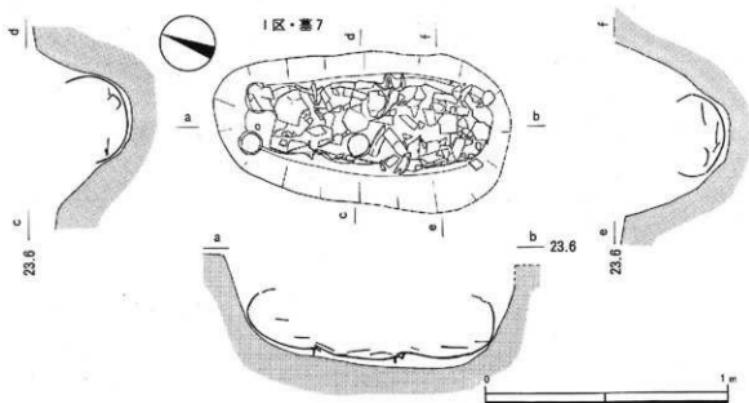
棺身は土師器土釜3個体で構成されている。北側棺身は88-3であり、口縁部を内に向いている。中央棺身は88-2であり、底部を打ち欠き、打ち欠いた底部を88-3と合わせている。南側棺身は88-1で、口縁部を北に向かって88-2の口縁部と合わせている。継ぎ合わせは丁寧になされ、隙間はみられない。掘方底の傾斜に沿って棺身も北側に高く傾斜している。人骨は出土しなかったが、掘方および棺身の傾斜からみて被葬者は北頭位であった可能性が高い。南西隅を除く墓壙の3隅から口縁部を上に向かって88-5・6・8の土師器小型壺が出土した。88-5は南東隅、88-6は北西隅、88-8は北東隅に置かれていた。南西隅は攪乱を受けていることを考えると、本来は土師器小型壺が4隅に配されていた可能性が高い。また中央と南側の上釜内からは88-4の土師器杯と88-7の土師器小型壺が出土した。なお南北両側に使用された土釜の底部近くには、ともに小孔が穿たれている。

88-1~3の土釜は、大きさはそれぞれ異なるものの同形で、口縁部が短くなるとともに、胴部がやや丸味を帯び、胴部最大径と胴部長がほぼ等しくなっている。88-4は外面に粗いヘラミガキを施す。88-5~8は小型の壺で、最も大きい88-8でも口径12.3cmにすぎない。棺身に使用された土釜や出土した土師器から本土器棺墓の時期は8世紀後葉と考えられる。

I区・墓20//土器棺墓（第89図）

本土器棺墓は上部の削平が著しく、過半が失われている。掘方の規模は現状で長さ0.7m、幅0.35m、深さ15cmを測る。平面形は現状では長円形を呈するが、削平のためかかなり歪で、南東側が広くなっている。主軸は北西—南東方向である。掘方底面はほぼ水平である。

攪乱によって棺身は大きく破損しており、上半部は完全に消失していたが、89-1の土師器土釜と



第88図 I区 墓7、出土遺物

土師器甕を合口にして棺身とした状況が認められる。人骨は出土しなかった。被葬者の頭位も不明である。

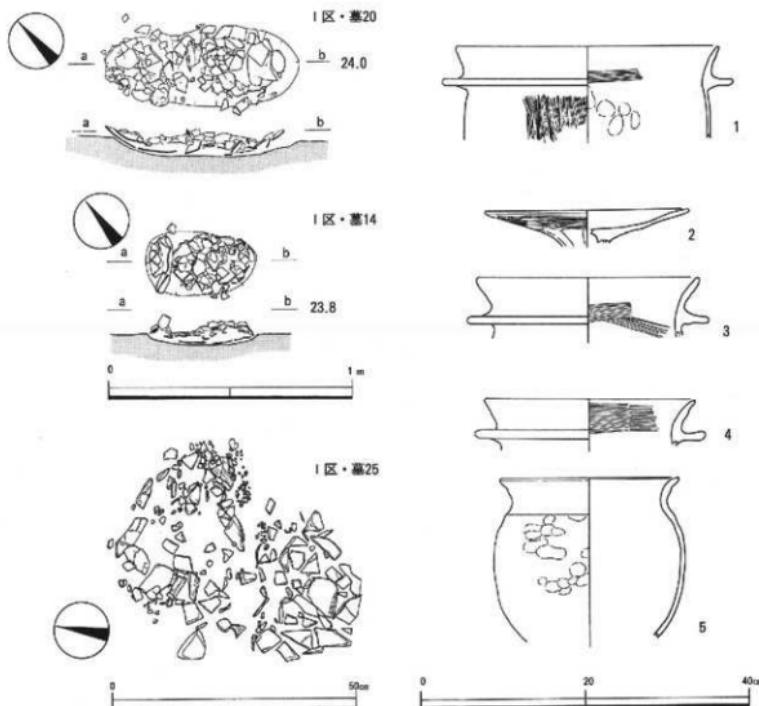
棺身は、89-1の土師器土釜のみを図示し得た。口縁部は短く外反し、鉢部上下のくびれが弱いことから、胴部が短くなりつつある段階の土釜であると推測される。本土器棺墓の時期は、その土師器土釜から8世紀後葉と考えられる。

I区・墓14//土器棺墓（第89図）

本土器棺墓も上部の削平が著しく、過半が失われている。掘方の規模は現状で長さ0.45m、幅0.25m、深さ10cmを測る。平面形は不明瞭ながら不整な隅丸長方形を呈し、主軸は北西—南東で方向ある。掘方底面は中央が緩やかに窪む。

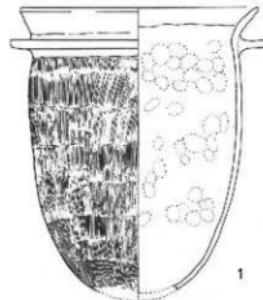
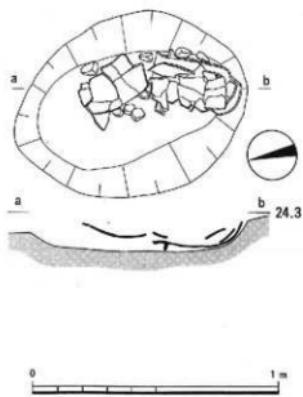
掘方内に北西側に口縁部を向けた89-3の土師器土釜を横位に置いて棺身とし、その口を89-2の土師器高杯の杯部で塞いでいる。その構造から被葬者は北西頭位であったと考えられる。

89-2の高杯は口径25cm、杯部高3.0cmと浅く広い杯部を有する。土釜は鉢部以上しか図示し得な

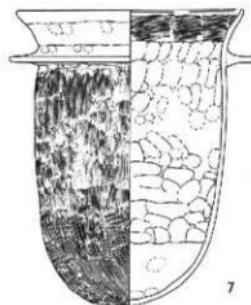
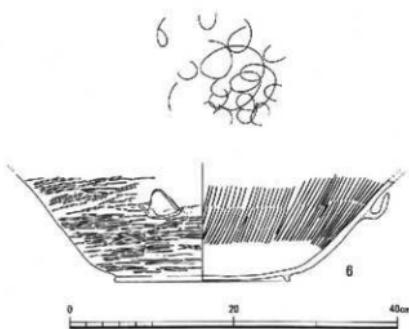
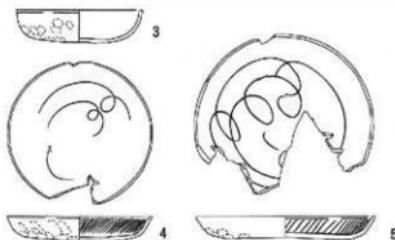
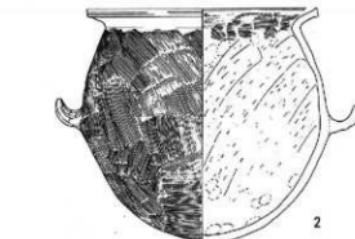
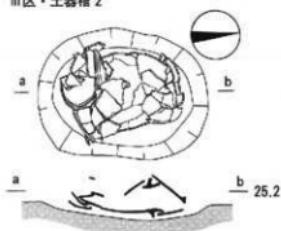


第89図 I区 墓20・墓14・墓25、出土遺物

III区・土器棺1



III区・土器棺2



第90図 III区 土器棺1・土器棺2、出土遺物

かったが、銅部上下のくびれはやや強い。

本土器棺の時期は棺身に使用された土師器から8世紀中葉～後葉と考えられる。

I区・墓25//土器棺墓（第89図）

本土器棺墓は著しい削平のため掘方および棺身とも旧形を留めず、棺身に使用された89-4の土師器土釜と89-5の土師器甕が0.5m四方に散乱しているのみであった。

棺身は土師器土釜と甕の口縁部が合口にされた構造と推測されるが、詳細は不明である。

89-4は銅部以上しか示し得なかった。口縁部は外反し、銅部下のくびれも明瞭である。89-5は口径と胴部最大径および推定器高がほぼ等しい。肩部にはヨコナデによる稜も認められる。

本土器棺墓の時期は棺身に使用された甕から8世紀中葉～後葉と考えられる。

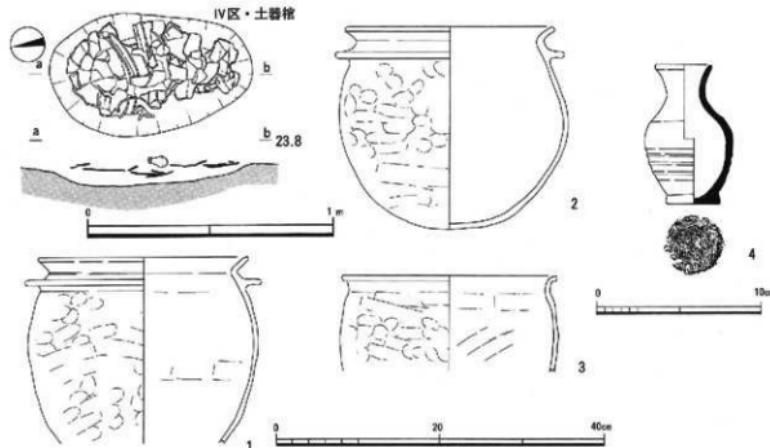
III区・土器棺1//土器棺墓（第90図）

本土器棺墓は上部が削平されており、特に南端部の削平が著しい。掘方の規模は長さ0.97m、幅0.47m、深さは最大13cmを測る。平面形は長円形を呈し、主軸は北～南方向である。掘方底面は南から北に向かって低くなっている、比高差は最大4cmである。

掘方内に土師器の土釜と把手付甕を合口にして置き、棺身としている。棺身の位置は掘方の南東側に寄っている。また棺身下には小礫が敷かれているが、これは棺の固定あるいは土釜と甕の高さ合わせのために敷かれたものと考えられる。棺身は掘方底面同様に南側が高くなっている、被葬者は南頭位であると考えられる。

90-1は北側棺身に使用された土釜である。口縁部は外反し、胴部長は胴部最大径を大きく上回る。90-2は南側棺身に使用された甕である。把手は大きく実用的で、胴部は丸いが頸部はあまり締まらない。口縁部正面にはヨコナデによる凹線が1条巡る。

本土器棺墓の時期は棺身に使用された土師器から8世紀前葉と考えられる。



第91図 IV区 土器棺墓、出土遺物

III区・土器棺2//土器棺墓（第90図）

本土器棺墓は上部が削平されていたが、棺の遺存状況は比較的良好であった。掘方の現状の規模は長さ0.69m、幅0.52m、深さ6cmを測る。平面形はやや不整な橢円形を呈し、主軸は北一南方向である。掘方底面は、中央が緩やかに窪む。

掘方内に口縁部を北に向いた土師器土釜を横位に置き、棺身としている。土釜の口縁部には、口縁部を打ち欠いたとみられる土師器盤を当てて蓋としている。また土釜の底部は欠損していて、その部分には土師器皿3枚が当てられていた。被葬者の頭位は不明である。

90-7は棺身に使用された土師器土釜である。口縁部は大きく外反し、胴部はほぼ垂直に伸びる。胴部長は胴部最大径を大きく上回っている。90-6は蓋に使用された土師器盤である。外面は密にヘラミガキが施され、内面には見込みに螺旋状暗文、体部には放射状暗文を施す。把手は比較的大きいものの、開きは小さく上端は体部に近接する。90-3~5は90-7の底部に当てがわれていた上師器皿である。90-4・5は外面調整はユビオサエとヨコナデのみ、内面は見込みに螺旋状暗文、体部に1段の放射状暗文を施している。

本土器棺墓の時期は棺身に使用された上師器から8世紀中葉と考えられる。

IV区・土器棺//土器棺墓（第91図）

本土器棺墓は上部が著しく削平されていて、棺身は過半以下が遺存していたにすぎない。掘方の現状の規模は長さ0.82m、幅0.5m、深さは最大8cmを測る。平面形は長円形を呈し、主軸は北一南方向である。掘方底面は南から北に向かって低くなり、比高差は3cmである。

棺身は合口にされた2個体の土師器十釜で構成されている。このほか掘方内北側から土師器甕が出土している。北側棺身の底部が復元し得なかったことから、底部はもとより欠かれていた可能性がある。なお北側棺身の検出位置からみて、土師器甕が北端の棺身となり3棺連結の土器棺墓であったとは考えられない。したがって土師器甕は北側棺身の欠損した底部に当てられていたのかも知れない。なお棺身は遺存している部分をみるとほぼ水平に置かれており、被葬者の頭位を推測することはできない。また棺身のほぼ中央にあたる位置で、須恵器瓶子1点が出土した。

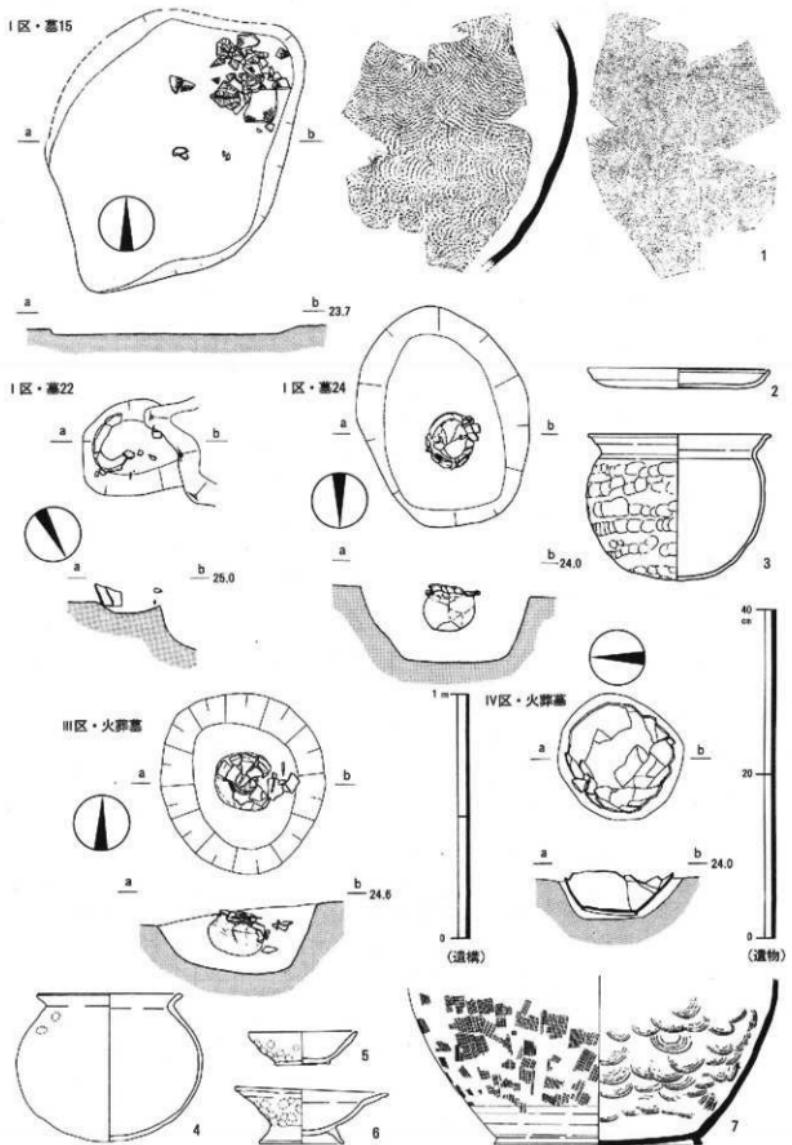
91-1は北側棺身に、91-2は南側棺身に使用された土師器上釜である。ともに口縁部は短く外反し、球形の胴部をもつ。ほぼ同形、同人である。91-3は91-1の底部に当てられていた可能性のある土師器甕である。頸部のくびれが弱く、口縁部の外反もごく短い。91-4は須恵器の瓶子である。完形品で高さ8.6cm、底径3.3cmを測り、底部に回転糸切りの痕跡を残している。棺内に副葬されたものとみられる。

本土器棺墓の時期は棺身となった上釜や副葬品の須恵器瓶子から9世紀後葉~10世紀初頭であると考えられる。

I区・墓15//火葬墓（第92図）

本火葬墓は大半が削平され、しかも他造構との重複もあって、遺存状況は極めて悪い。掘方の規模は長さ1.1m、幅1.0m、深さは5cmほどが遺存しているにすぎない。平面形は不整な五角形を呈している。主軸は現状で北東一西南方向であるが、本来の上端の形状が不明なため、明確ではない。

掘方の北東隅から須恵器甕の胴部と口縁部の破片が出土した。また胴部片に混じて鉄釘1本も検出された。掘方内の覆土は炭が混じる灰褐色土である。このような状況から、確実な根拠には欠けるものの、須恵器甕を骨蔵器とした火葬墓であったと考えられる。本火葬墓の時期は他の火葬墓の時期から8~9世紀代と思われるが、骨蔵器が破片のため確定は難しい。



第92図 I区 墓15・墓22・墓24、III区 火葬墓、IV区 火葬墓、出土遺物

I 区・墓22//火葬墓（第92図）

本火葬墓は上面の半分が削平され、また西側も攪乱を受けているため遺存状態は極めて悪い。掘方の現状の規模は長さ0.4m、幅0.4m、深さ6cmである。平面形、主軸とも不明である。

掘方底で正置された円筒埴輪の底部が検出され、同一個体とみられる口縁部や体部の破片が掘方内およびその周辺に散乱していた。そして埴輪内やその周辺から火を受けた骨片が出上していることから、円筒埴輪を骨蔵器として用いた火葬墓と考えられる。本火葬墓の時期は特定できない。

I 区・墓24//火葬墓（第92図）

本火葬墓は上面は幾分削平されているが、比較的残りはよい。掘方の規模は長さ0.9m、幅0.7m、深さは35cmを測る。平面形は梢円形を呈し、主軸は北—南方向である。掘方の底面は平坦であり、立上りは緩やかに屈曲する。

掘方内の中央や北寄りにおいて正置した92-3の土師器甕を身に、裏向けた92-2の土師器皿を蓋とした骨蔵器が検出された。骨蔵器は掘方底より12cmほど高い位置に掘えられている。青灰色粘質ブロックを混じえた暗灰褐色土で一旦掘方を埋め、その上に骨蔵器を置き、さらに同じ土で掘方内を埋戻している。この埋戻し土には炭や灰は混入していない。骨蔵器内には若干の土砂が流入しているが、人骨片が充満していた。なお副葬品は骨蔵器内外において認められなかった。

92-2は口径22.2cmの比較的大型の皿である。外調整は口縁部にヨコナデ、体部から底部にはユビオサエである。器高は2.4cmで、径高指数は10.8と小さい。92-3の甕は口縁部径と胴部最大径がほぼ等しい。また肩部にヨコナデによる稜が認められるが、それほど明瞭ではない。

骨蔵器に使用された土師器から本火葬墓の時期は8世紀後葉と考えられる。

I 区・墓18//火葬墓（第93図）

本火葬墓は上面を削平されているが、掘方の規模は長さ約0.7m、幅0.65m、深さ18cmを測る。平面形は隅丸方形を呈し、主軸は北—南方向である。覆土は上位の僅かな部分を除いて炭層であり、火を受けた骨片および土師器の甕の破片が混入している。その他副葬品とみられるものの出土はなかった。掘方壁面に被熱の痕跡は認められないことから、掘方内で直接受火されたのではないと考えられる。

I 区・墓8//火葬墓

本火葬墓は上面を削平されているが、掘方の規模は長さ0.7m、幅0.4m、深さ18cmを測る。平面形は隅丸長方形を呈し、主軸は北—南方向である。埋土は黒色土である。副葬品などは出土しなかった。なお掘方壁面に被熱の痕跡は認められなかった。

I 区・墓10//火葬墓

本火葬墓は上面が著しく削平されている。掘方の規模は長さ0.9m、幅0.5m、深さ7cmを測る。平面形は隅丸長方形を呈する。埋土は黒灰色土である。遺物は須恵器や土師器の破片が出土したのみで、副葬品などは出土しなかった。なお掘方壁面に被熱の痕跡は認められなかった。

I 区・墓11//火葬墓

本火葬墓は上面が著しく削平されている。掘方の規模は長さ1.1m、幅0.5m、深さは3cmを測るにすぎない。平面形は梢円形を呈する。埋土は黒灰色土である。遺物は須恵器や土師器の破片が出土したのみで、副葬品などは出土しなかった。なお掘方壁面に被熱の痕跡は認められなかった。

I 区・墓12//火葬墓

本火葬墓は上面に大きな削平を受けていないようであるが、北側を攪乱されており、正確な平面形、規模は不明である。掘方の規模は現存長0.8m、幅0.7m、深さ31cmである。埋土は炭混じりの黒色土

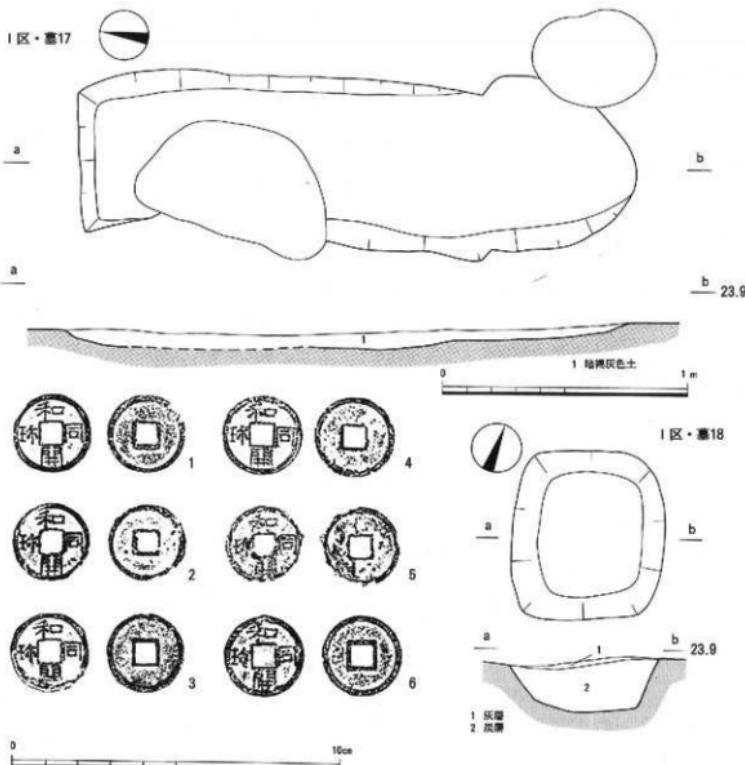
である。遺物は土師器片が出土したのみで、副葬品などは出土しなかった。なお掘方壁面に被熱の痕跡は認められなかった。

I 区・墓13//火葬墓

本火葬墓は北側を攢乱されており、正確な平面形、規模は不明である。掘方の規模は現存長1.9m、幅1.25m、深さ18cmである。平面形は不整な長方形と推測され、主軸は北西-南東方向である。埋土は炭混じりの黒色土である。遺物は土師器片が出土したのみで、副葬品などは出土しなかった。なお掘方壁面に被熱の痕跡は認められなかった。

I 区・墓16//火葬墓

本火葬墓は上面を削平されているが、全容を捉えることはできた。掘方の規模は長さ0.7m、幅0.45m、深さ11cmを測る。平面形は楕円形を呈し、主軸は北東-南西方向である。埋土は黒灰色土である。副葬品などは出土しなかった。なお掘方壁面に被熱の痕跡は認められなかった。



第93図 I区 墓17・墓18、出土遺物

I 区・墓17//火葬墓（第93図）

本火葬墓は上面を削平されているのに加え、北西部および南東隅に擾乱を受けている。掘方の規模は長さ2.3m、幅0.7m、深さ7cmを測る。平面形は北端部は長方形に近いが、南端部は歪みが大きい。主軸は北—南方向である。埋土は焼土混じりの暗褐色灰色土である。副葬品として和同開珎7枚が出土した。なお掘方壁面に被熱の痕跡は認められなかった。

I 区・墓19//火葬墓

本火葬墓は東半を他の遺構に切られているために正確な平面形、規模は不明である。現状の規模は長さ1.0m、幅0.9m、深さ30cmを測る。主軸方向も不明瞭である。埋土は黒色土である。副葬品などは出土しなかった。なお掘方壁面に被熱の痕跡は認められなかった。

I 区・墓21//火葬墓

本火葬墓は上面を削平されているが、掘方の規模は長さ0.7m、幅0.65m、深さ8cmを測る。平面形は円形を呈し、主軸は北—南方向である。埋土は黒色土である。遺物は須恵器や土師器の破片が出土したのみで、副葬品などは出土しなかった。なお掘方壁面に被熱の痕跡は認められなかった。

I 区・墓26//火葬墓

本火葬墓は上面を削平されているが、規模は長さ1.3m、幅1.2m、深さ20cmを測る。平面形は不整な円形を呈し、主軸は北—南方向である。埋土は黒色土である。副葬品などの出土はみられなかった。なお掘方壁面に被熱の痕跡は認められなかった。

III区・火葬墓//火葬墓（第92図）

本火葬墓は上面を削平されているが、骨蔵器自体はかろうじて欠損を免れていた。掘方の規模は長さ0.74m、幅0.68m、深さは最大25cmを測る。平面形はほぼ円形を呈し、主軸は北—南方向である。

掘方の中央に92-4の土師器甕を正置し、その口縁部に上向きに92-5の土師器杯を置き、さらに下向きに92-6の台付杯を蓋として被せている。骨蔵器は掘方底より6cmほど高い位置に据えられている。掘方は多量の木炭によって埋戻されており、木炭の中には材の形状を残すものもあった。また木炭屑から鉄釘2本が出土した。92-4の甕は口縁部が短い。また口縁部から肩部上端までをヨコナデした際の肩部の後が認められない。胴部最大径は口縁部径を大きく上回る。92-5は断面三角形の高台をもつ杯で、体部から口縁部にかけての開きが直線的である。口径も13cmと小さく、縮小化が進んでいる。92-6の台付杯は高台が発達しているが、杯部はまだ深さを保っている段階のものである。

骨蔵器に使用された土師器から本火葬墓の時期は9世紀末～10世紀前葉と考えられる。

IV区・火葬墓//火葬墓（第92図）

本火葬墓は過半が削平されており、骨蔵器も上半が欠失している。現状での掘方の規模は直径0.5mほど、深さは最大33cmを測る。平面形はほぼ円形で、断面は逆台形を呈する。掘方底面は水平かつ平坦である。

掘方底から1～3cmほど高い位置に92-7の須恵器甕が骨蔵器として据えられていた。現状では須恵器甕は掘方いっぱいに据えられており、骨蔵器を納めるだけの最小限の空間しかない。また上述したように上部が削平により欠失しているため、蓋の有無などは不明である。甕の胴部内には焼土や炭の混じった堆積土が詰まっていた。その他副葬品などの出土はみられなかった。

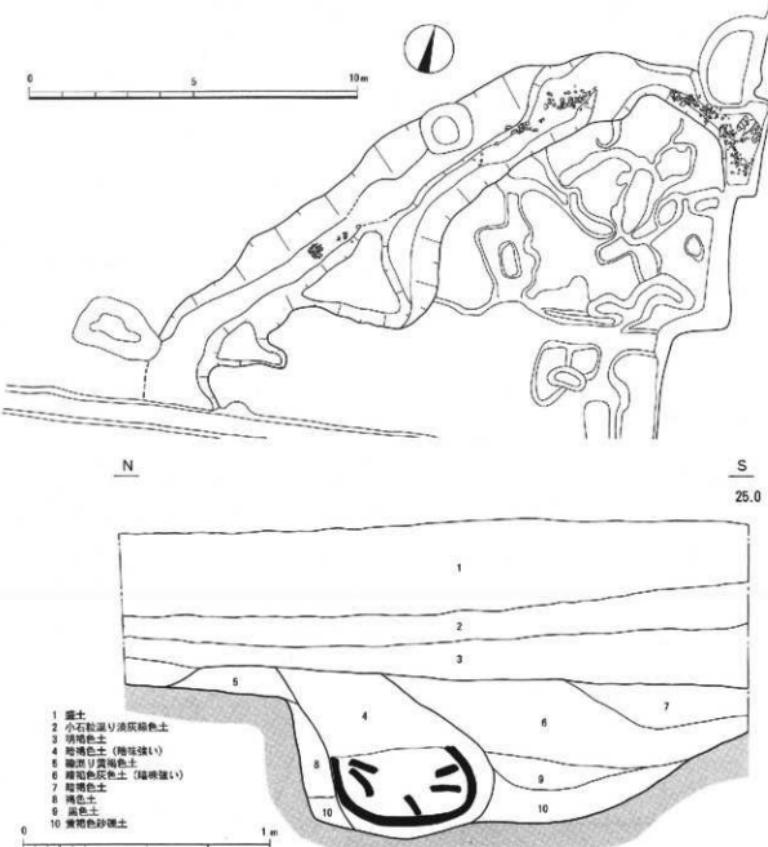
92-7は高台を有する甕で、遺存する胴部の最大径は42.8cmを測る。残存部分から判断して8世紀後葉頃に比定できるのではないかと考えられ、これが本火葬墓の時期といえる。

第9節 II区・溝3の調査

本溝については第6節および第7節II区・墓29において若干触れたが、ここで改めて報告する。

本溝はII区東辺の中央付近で検出された。東側は調査区外に延びておるが、1990年度にこの東側について調査した結果、溝はさらに南東に延び、幅7.5mの調査区内でも収まらないことが判明した。一方南西端は緩やかに弧状を描いて南方に屈曲しており、本溝の平面形態はコ字形あるいは方形を呈するものと推測される。なお北東と南西の屈曲部の内辺で16mを測る。

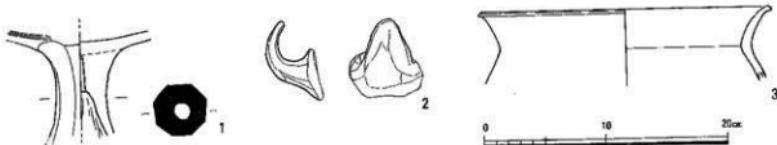
溝の幅は2.0~2.2mを測るが、掘り直しのためか、西辺の中程は南東に膨らんでいる。この部分のみは幅4.7mを測る。深さは現状で30~50cmほどであるが、削平のため著しく深度を減じている部分も認められる。また溝底面には起伏がある。このように掘削には丁寧さを窺うことはできず、導水を目的として形成されたものとは考えがたい。なお覆土は暗褐色土、褐色土が主体である。



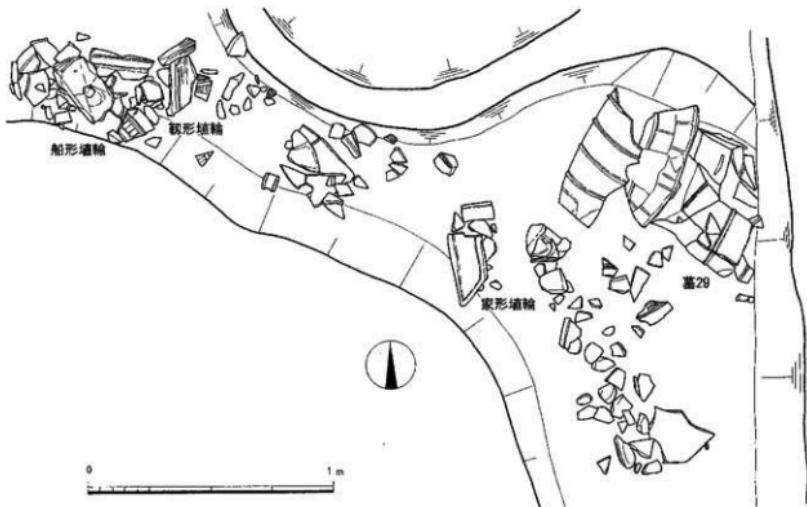
第94図 II区 溝3

II区東辺で溝は南東方向に屈曲するが、この部分に埴輪棺墓である墓29が設けられていた。上崩観察によって、墓29の掘方が溝の覆土を切り込んでいることが判明している。ただ実際の掘込みが溝内覆土のどこからなされたかは上面の削平のため明らかにしがたいが、溝内に棺身が納まるように設定されていることから、溝が埋まりきる以前に形成されたと考えられ、溝を意識した埴輪棺墓の占地であったことは確かである。また溝や溝状遺構内に埴輪棺墓が設けられたのは、調査地区内で本例が唯一である。溝内からはこの墓29を構成する埴輪のほか、多量の埴輪が出上した。埴輪は大半が円筒埴輪であるが、船、家、羽、鶏などの形象埴輪も認められる。これらの埴輪はいずれも破片であり、円筒埴輪、形象埴輪とも完全に復元できるものはなかった。また埴輪片の出土状況についてみると、3箇所の破片集中地点が認められる。墓29付近、墓29の西隣、墓29から西へ5mの地点である。削平による溝内遺物の消失を勘案しなければならないが、少なくとも数箇所の集中地点があったことになる。またごく少量ではあるが弥生土器と奈良時代の土師器が埴輪片に混じって出土した（第95図）。

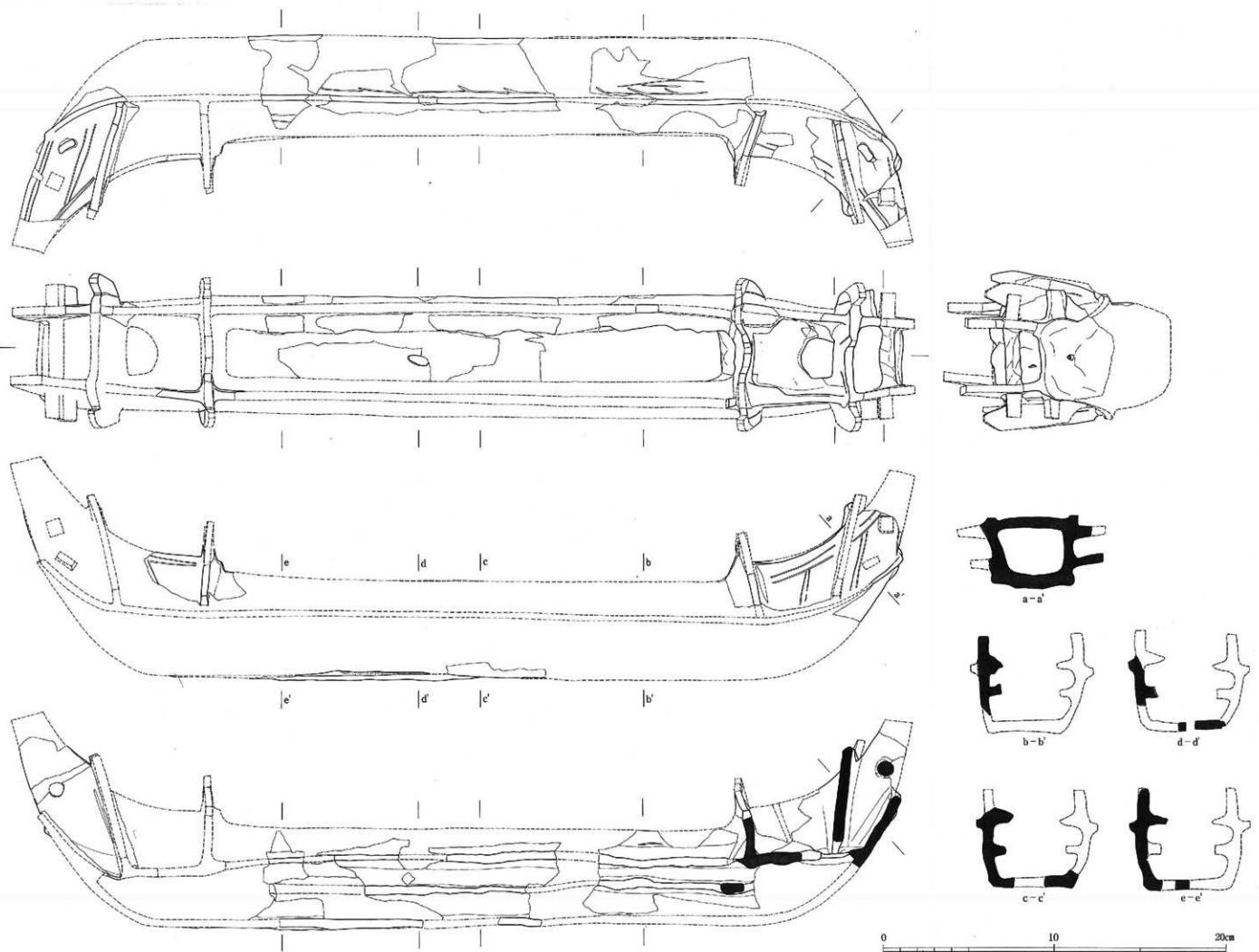
この溝3の性格について考えると、コの字形もしくは方形に屈曲する平面形態、掘削の粗雑さ、出土遺物の大半が埴輪片であり後代の遺物をほとんど含まない、などの点から方墳の周濠ではないかとみられる。第6節で報告したIV区、V区の方墳はそれぞれ一辺9mおよび10mの小型墳であるが、と

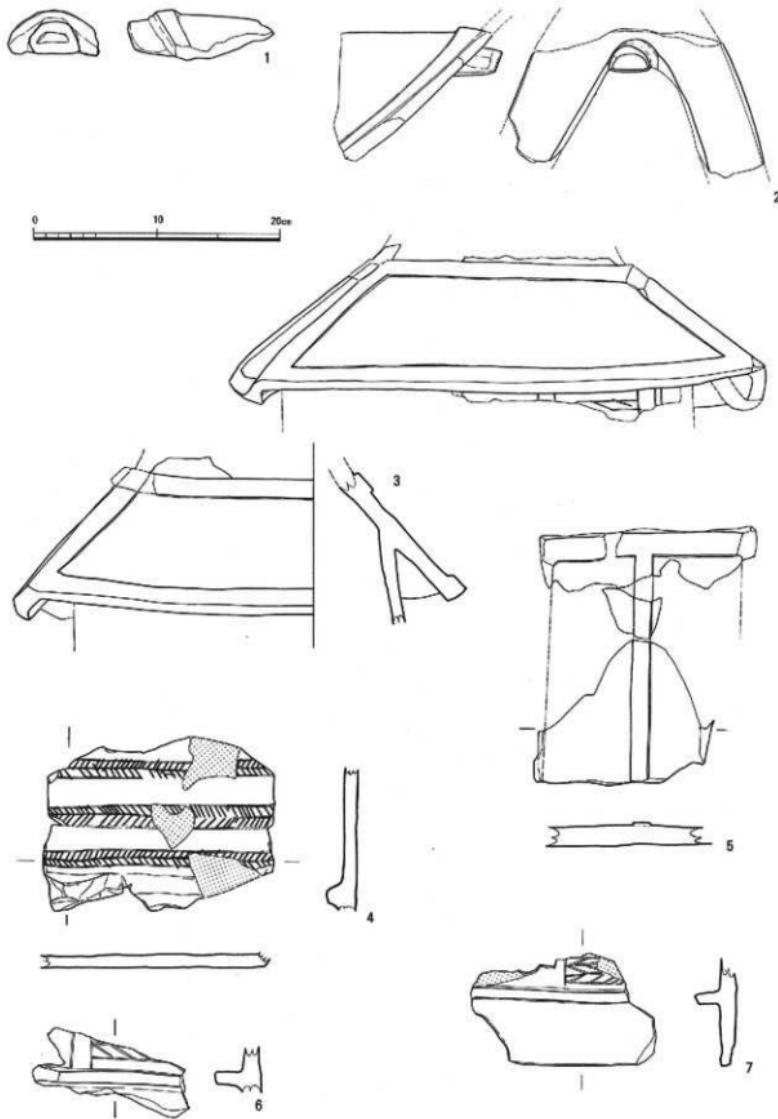


第95図 II区 溝3出土遺物

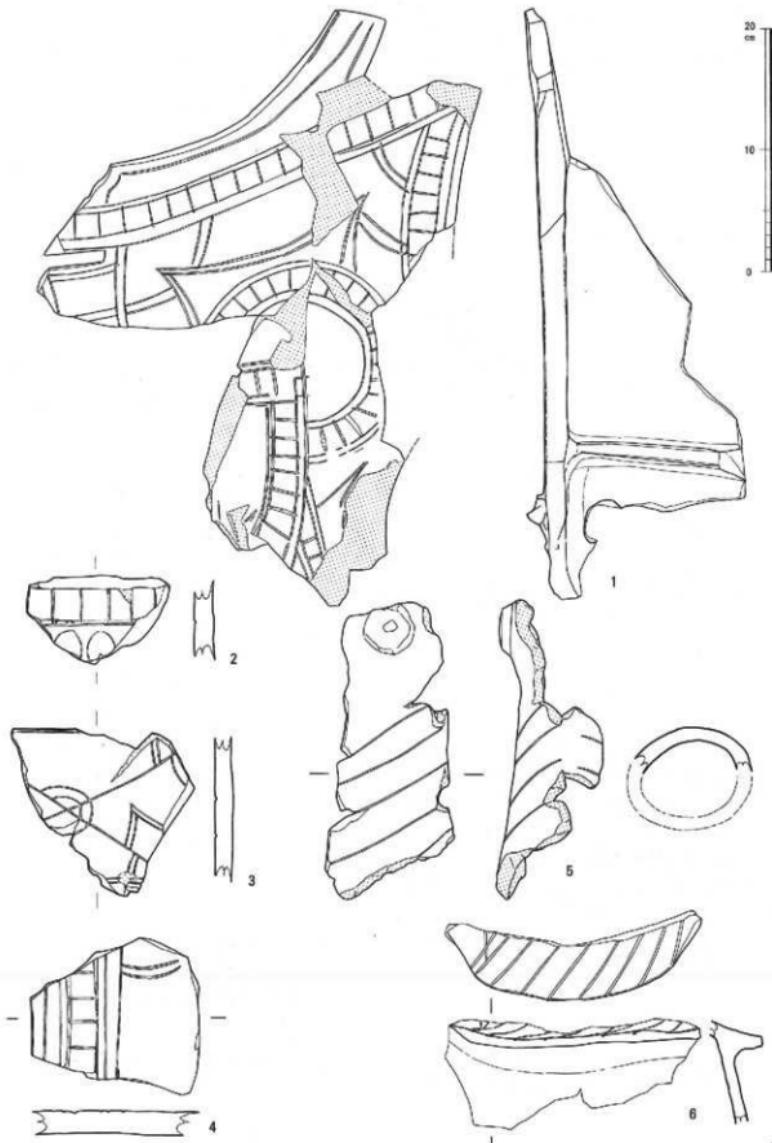


第96図 II区 溝3埴輪出土状況





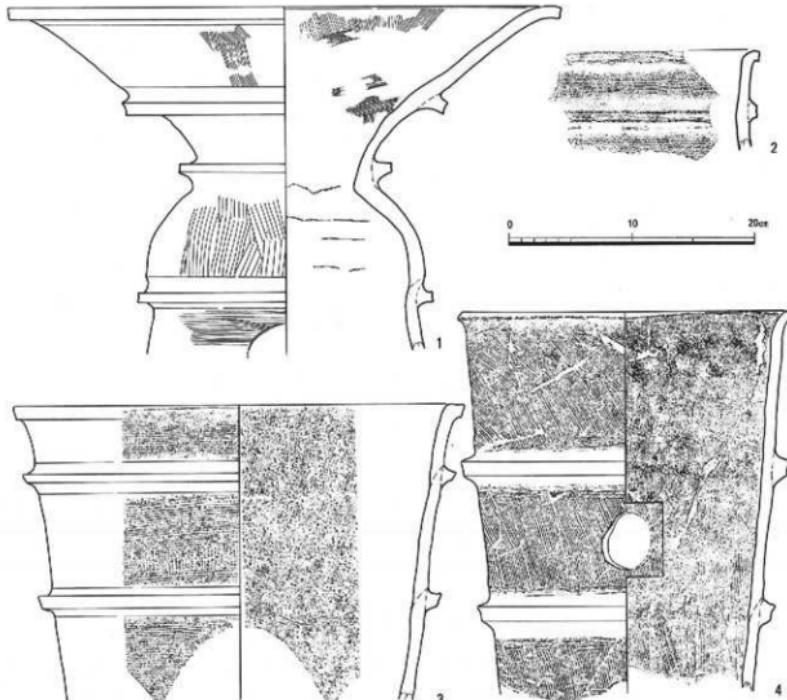
第98図 II区 溝3出土形象埴輪(1)



第99図 II区 溝3出土形象埴輪(2)

もに墳丘は消失して周濠のみが検出されたにすぎず、しかも削平のため周濠の遺存状況すら悪かった。またIV区の方墳の周濠には7世紀代以降の遺物が多量に混入していた。こうした状況を考えると、この溝3を方墳の周濠と捉えることに問題はないといえよう。

97-1は船形埴輪である。船形埴輪は舳先、艤の部分と船底、舷側部が残存する。完全に接合できないため、全長は不明であるが、船体中央の幅は18cm、高さ15cm程度になると推測される。舳先、艤には横木2本が両舷側板を貫通して取り付けられている。さらに両舷側板は堅板とその内側の隔壁によって二重に挟み込まれる形で支えられている。また船底部と舷側板の接合部外面には次帶が巡り、その内面にはデッキが張られている。内側の隔壁はデッキの上に載っている。なお舷側板にはヘラ描により沈線が施されているほか、船体内外面には赤色顔料が遺存している。98-1~7は家形埴輪、99-1~4は軋形埴輪、99-5・6は鶴形埴輪、100-2~4は円筒埴輪、100-1は朝顔形埴輪である。いずれも破片である。円筒埴輪には外面2次調整にB種ヨコハケが施されたものと、1次調整のタテハケのみのものがみられる。また100-2・3は口縁部と1段目突帯との間隔が狭く、通常の円筒埴輪と異なっている。埴輪棺墓に使用された専用棺の可能性もある。



第100図 II区 溝3出土円筒埴輪、朝顔形埴輪

第10節 中世の建物群

IV区東半において中世の掘立柱建物7棟、柵1列が検出された。また建物周辺に分布する溝、土坑、小穴のうち溝3・4や上坑30などいくつかのものは当該時期であるとみられる。ただし掘立柱建物の時期比定については掘立柱建物2、3を構成する柱穴のそれぞれ1基から瓦器片が出土したという脆弱な根拠によっていることを認めざるをえない。しかしIV区において盾塚古墳周濠や包含層中に多量の瓦器をはじめとする中世の遺物が含まれ、しかも上層観察から中世に大規模な土地改変があったと考えられることから、当区やその周辺で当該時期に活発な生活が営まれていたと予測される。そしてその痕跡を掘立柱建物群に求めて無稽ではあるまい。以下に各掘立柱建物について概要を報告しておく。

掘立柱建物1

東西、南北各2間の南北棟である。主軸を北北西-南南東方向にとる。柱穴の長径は0.4~0.7m、柱痕は16~20cmを測る。検出された7棟の中で、この建物のみ平面的に柱痕が捉えられた。

掘立柱建物2

南北2間、東西3~4間の東西棟である。西側が狭くなる不整な形状を呈している。また南辺から1.3~1.6m内寄りに中仕切りをなすと考えられる柱穴4基が東西に並んでいる。主軸は東-西方向である。柱穴の長径は0.2~0.6mである。

掘立柱建物3

東西は現状4間、南北はおそらく1間とみられる東西棟である。掘立柱建物2と重複する位置にある。主軸を東北東-西南西方向にとる。柱穴の長径は0.2~0.55mである。

掘立柱建物4

南北3間、東西2間の南北棟である。主軸を北北西-南南東方向にとる。柱穴の長径は0.25~0.4mである。建物規模は掘立柱建物2より一回り大きいが、柱穴は大きさも深さも劣っている。

掘立柱建物5

東西、南北各2間の総柱建物であり、南北隅に1間四方の拡張部が付属している東西棟である。主軸を北北西-南南東方向にとる。柱穴の長径は0.08~0.3mである。拡張部については、西・中央桁行の延長にあり、建物本来の柱穴と規模の等しい2基の小穴を根拠に存在を推定した。

掘立柱建物6

東西3間、南北2間の東西棟である。主軸を東-西方向にとる。柱穴の長径は0.2~0.7mである。

掘立柱建物7

過半が調査区外にあるため構造や規模は明らかでないが、北-南方向に主軸をとる梁行7.5mほどの建物と推測される。柱穴の長径は0.35~0.6mほどである。

柵

4基の直線的に並ぶ小穴からなる。主軸をほぼ東-西方向にとる。

これらの建物や柵は北北西-南南東方向あるいはこれに直交する方向に主軸をとるもの(建物1・3・4・5)、と北-南方向あるいはそれと直交する方向に主軸をとるもの(建物2・6・7、柵)に2分される。掘立柱建物2と3が重複していることから、この主軸の違いは各建物群形成の時期差を示していると推測される。5区にわたって発掘調査が行われた府宮道明寺南住宅地区で唯一まとまりをもって中世の遺構が検出されたのであるが、この付近において一過的でない生活域が形成されていたといえる。



第101図 IV区 中世の建物群

第11節 ポンプ室ほかの調査

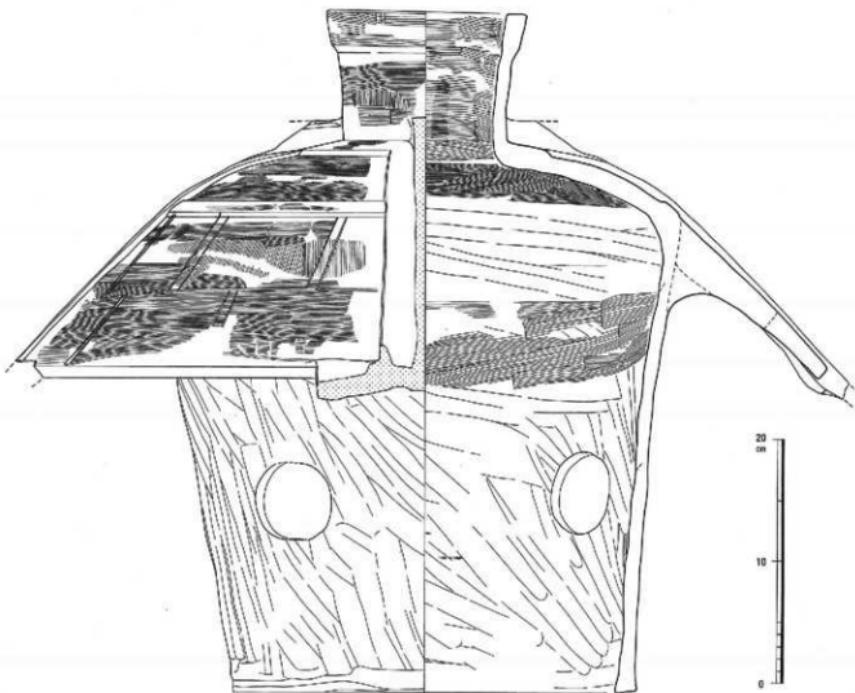
雨水管等埋設部分など、1988・89年度に調査が行えなかった部分について90年度に発掘調査を実施した（第102図）。

このうち90-①・⑤区では、先述したII区・溝3の続きが検出されたとともに、埴輪棺墓も発見された。この埴輪棺墓は墓29の続きとみられるが、この推測が正しければ、掘方の全長は推定3.7m、棺の全長は閉塞部を含めて3.1m程度となり、府営道明寺南住宅地区で検出された

埴輪棺墓中で最長となる。連続した2つの埴輪棺墓の可能性もあるが、南東小口部閉塞に使用された衣蓋形埴輪が墓29の北西小口部閉塞に使用された衣蓋形埴輪と類似点が多く、さらに筒部に円筒埴輪片をあてるという閉塞状況も墓29と一致していることから、同一の埴輪棺墓と捉えておく。



第102図 ポンプ室ほかの調査位置



第103図 90-⑤区出土衣蓋形埴輪

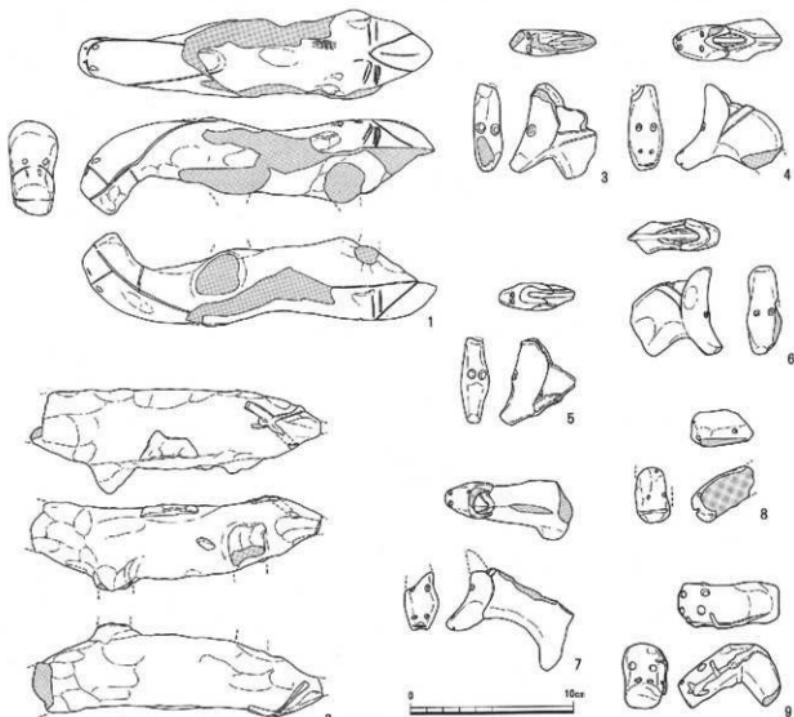
第103図は南東小口部の閉塞に使用された衣蓋形埴輪である。笠部径70cm、器高56cmの大型品である。笠部の頂部に、軸受部を取りまくよう突帯を巡らし、ここから四方に肋木が伸びるが、本例では肋木端部および肋木に付く飾りはほとんど欠損している。笠部中位にも突帯が巡らされているが、笠部裾の沈線とこの突帯の中間に沈線を1条巡らせて笠部下半を2段に分割し、それぞれの段を2条1組の沈線で区画している。それぞれの区画は互い違いに配されている。また笠部外面には赤色顔料が塗られている。52-1とは、笠部以上についてほぼ同形、同大である。

90-⑤区では別の埴輪棺墓を1基検出している。削平と擾乱のため、棺身は著しく壊れている。したがって詳細は不明だが、掘方の規模はおよそ長さ3.0m、幅1.0mである。平面形はやや歪な隅丸長方形を呈し、主軸はほぼ東-西方向である。東小口部は円筒埴輪片で閉塞されている。

この90-①・⑤区以外では、90-③区で小穴が検出されたが、90-②・④・⑥区では造構の存在が全く認められないという状況であった。

第12節 出土遺物-土馬-

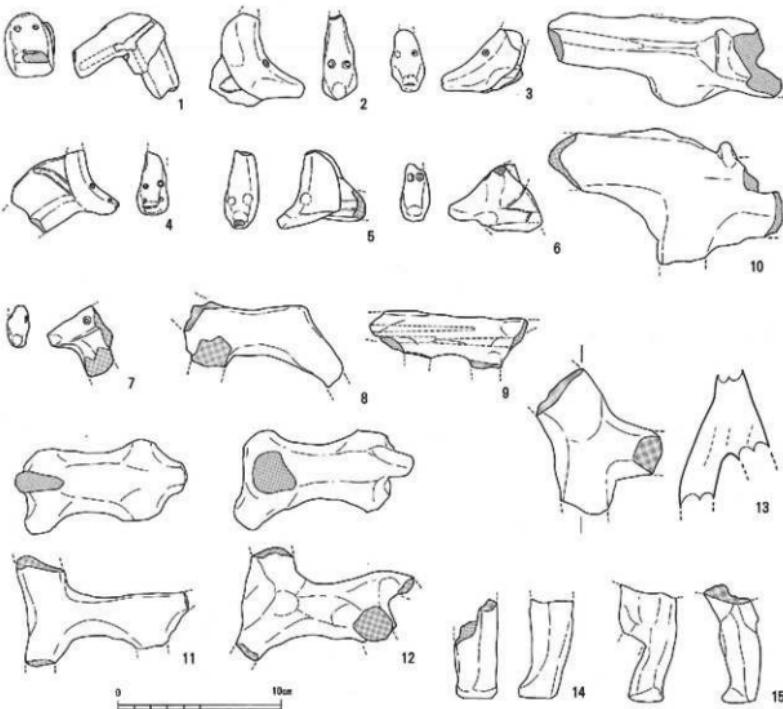
1992年度および1995年度の調査により多量の土馬片が出土した。それ以外の3箇年度の調査でも土馬の破片は出土しているが、いずれも10点にも満たない数である。これに対し1992年度調査では110



第104図 IV区出土土馬

点、1995年度調査では84点が出土している。この点数の多さは盾塚古墳あるいは鞍塚古墳の周濠から出土したものが多いことに起因している。破片の部位については70%ほどが脚部であり、頭部あるいは頭部から胸部にかけての資料は20%、それ以外が10%である。また馬具の表現がみられるものから、鼻孔表現の欠落した扁平な頭部を有するものまであり、時期差のあることが窺われる。

104-1は水平に延びるやや太めの胸部とやや下向きの頭部を有する。頭部は円筒形で沈線により面繋や手綱が表現されている。また尻繋と思われる表現が尾部にみられる。104-2も太めの胸部破片である。尾部に粘土紐により尻繋の表現がなされている。太めの胸部には105-10もある。104-9は円筒形の頭部破片であるが粘土紐で轡、引手、手綱が表現されている。同様のものには105-1もある。また105-9はさほど太くはない胸部資料であるが水平に延びる胸部中に挿入孔が設けられており、比較的古い段階の土馬と考えられる。これに対し三日月形の頭部をもつ土馬のうちでも104-3・5・6、105-2・5・6は鼻孔や口の表現をもたないもので、府営道明寺南住宅地区で出土した土馬の中では最も新しい段階のものとみられる。また脚部については大半が細長い角状であるが、105-14・15のように短めの方筒状のものもみられ、これらは古い段階の脚部といえよう。



第105図 V区出土土馬

第13節 小結

5箇年度、5区にわたって発掘調査がなされた府営道明寺南住宅地区であるが、これまで記してきたように多くの重要な調査成果を得ることができた。ことに注目されるものとして

① 盾塚古墳の全体の形状や規模がほぼ明らかとなった。ことに造出部が付設されていることが明らかとなった意義は大きい。

② 鞍塚古墳の墳形が帆立貝式前方後円墳であり、しかも造出部を有することが明らかとなった。墳丘規模についても全体の推測がほぼ可能となった。

③ 方墳3基のほか埴輪棺墓31基（含95-⑤区）、上墳墓9基、木棺墓3基、土器棺墓7基、火葬墓16基および密集した十坑200基が検出され、古墳時代中期から平安時代前半頃まで一帯が墓域とされていたことが明らかとなった。

④ IV区東半部という限定的な地点に中世の掘立柱建物や柵、溝が集中して検出された。当該期としては府営道明寺南住宅地区で唯一まとまりをもった遺構群である。

⑤ III区で弥生時代の堅穴住居および土坑が、II区では同じく溝や土坑が検出され、調査区北半に弥生時代の遺構が存在することが確認された

という点を挙げることができよう。

土師の里遺跡の既往の調査の中でも、府営道明寺南住宅地区は調査面積が広く、まとまりのある遺構群を検出している。この①～⑤の成果はいずれも土師の里遺跡を特徴付けるものといえるが、ここに①～③の点は重要である。

盾塚古墳と鞍塚古墳は5世紀前葉から中葉にかけて順次築造されたと考えられるが、V区での両墳の周濠は最短3mの距離しかなく、調査区東側ではさらに近接している状況を示していることから、両墳の周濠は一部でほぼ接していたとみられる。このことは、両墳が占地場所を等しくして漸次築造されたというだけに留まらず、系譜上密接な関係を有していたことを予測させる。さらにとともに墳形が帆立貝式前方後円墳である点からすると両墳の被葬者に付与された階層性が貫徹していたとともに、王権組織での占有位置が継承されていたとみられよう。

ところで両墳は主軸方向が異なっており、盾塚古墳が南北方向をとるのに対して鞍塚古墳では東西方向である。この違いは、主軸方向を揃え、ともに前方部を墳丘南側とした場合、鞍塚古墳の前方部と盾塚古墳の後円部の間が10mほどの距離しかなくなり、前方部前面が狹隘となるのを避けたためかも知れない。また、両墳で認められた造出部もそれぞれ付設場所が異なっている。ただしともに墳丘に対して南西部にあり、造出部から眺む方向が等しい点は偶然であろうか。

盾塚古墳では前方部、造出部および後円部墳丘第1段目のそれ一部で円筒埴輪列が検出され、埴輪回頭状況の一端が窺えた点も貴重な成果といえる。鞍塚古墳では樹立状態の埴輪は全く検出されなかったが、墳丘の類似性から盾塚古墳の配列状況と一致していたとみてよいのではなかろうか。その正否はおくとしても両墳は位置関係のみならず墳丘構造における諸要素も極めて似ていたといえよう。

こうした2つの古墳の周囲に方墳を中心とする埋葬施設が構築された。府営道明寺南住宅地区で検出された古墳時代から平安時代前半頃までの埋葬施設の種類と数は先述した通りであるが、I区とIII区との間で藤井寺市教育委員会による発掘調査（HJ91-3）が実施され、埴輪棺墓から構成される埋葬施設3基を有する一辺12mの古墳1基、埴輪棺墓5基、土墳墓1基、火葬墓2基が検出されており、先の数量に付加する必要がある。いずれにせよ、こうした埋葬施設が府営道明寺南住宅地区を囲

む範囲内で広がっている一方、後述する既往の調査成果をみると、この地区周辺にはいずれの種類の埋葬施設の分布も広大していないことは注目する必要がある。

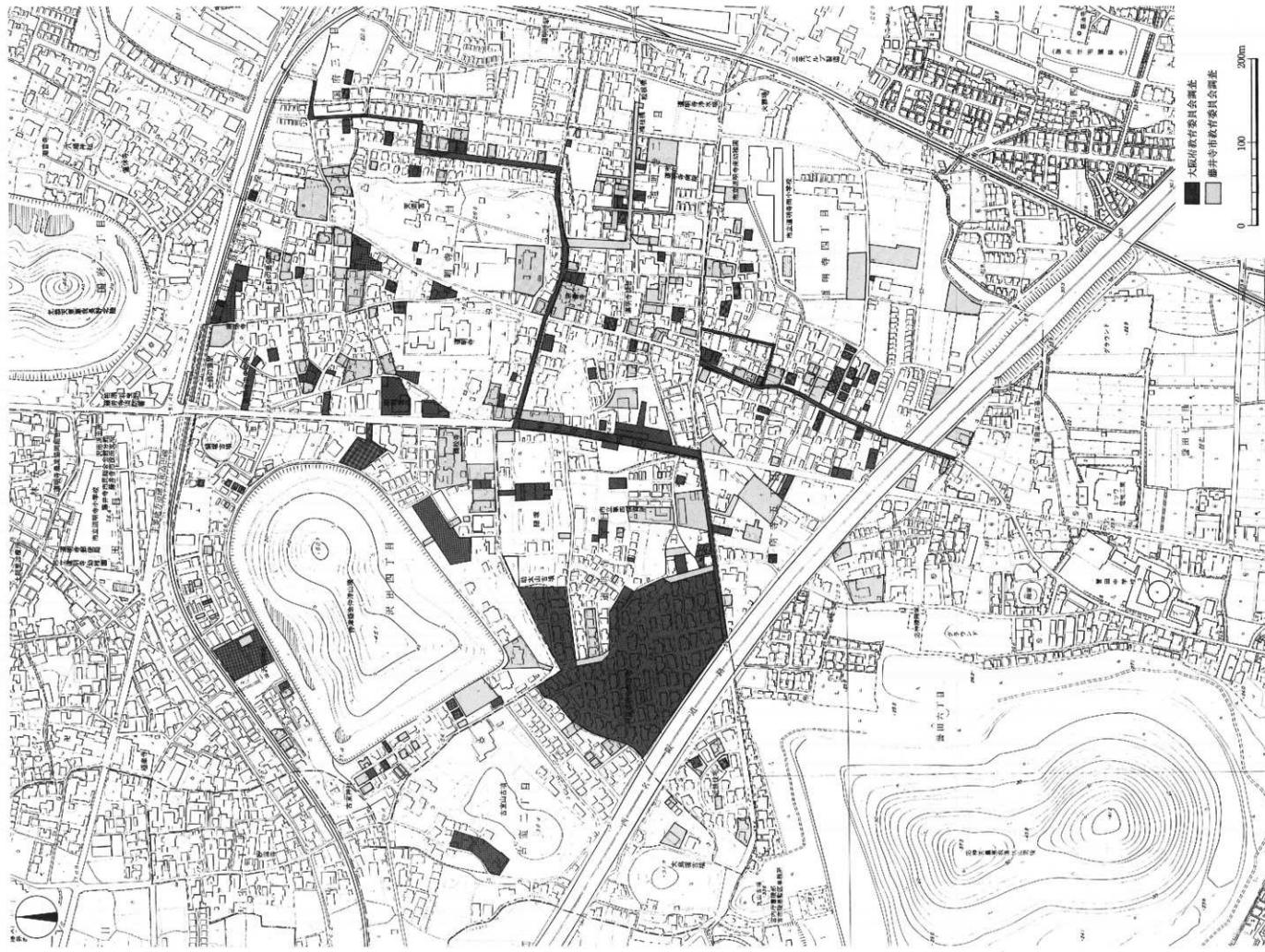
この点については、一つは地形的な状況が背景にあるとみられる。すなわちII区西側やIV区東側で認められた外方へ地形の下降状況からすると、この府営道明寺南住宅地区が割合に条件のよい占地場所であったと考えられる。

さらにもうひとつの、そしてより重要な理由として盾塚古墳および鞍塚古墳の築造とこれらの埋葬施設の形成には関連があると推定できよう。つまり各埋葬施設は個別的に占地したのではなく、両墳の築造を契機とした墓域の形成とみれまい。各埋葬施設が規則性のある配列を示していないことから、古墳との関連を想定するのは難しいとの見解も可能ではある。しかし、各種の埋葬施設が一定範囲内で混在し、その中には下級官人の墓とみられる石鈴帶が出土したI区・木棺墓1なども存在していることから、墓域の認識が埋葬施設構築者にあったことは確かであろう。そして埋葬施設の中で盾塚古墳の築造時期である5世紀前葉より遡るもののが認められないこと、さらに府営道明寺南住宅地区内にあって、谷状地形を除いて各埋葬施設が分布しているとはいえ、地点により分布に粗密があり、占地にあたってなんらかの規制があったとみられること、そしてこれまでの調査において盾塚古墳および鞍塚古墳の周濠内に埋葬施設が設けられた痕跡が認められないことから、各埋葬施設を集積させる墓域形成と盾塚古墳、鞍塚古墳の築造は関連すると考えたい。

各埋葬施設は先述したように古墳時代中期から平安時代前半頃まで及んでいるが、各時代ごとに種類の異なる埋葬施設が存在していることから、墓域を形成した集団内に階層差が存在したことは明らかといえよう。そしてその階層差を数百年にわたって埋葬施設の種類の違いとして表し続けていることから、そこにこの集団の内的規範の強さを窺うことができるようと思われる。



府営道明寺南住宅地区・III区 現地説明会風景



第106図 土師の里遺跡既住の調査区位置

III 土師の里遺跡の調査

第1節 既往の調査

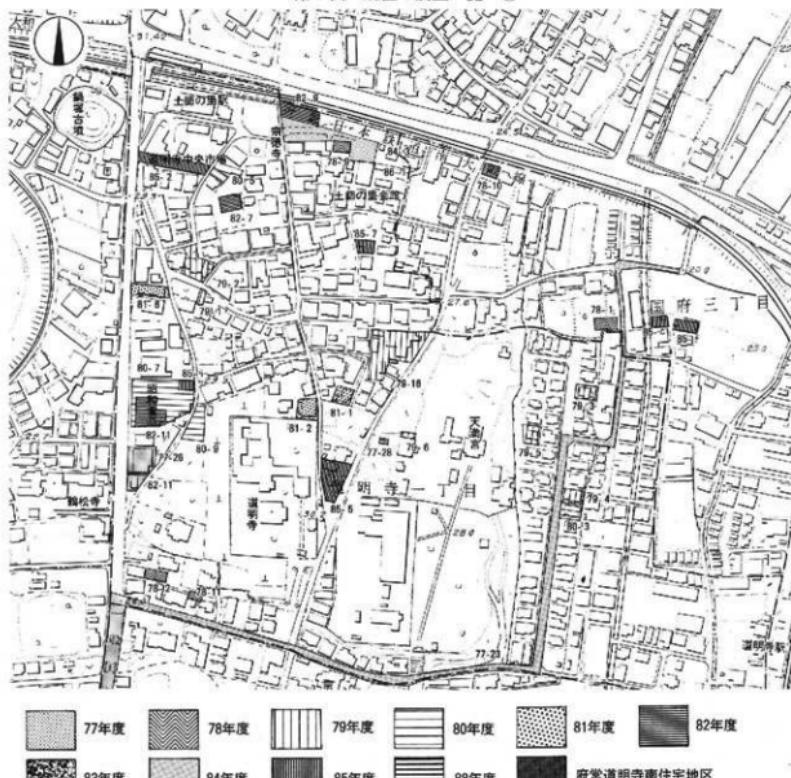
本府教育委員会では1970年代以降、本遺跡の調査を実施し、試掘、立会も含めると、その件数は120件を越える。ここではその概略を、年度ごとに表1①～⑥に、地区ごとに第107～111図に示すこととし、次節以下では古墳時代および飛鳥・白鳳時代の調査成果について報告する。

年度	調査区	申請者	所在地	用途	半島 面積	調査 内容	担当者	調査結果	備考
1977	21	大坪 克次	藤井寺市道明寺4-423-5						
1977	22	細田 道樹	藤井寺市道明寺2-1-10	住宅建設	170	発掘 高島	[遺構]古墳～奈良：墓穴住居、獨立建物、須恵器、埴輪、瓦紋		
1977	23	大阪 ガス	藤井寺市道明寺1～6	ガス工事	発掘 京本	[遺構]古墳～奈良：墓穴住居性遺物(陶文土器、土器等)、須恵器			
1977	24	辻木 義一	藤井寺市道明寺6-180	共同住宅	250	発掘 芝	[遺構]古墳～奈良：墓穴住居、須恵器、土器等、須恵器、埴輪、瓦紋		
1977	25	中小路 伸夫	藤井寺市道明寺6-455			発掘 高島			
1977	26	杉分義大	藤井寺市道明寺1-4-33	分譲住宅	発掘 京本	[遺構]奈良：溝、柱穴〔遺物〕サヌカイト、土器等			
1977	27	山田千代	藤井寺市道明寺6-441-4			発掘 京本			
1977	28	西村城亮美	藤井寺市道明寺1-682			発掘 京本			
1977	29	辻木 義一	藤井寺市道明寺2-662-13			発掘 京本			
1977	30	藤井寺市水道局	藤井寺市道明寺4	水道工事		発掘 京本	[遺構]弥生～奈良：七塁、杜穴、須恵器、陶文土器、弥生土器、上断器、須恵器、瓦器等		
1977	31	藤井寺市水道局	藤井寺市道明寺4	水道工事		立会 京本	[遺物]古墳後期～藤倉：土器		
1978	1	鈴木 駿治	藤井寺市国野3-61		531	発掘 京本			
1978	2	三浦 彰彦	藤井寺市道明寺1		299	発掘 京本	[遺構]古墳：土師の壁1号墳〔遺物〕鐵針、土師瓶、瓦器等		
1978	3	石村 康	藤井寺市道明寺2-645	店舗建設	169	発掘 佐久間	[遺構]弥生：溝、古墳；溝、飛鳥～高良：石組排水他、平安～室町：土坑、溝、柱穴、近世：溝〔遺物〕鐵文土器、弥生土器、土器等		
1978	4	大方 康葉	藤井寺市道明寺6-455		910	発掘 高島	[遺構]古墳：二ツ塁古墳周溝〔遺物〕：鐵器		
1978	5	京 善 寺	藤井寺市道明寺2-636	寺院建築	145	発掘 芝	[遺構]古墳：溝、白塗～奈良：溝、小穴、奈良～平安：焼土、壘地凹、平安～鎌倉：溝、土坑、室町：草堆状堆积、溝、瓦窟り地〔遺物〕瓦、瓦、土器等		
1978	6	土居 雄幸	藤井寺市道明寺6-634-28		110	発掘 芝	[遺構]古墳また平安：墓穴状窓込み、獨立建物〔遺物〕：須恵器		
1978	7	松下本泰栄	藤井寺市道明寺4-598-1		159	発掘 高島	[遺構]古墳～奈良：溝、上坑、中世：溝、井戸、土坑、近世：溝、土坑、小穴〔遺物〕：鐵器、瓦、馬骨		
1978	8	谷口順一	藤井寺市道明寺4-579		218	発掘 京本	[遺構]西文：土器積、集積土坑、古墳：墓穴住居、土坑		
1978	9	日田 一馬	藤井寺市道明寺1-514-2		175	発掘 京本			
1978	10	東 真理	藤井寺市国野3-27-25		247	発掘 高島	[遺構]川世：埋葬		
1978	11	安川 秀彦	藤井寺市道明寺6-13		219	発掘 高島	[遺構]古墳：埴輪棺蓋、上坑		
1978	12	中村 方寛	藤井寺市道明寺6-323		233	発掘 森井	[遺構]古墳：墓穴住居、溝、古墳～近世：小穴		
1979	1	道端 正一	藤井寺市道明寺1-555-2	個人住宅	97	発掘 佐久間	[遺構]古墳：溝古墳、埴輪棺蓋、板、〔遺物〕埴輪、刀子、土器等		
1979	2	藤田哲三	藤井寺市道明寺1-556	個人住宅	62	試掘 松岡			
1979	3	藤田 德一	藤井寺市道明寺1-682-40	個人住宅	166	試掘 京本			現代の池跡
1979	4	出立 欣次	藤井寺市道明寺1-682-24	個人住宅	75	試掘 京本	[遺物]古墳～奈良：土器等		
1979	5	山本 附一	藤井寺市道明寺1-682-31	個人住宅	69	発掘 佐久間	[遺物]土師器、須恵器		現代の池跡
1979	6	藤種保洋会	藤井寺市道明寺1-682	個人住宅	60	試掘 佐久間	[遺物]土師器、青磁		
1979	7	出口 守	藤井寺市道明寺2-557	個人住宅	187	発掘 佐久間	[遺構]奈良：溝、小穴〔遺物〕埴輪、須恵器、土器等	1区の東は上筋寺の西区西森ヶ	
1979	8	松田梅乃助	藤井寺市道明寺4-218-1	個人住宅	89	発掘 松村	[遺構]飛鳥：小穴〔遺物〕土師器、埴輪、土器、訪華車輪		
1979	9	遠藤 弘	藤井寺市道明寺4-220	個人住宅	123	発掘 佐久間	[遺構]独立建物〔遺物〕土師器、須恵器		

第1表 既往の調査一覧 ①

年度	調査区	申請者	所在地	用途	申請面積	調査内容	担当者	調査結果	備考
1979	10	龟田太津也	藤井寺市道明寺4-225-10	個人住宅	211	免 税	佐久間	遺構:古代・中世:孤立柱建物、土塁、小穴龜【遺物】埴輪、上蓋器、頭部器	
1979	11	森田文治郎	藤井寺市道明寺4	個人住宅	270	免 税	泉 木	遺構:古墳~後倉:溝、小穴龜【遺物】土師器、製塼土器、瓦、鐵錢、骨	
1979	12	中路 正信	藤井寺市道明寺6-3-23	個人住宅	246	免 税	泉 木	遺構:古墳~後倉:溝、小穴龜【遺物】土師器、製塼土器、瓦、鐵錢、骨	
1979	13	米谷秀雄	藤井寺市道明寺6-229-2	個人住宅	210	免 税	松岡	遺構:義文・小穴・古墳~飛鳥:孤立柱建物【遺物】埴輪土器、石碑、青年土器、埴輪他	
1979	14	相田兼生	藤井寺市道明寺6-434-5	個人住宅	311	免 税	佐 田	遺構:時期不明:溝【遺物】埴輪	
1979	15	太田 嘉	藤井寺市道明寺6-467-1	共同住宅	2159	免 税	坂 田	遺構:古墳・窓穴住居他:奈良:土烈壇り台、中世:孤立柱建物【遺物】須恵器、金銅製金具、綠釉陶器他	
1979	16	松葉ハウス	藤井寺市道明寺1-5-10、6-1・2	共同住宅	1036	免 税	岩 岐	遺構:高良・孤立柱建物、上塗椎他、平安・満院【遺物】土師器、須恵器、金銅製金具、綠釉陶器他	
1979	17	大見 宏	藤井寺市道明寺4-219-3・4	分譲住宅	491	免 税	松 月	遺構:古墳・窓穴住居、古墳~飛鳥:孤立柱建物他、中世:唐【遺物】埴輪土器、青年土器、土師器、黑志器、土馬	

第1表 既往の調査一覧 (2)



第107図 既往の調査位置 (道明寺1丁目)

年度	調査区	申請者	所在地	用途	申請 面積	調査 内容	担当者	調査結果	備考
1979	18	藤村 茂	藤井寺市沢田4-9-22	個人住宅	90	試 検	佐久間		仲津山古墳 前方部に外 縁のないこ とを確認
1980	1	平川 西 嘉	藤井寺市道明寺5-202-2	共同住宅	280	免 検	新 本	[遺構] 古墳：溝、環濠：濠立柱建 物 [遺物] 陶器土器、埴輪、須恵器、 土師器他	
1980	3	谷口登喜雄	藤井寺市道明寺1-682-23	個人住宅	185	免 検	安 里	[遺物] 土器	遺物包含層 上面でとめ る
1980	4	船田 伝 古	藤井寺市道明寺1-221-8	個人住宅	187	免 検	松 村	[遺構] 古墳～飛鳥：溝、濠立柱建 物 [遺物] 上飾器、須恵器、土器	
1980	5	藤田 つた子	藤井寺市道明寺1-689	個人住宅	92	免 検	石 神		地の埋め立 て地
1980	6	永野 幸太郎	藤井寺市道明寺2-533	個人住宅	397	免 検	松 村	[遺構] 飛鳥～奈良：溝、中世：土 器沃造精陶 [遺物] 土師器、須恵器、 土器、瓦、瓦器他	飛鳥～奈良 の溝は土師 器に因縁。 溝内から山 田寺式軒丸 瓦
1980	7	昭 和 食品	藤井寺市道明寺1-4-33	分譲住宅	806	免 検	舟 本	[遺構] 飛鳥：掘立柱建物、壇、集 石状造精陶、土師器埋納小穴 [遺物] 土師器、須恵器、土器、陶器形骨 戴冠物	
1980	8	南 部 勝 宏	藤井寺市沢田4-406他	分譲住宅	2486	免 検	一 潤	[遺構] 古墳：片塙山古墳外縁	
1980	9	山 穂 康 彦	藤井寺市道明寺1-563-1	分譲住宅	257	免 検	舟 本	[遺構] 奈良：溝、土坑 [遺物] 土師 器、瓦器、土器	溝のうち1 条は区画削 除
1980	10	中 路 長 一	藤井寺市道明寺4-235	個人住宅	218	免 検	安 里	[遺構] 古墳：小穴、中世：瓦溜め [遺物] 土師器、須恵器、製塙上器他	
1980	11	樋 本 利 一	藤井寺市道明寺6-321-1	個人住宅	201	免 検	松 村	[遺構] 時期不明：土坑、小穴 [遺 物] 土師器、須恵器他	
1980	12	中山 義 治	藤井寺市道明寺2-325-4	個人住宅	121	免 検	松 村	[遺構] 民家～奈良：土器裡り、小 穴 [遺物] 土師器、須恵器	
1980	13	川 西 脊 介	藤井寺市道明寺6-660	工場付個人住 宅	162	免 検	松 村	[遺構] 池：溝、中世：溝、小穴、 近世：溝、小穴 [遺物] 青文土器、 土師器、須恵器他	中世溝から 多量の瓦出 土
1981	1	高 木 勉	藤井寺市道明寺1-5-5	個人住宅	8	免 検	安 里	[遺構] 時期不明：小穴 [遺物] 土師 器、須恵器	
1981	2	中 路 秋 男	藤井寺市道明寺1-546他	個人住宅地 點	272	免 検	松 村	[遺構] 池：小穴、奈良～平安： 房、小穴、近世：森、小穴 [遺物] 青文土器、土師器、須恵器、埴輪、 黑色土器、瓦他	
1981	3	西田幸四郎	藤井寺市道明寺4-573-1・2	個人住宅	107	免 検	松 村	[遺構] 平安：土坑、小穴、近世： 溝 [遺物] 土師器、土器、瓦器他	
1981	4	杉 本 一 雄	藤井寺市道明寺4	歩道新増築		免 検	松 村		

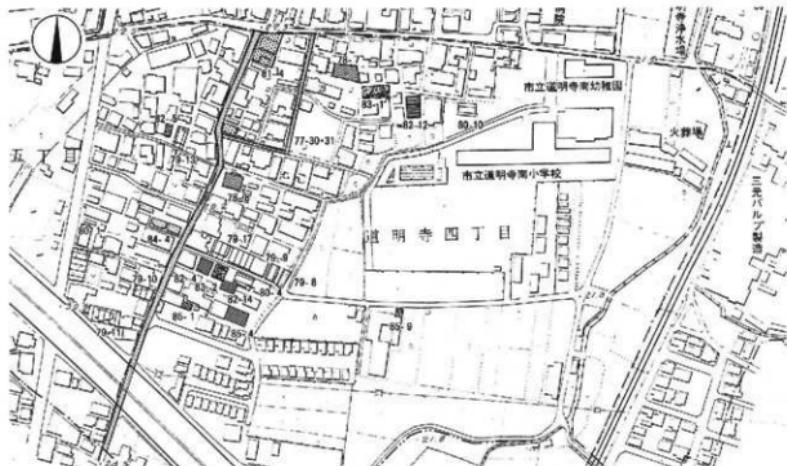
第1表 既往の調査一覧 ③



第108図 既往の調査位置（道明寺2丁目）

年度	調査区	申請者	所在地	用途	申請 面積	調査 内容	担当者	調査結果	備考
1981	5	山内 喬正	藤井寺市沢田4-427	個人住宅	122	発掘	松村	[遺物]埴輪	神津山古墳 商方部外堤 にあたる
1981	6	仲田 鮎	藤井寺市道明寺4-1-44	個人住宅	244	発掘	岩崎	[遺物]土器	
1981	7	林 成光	藤井寺市沢田3-19	個人住宅	80	発掘	岩崎		
1981	8	榎本 邦郎	藤井寺市道明寺5-329	個人住宅	141	発掘	岩崎	[遺物]埴輪、土師器	
1981	9	藤田 英一	藤井寺市沢田4-611-2	個人住宅	105	発掘	岩崎		
1981	10	堀 才	藤井寺市沢田4-398-1他	宅地分譲	1470	発掘	岩崎	[遺構]古墳：神津山古墳外堤上円 錐形墳列 [遺物]埴輪、土師器、須 恵器	
1982	1	進藤 庄治	藤井寺市道明寺2-3-39	個人住宅	12	発掘	松村	[遺物]瓦、焼成窯	
1982	2	山駿 桃彦	藤井寺市道明寺2-3-17	個人住宅	48	発掘	松村	[遺物]瓦	
1982	3	杉本 左門	藤井寺市道明寺1-532-2	個人住宅	16	発掘	松村	[遺構]飛鳥～奈良：溝？ [遺物]土 器、須恵器	
1982	4	石橋慶一	藤井寺市道明寺4-496	個人住宅	130	発掘	岩崎	[遺構]時期不明：小穴、[遺物]土 器	
1982	5	小谷 齊二	藤井寺市道明寺4-6-4	個人住宅	163	発掘	松村	[遺構]中世：土坑 [遺物]織文土器、 土瓦器、埴輪、瓦當	
1982	6	島川 葉	藤井寺市道明寺2-420-6	個人住宅	99	発掘	松村		
1982	7	宗建寺	藤井寺市道明寺1-501-1	個人住宅	8	発掘	松村	[遺構]中世：溝、小穴 [遺物]土瓦 器、瓦器、陶器類、錢貨	
1982	8	岡田 弘	藤井寺市沢田4-9-34	個人住宅	194	発掘	岩崎		
1982	9	中谷 三郎	藤井寺市道明寺1-510-1	個人住宅	145	発掘	小林	[遺構]織倉：土坑 [遺物]土師器、 瓦器、瓦質土器	
1982	10	足口昌三	藤井寺市沢田4-423-9	個人住宅	121	発掘	岩崎	[遺構]奈良：獨立住建物、溝、土 坑、中世：溝 [遺物]ナイフ形石器、 土師器、須恵器、埴輪、土馬他	
1982	11	杉分義男	藤井寺市道明寺1-4-33	分譲住宅	424	発掘	泉本		
1982	12	廣田 雄一	藤井寺市道明寺4-204	個人住宅	168	発掘	黒木		
1982	13	西山 增太	藤井寺市沢田4	個人住宅	7	発掘	阿部	[遺物]埴輪	
1982	14	細見勝俊	藤井寺市道明寺4-224-2	個人住宅	193	発掘	松村	[遺構]古墳：整欠柱頭、古墳～飛 鳥：溝、土坑、小穴 [遺物]土師器、 須恵器	
1983	1	真光寺	藤井寺市道明寺4-2-6	本堂立替	112	発掘	竹原	[遺構]古墳？ : 小穴、時期不明： 高輪～飛鳥 [遺物]織文土器、土師器、 須恵器、埴輪他	
1983	2		藤井寺市道明寺4-2-15		103			[遺構]飛鳥：小穴、時期不明：落 込み [遺物]土師器	
1983	3	高橋清	藤井寺市道明寺5-288	個人住宅	361	発掘	松村		
1984	1	松井清信	藤井寺市沢田4-383、381-1、 382-1	果樹園造成	免	発掘	岩崎	[遺構]古墳：神津山古墳外堤、[遺 物]埴輪、陶器器	
1984	1-b	浅野修弘	藤井寺市沢田4-383		355	発掘	岩崎	[遺構]奈良：土坑、溝、平安：溝 [遺物]織文土器、土師器、須恵器、 瓦、黑色土器、瓦器等	土師寺跡推 定寺域東南 部にあたる
1984	2	佐々木義	藤井寺市道明寺2-648-6	個人住宅	108	発掘	芝野		

第1表 既往の調査一覧 (4)



第109図 既往の調査位置 (道明寺4丁目)

年度	調査区	申請者	所在地	用途	申請面積 内容	担当者	調査結果	備考
1984	3	中 谷 三 郎	藤井寺市通明寺1-510-1	共同住 宅	1494 発 振	岩 嶋	[遺構]古墳：御曹山塚古墳〔造物〕上飾器、灰器、埴輪、瓦器、陶器等	
1984	4	名 板 關 稔	藤井寺市通明寺5-270-7	建 先 住 宅	免 振	岩 嶋		
1984	5	名 板 關 稔	藤井寺市通明寺6-388-2	建 先 住 宅	261 免 振	岩 嶋		すべて現存
1984	a	大 阪 ガ ス	藤井寺市通明寺3-6-51	ガス	立 会 会 員	岩 嶋		
1984	b	大 阪 ガ ス	藤井寺市通明寺4-5-39	ガス	立 会 会 員	岩 嶋		
1984	c	魔 史 電 力	藤井寺市通明寺4-574	電 気	立 会 会 員	岩 嶋		
1984	d	大 阪 ガ ス	藤井寺市通明寺5-3-20	ガス	立 会 会 員	芝 野	[遺構]時期不明：土坑状造物〔遺物〕土師器	
1984	e	野 中 一 席	藤井寺市国町3-11-3・5		立 会 会 員	岩 嶋		
1986	1	河 口 弘 和	藤井寺市通明寺4-645-7	住 宅	242 免 振	大 谷	[遺物]土製器、瓦	
1985	2	有 島 六 郎	藤井寺市通明寺1-686-1	販 車	456 免 振	一 澄	[遺構]古墳：津幡稻基2基、溝 [遺物]土師器、埴輪	
1985	3	佐 々 木 天 子	藤井寺市沢田4-423-15	借 入 住 宅	84 免 振	一 澄	[遺構]古墳：津幡山古墳外堤壇列、時期不明：壙〔遺物〕埴輪	
1985	4	渡 田 一 正	藤井寺市通明寺4-325-2	住 宅	173 免 振	一 澄	[遺構]時期不明：溝、落込み〔遺物〕土師器、埴輪器	
1985	5	坂 井 住 建	藤井寺市通明寺1-1-1・2	住 宅	311 免 振	一 澄	[遺構]時期不明：溝、落込み〔遺物〕土師器	
1985	6	坂 井 田 欽 一	藤井寺市通明寺4-433-4	分 旗 住 宅	62 免 振	一 澄	[遺構]時期不明：溝落込み〔遺物〕土師器、スマカイト	
1985	7	松 井 清 和	藤井寺市通明寺1-531	住 宅	125 免 振	一 澄	[遺構]時期不明：土坑状落込み	
1985	8	門 田 正 美	藤井寺市通明寺2-648-7	歯科兼住宅	126 免 振	岩 嶋	[遺構]奈良：溝、小穴〔遺物〕土師器、須志器	
1985	a	高 藤 亮 夫	藤井寺市通明寺1-38	住 宅	88 立 会 会 員	一 澄		
1985	b	京 田 明	藤井寺市沢田4-420、598-2	住 宅	165 立 会 会 員	一 澄		
1985	c	兼 田 保 介	藤井寺市国町3-62-2	住 宅	142 立 会 会 員	一 澄		

第1表 既往の調査一覧 ⑤



第110図 既往の調査位置（沢田4丁目、古窓2丁目）

年度	調査区	申請者	所在地	用途	申請面積	調査内容	担当者	調査結果	備考
1985	d	矢 内 秀一	藤井寺市道明寺318-1	住 宅	29	立会	藤井寺市		
1985	e	松 原 安 治	藤井寺市天田4-471-2	住 宅	107	立会	一 海		
1985	f	大 舟 義 二	藤井寺市国府3-62-1	住 宅	232	立会	一 海		
1985	g	中 西 鑑 介	藤井寺市国4-471-26	住 宅	184	立会	一 海		
1985	h	松 盛 定 労	藤井寺市国4-471-24	住 宅	100	立会	一 海		
1985	i	丸 山 翼	藤井寺市道明寺1-573-8	住 宅	205	立会	一 海		
1985	j	福 田 隆 生	藤井寺市国4-476-8	住 宅	79	立会	岩崎		
1985	k	鶴 田 錠 男	藤井寺市国4-381-4	住 宅	100	立会	一 海		
1985	l	川 上 孝	藤井寺市道明寺1-225	住 宅	325	立会	一 海		
1986	m	99佐藤工務店	藤井寺市道明寺1-510-11~15	共同住宅	997	発掘	一 海	[遺構]古墳：銅賣司塚古墳〔遺物〕埴輪、瓦器、土器等	
1987	Na 9 地 点	大 阪 府	藤井寺市道明寺 6		5	発掘	一 海	[遺構]古墳：三ツ塚古墳復原、時期不明：素、小穴〔遺物〕土器器、須恵器、埴輪等	石川左岸幹線電気化工事
1988	o	近 藤 駿	藤井寺市道明寺 6-371-3	住 宅	236	発掘	一 海	[遺構]古墳：坂本塚西古墳、中世：石転がし坑〔遺物〕土器器、須恵器、埴輪、瓦、陶器器	
1988	p	塩 治 龍 男	藤井寺市道明寺 6-371-19	住 宅	360	発掘	一 海	[遺構]古墳：坂本塚西古墳〔遺物〕土器器、須恵器、埴輪、瓦、陶器器	
1987~ 1988	q 1・II 区	大 阪 府	藤井寺市道明寺 6	府営住宅	5753	発掘	二 七	[遺構]弥生：土器、漢、古墳以降：府営道明寺坂本塚古墳、埴輪古墳、土壇古墳、南住宅建設木棺墓、土器器、火葬墓等〔遺物〕旧石器、埴輪、土器器、須恵器、石器等	府営道明寺坂本塚古墳、南住宅建設工事
1989	第 5-1 工区 10地点	大 阪 府	藤井寺市道明寺 5		7	発掘	一 海	[遺構]時期不明：溝込み〔遺物〕や スカイド、土器器、埴輪	石川左岸幹線電気化工事
1991	里 区	大 阪 府	藤井寺市道明寺 6	府営住宅	1783	発掘	松 村	[遺構]弥生：堅穴住居、土坑、古 墳以降：埴輪古墳、土器器、火葬 墓等〔遺物〕弥生土器、土器器、須 恵器、埴輪、鐵鏡、刀子等	府営道明寺坂本塚古墳、南住宅建設工事
1992	IV 区	大 阪 府	藤井寺市道明寺 6	府営住宅	4470	発掘	松 村	[古墳：前庭古墳、方墳、古墳以降： 埴輪古墳、土器器、火葬墓等、中世： 独立柱建物〔遺物〕弥生土器、土器器、 土転がし坑、須恵器、埴輪、鐵鏡等]	府営道明寺坂本塚古墳、南住宅建設工事
1995	VII 区	大 阪 府	藤井寺市道明寺 6	府営住宅	5264	発掘	小 田	[遺構]古墳：堅庭古墳、堅庭古墳、 方墳、古墳以降：円筒棺墓、木棺 墓、土器器〔遺物〕土器器、須恵器、 埴輪等	府営道明寺坂本塚古墳、南住宅建設工事

第1表 既往の調査一覧 ⑥



第111図 既往の調査位置 (道明寺 5、6 丁目)

第2節 遺跡内所在古墳の調査

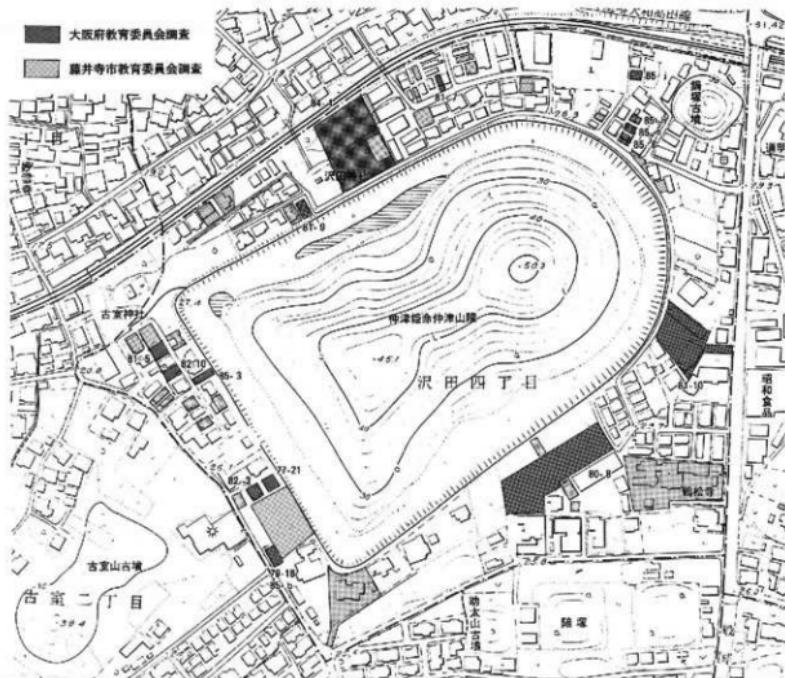
(1) 仲津山古墳（第112～117図）

仲津山古墳の周囲では、大阪府教育委員会による発掘調査が11箇所、立会調査が6箇所、藤井寺市教育委員会による調査が29箇所で実施されている。

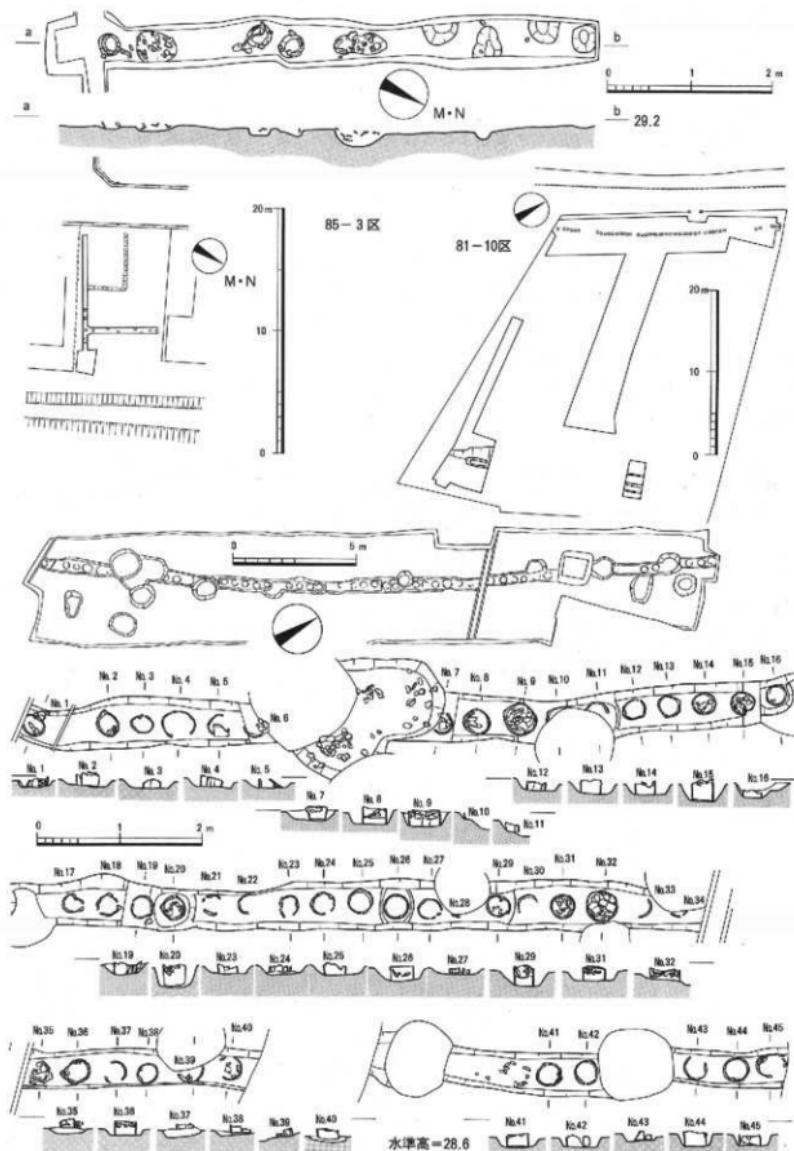
このうち府教委調査の81-10区で外堤および外堤上の埴輪列、84-1区で外堤、85-3区でも外堤上の埴輪列を検出している。ことに81-10区では約28mにも及ぶ布掘りの掘方、樹立された状態の円筒埴輪43個体と衣蓋形埴輪1個体が検出された。ただし上面の削平のため埴輪の遺存状況はいずれも悪く、底部の残る円筒埴輪では最下段の穴帶より上まで残るのは40%弱にすぎない。この81-10区は後円部東側に位置しているが、前方部北側に位置する85-3区でも同様に埴輪列が検出された。

85-3区で検出された埴輪を据える掘方は、布掘りではなく、個体用の小穴であり、81-10区と様相を異にしている。なお藤井寺市教育委員会の調査ではNTK89-1・91-1・91-3・93-2・93-3区で外堤上の埴輪列が検出されている。

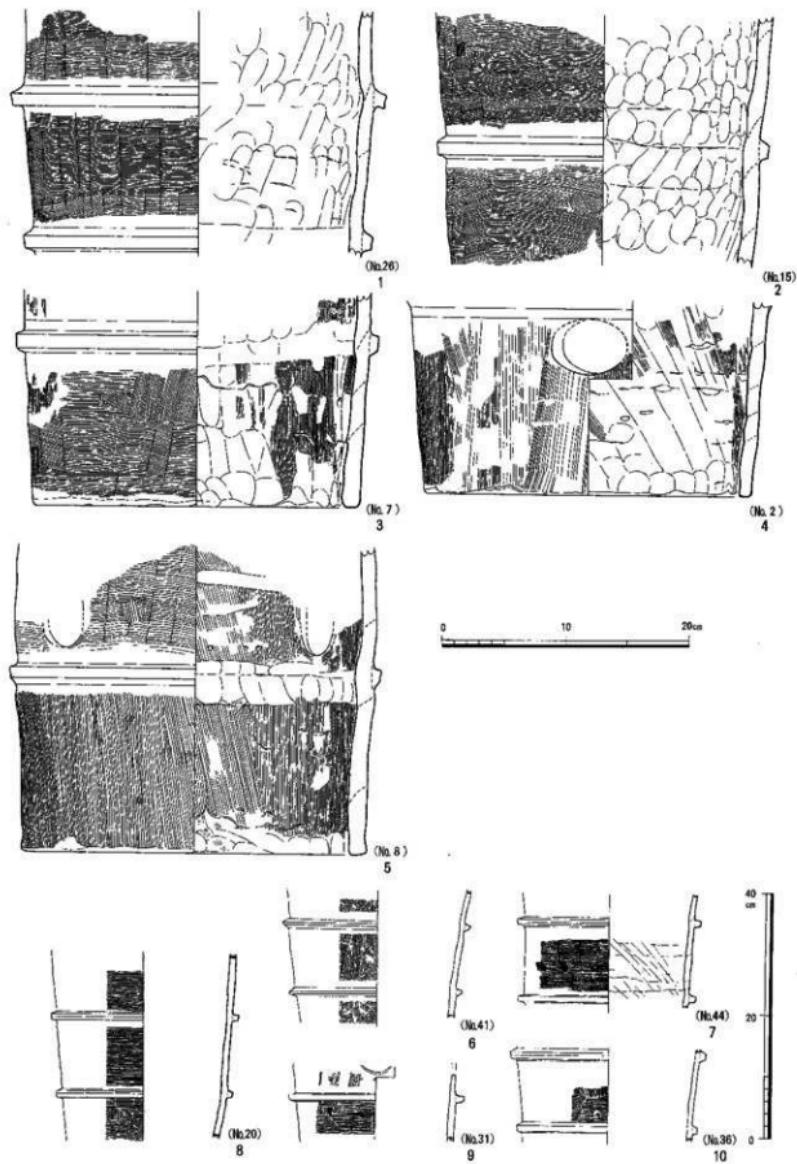
81-10区および85-3区で検出された埴輪のうち、ここでは比較的の遺存状態のよい5点を再実測して掲載し（114-1～5）、残りは既刊の概要報告から再掲載した（114-6～10、115-1～33）。また



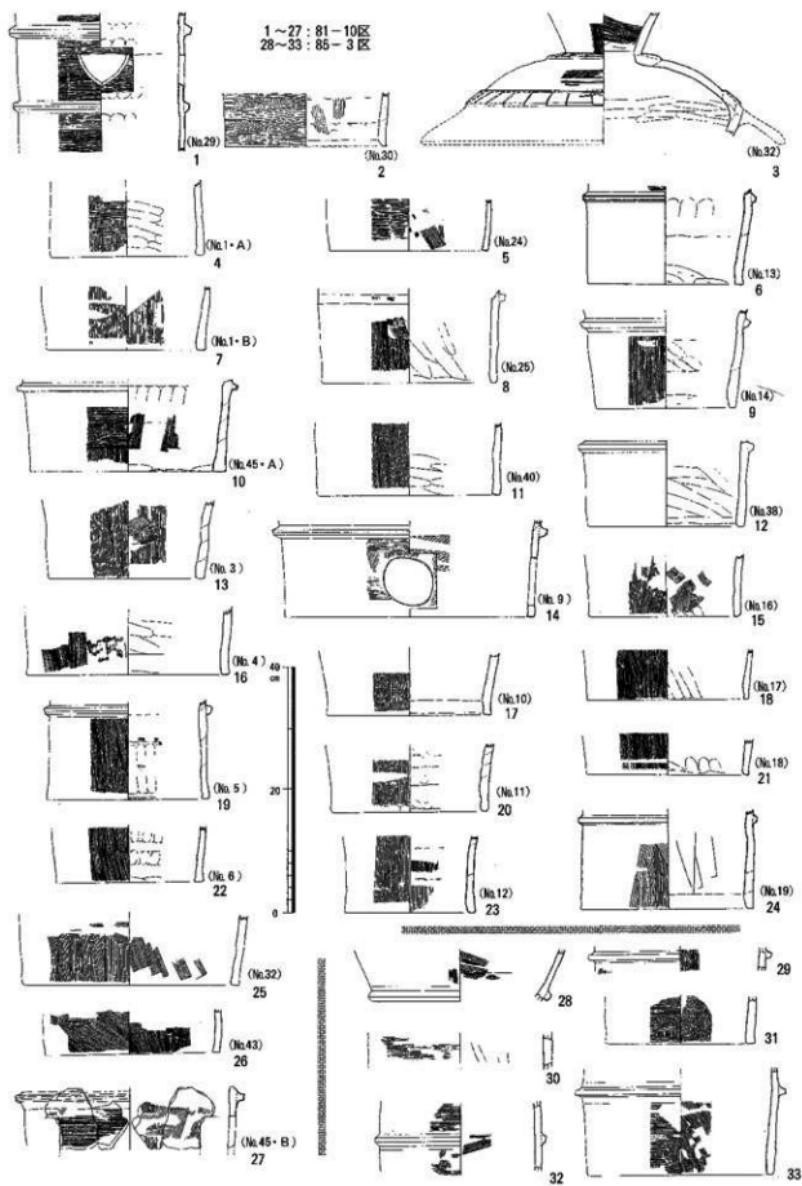
第112図 既往の調査位置（仲津山古墳周辺）



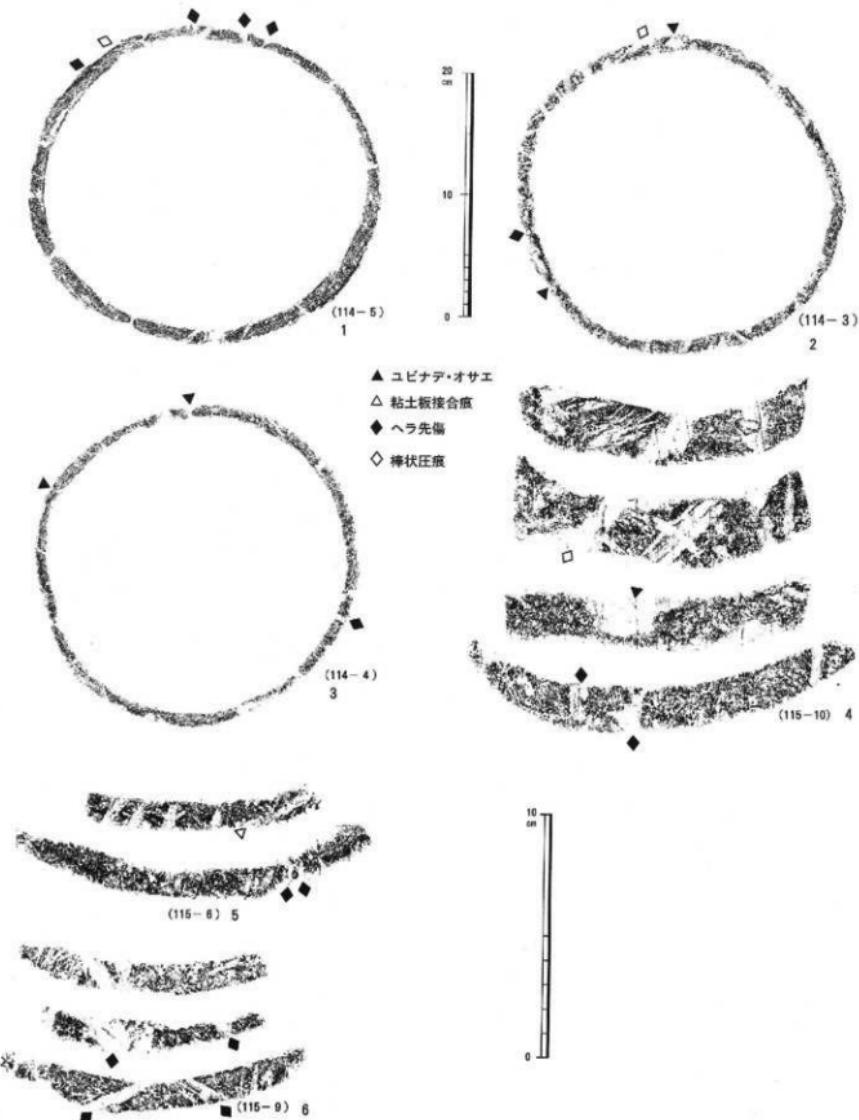
第113図 仲津山古墳外堤塁輪列



第114図 仲津山古墳外堤埴輪列(81-10区) 円筒埴輪



第115図 仲津山古墳外提埴輪列(81-10・85-3区) 円筒埴輪・形象埴輪



第116図 仲津山古墳外堤埴輪列(81-10区)円筒埴輪底部拓影

底部調整が明確に認められるものを第116図に、口縁部資料については第117図に載せた。

仲津山古墳出土の円筒埴輪の特徴は、

- ・土師質である
- ・大きさに比して器壁は薄い
- ・底面は丁寧にヘラナデ調整されたものが多く、また端部の肥厚がほとんどないものが多い
- ・胎上に長石、金雲母の混入が顕著である

という点に集約されよう。

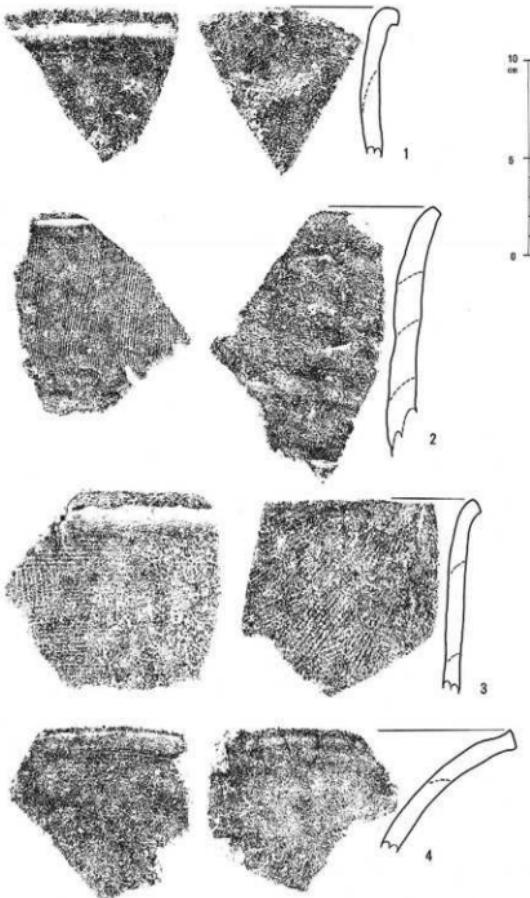
口縁部資料についてみると、端部が僅かに折れ曲がるもの（117-1、3）と折れがほとんどないもの（17-2）がみられる。

外面調整には、端部近くまで2次調整のヨコハケが及ぶもの（117-3）と、1次調整のタテハケだけのもの（117-1、2）とがある。

また口縁部資料の中には外面に赤色顔料の痕跡を残すものが割合に多くみられる。

底部の調整については全体にヘラナデが丁寧になされている。また粘土板の接着をよくするために、部分的にユビナデが加えられた痕跡を残すものもある。藤井寺市教育委員会が調査した資料には、内外面に強いナデやケズリが施されたもの、下端部にヨコハケが加えられたもの、底部の歪を防ぐために粘土板が2枚貼り合わされたものもある。

形象埴輪には115-3の衣蓑形埴輪がある。大型品だが、器壁はやや薄い。



第117図 仲津山古墳外堤埴輪列(81-10区) 円筒埴輪拓影

(2) 御曹司塚古墳 (第118~123図)

土師の里遺跡の北端、近鉄南大阪線土師の里駅の東に「御曹司塚」あるいは「御憎子」という小字名が残り、昭和30年頃までは墳丘が遺存していたとの伝聞もあった。

古墳の実態が明らかになるのは1984年度以降のことである。この地点で共同住宅建設工事に伴う事前調査を実施した(84-3区)。調査は東西50m、南北2.3mほどのトレンチを設定して行ったが、その結果古墳の周濠と墳丘の一部を検出した。そこで字名を付けてその古墳を御曹司塚古墳と呼称した。

1986年、共同住宅建設工事の実施に伴って同一地点で調査を行った(86-1区)。86-1区は84-3区のトレンチを囲む敷地ほぼ全域に設定し、84-3区で検出された周濠の続きを確認するとともに、墳丘の南東部を約6mにわたって検出した。なお86-1区での調査は造構の現状保存を前提としており、発掘部分は最小限に留められた。

84-3・86-1区とともに調査区ほぼ中央で検出された周濠北西部分は幅8.5m、深さ2.1m、底部幅2.9mほどを測る。周濠の内縁は弧状を呈し、御曹司塚古墳が円墳であることを示しているが、外縁は検出範囲では直線状に南北方向に延びている。この周濠内縁から3mほどは地山が平坦に続くのみであるが、3m以東では地山上に墳丘盛上とみられる層があり、急峻な角度で立上っている。一方86-1区南東隅で検出された墳丘も、現状の最大幅が3mの平坦面があり、その西方に墳丘盛上が延びている。平坦面は盛上(34層)上に形成されている。墳丘盛上は黄褐色砂礫土(23層)を基調としており、現状で80cmの厚さがみられた。また盛上下の茶褐色土(24層)は旧地表と考えられる。一方、周濠外側にあたる調査区西半の表上下にも黄褐色砂礫土(2層)が存在するが、これは墳丘盛土を削って客土とした層とみられ、層中に少量の円筒埴輪片も含まれていた。西側では墳丘盛土外縁の平坦面は地山上に形成されているが、東側では盛土上にあることから、この平坦面は墳丘盛土の削平に伴うものと考えられる。したがってこの墳丘の裾は周濠下端の内側辺と対応し、その規模は37.5mほどと推定される。

周濠内の堆積土は下半がレンズ状、上半が水平の堆積である。また16、19層と12、13、18層との間が不整合であることから、そのラインまで再掘削されたとみられる。周濠底直上の厚さ50cmほどの青灰色砂(22層)には遺物の混入はほとんどないが、この上の19、21層には遺物が多く含まれ、中世の遺物も混じっている。再掘削時に堆積した黒色有機質土(12、13層)には12世紀後葉～13世紀前葉の瓦器枕を始め土釜、甕などの中世の遺物が多量に含まれていた。同様に中世の遺物を多量に含んだ混疊黒褐色土(17層)が周濠の立上りを崩している状況が認められたが、これは土坑の覆土である可能性も考えられる。また86-1区南東隅でも周濠の立上り際に瓦器の破片を多量に含んだ淡茶褐色疊混り粘質シルト層(33層)が検出されて



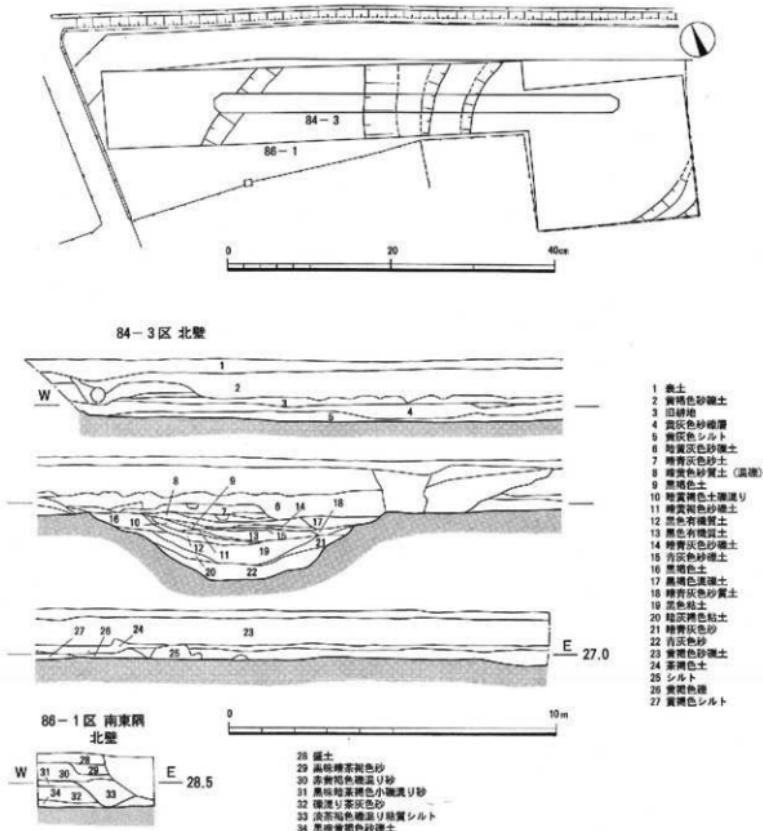
第118図 御曹司塚古墳 調査区位置

おり、当該期に遺物の廃棄が頻繁に行われていたとみられる。

周濠内から出土した埴輪はコンテナ1箱ほどである。周濠底から平安時代の土器も出土しているので、本墳に本来樹立されていた埴輪を層位的に検証することはできない。しかし、次に示す特徴をもつ円筒埴輪が割合にまとまって認められることから、その特徴を有するものが本墳に本来樹立されていた円筒埴輪と考えたい。

その特徴とは、

- ・外側調整は1次タテハケのみである
- ・内側調整はユビナデ・オサエであり、多くの資料ではハケメは消されている



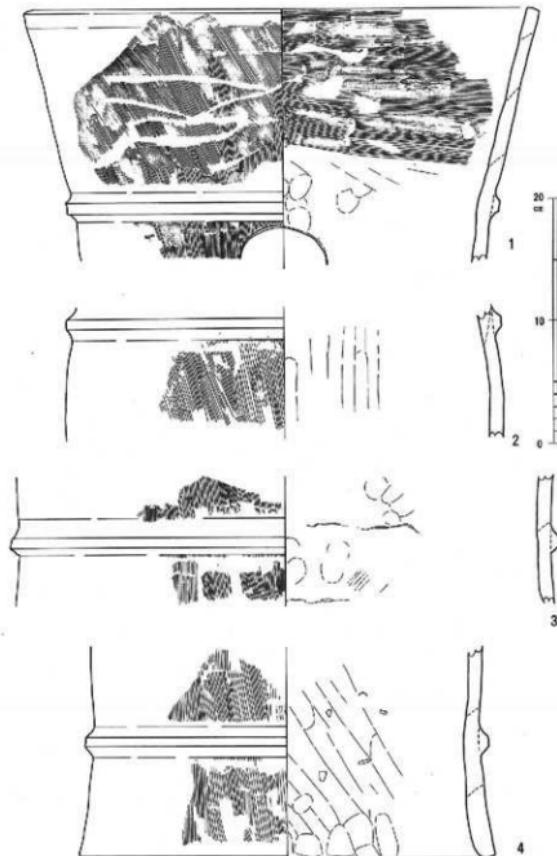
第119図 御曹司塚古墳 周濠内堆積土

- ・窯窯焼成された須恵質の埴輪である
- ・突帯の断面は低い台形を呈するものが多いが、一部には断面三角形のものもみられる
- ・器壁は割合に薄い
- ・胎土に長石、石英、金雲母を含む

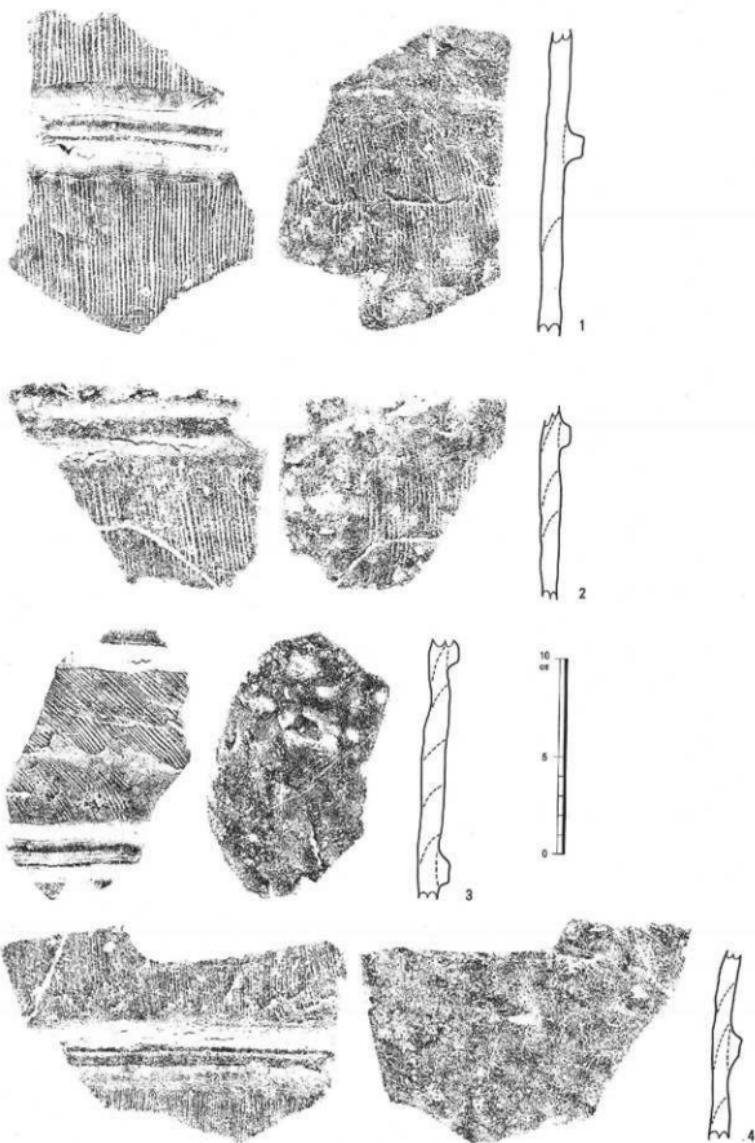
という点を挙げることができよう。ただし外面調整については、基本的に1次タテハケのみであるとみられるものの、一部、2次調整にB種ヨコハケの施されたものが含まれる可能性がある。こうした特徴を有する円筒埴輪について復元実測可能なものを第120図に、不可能なものは断面および拓影を第121～123図に示した。復元実測可能なものが4点と非常に限られているが、その中でも口縁部資料は120-1の1点だけである。直線的に外傾する形状である。ハケメは口縁部端から施されているが、端部にはナデを加えてハケ

メが消されている。底部資料も120-4の1点だけである。底部は若干ハの字状に広がる。底部から4.1cmと通常例に比して低い位置に突帯が付けられている。残り2点はいずれも体部片であるが、120-3は体部径が4.3cmで、他の3点に比べて一回り大型である。破片資料のうち、第121・122図に掲示した9点は外面調整が1次タテハケのみである。一方、第123図に示した4点は外面2次調整にヨコハケが施されたものである。このうち明確に静止痕が認められるのは123-3・4の2点である。静止痕は123-3が著しく斜行しているのに対し、123-4はほぼ垂直である。また突帯間のヨコハケは、確認できる限りでは1段である。

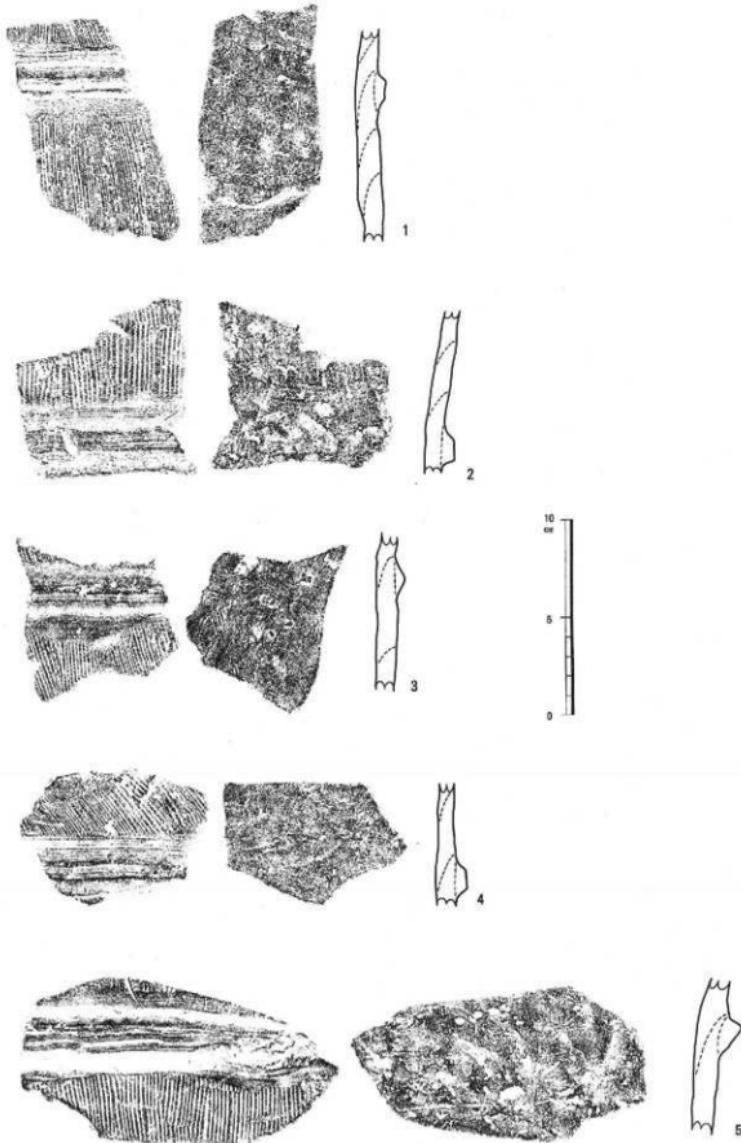
こうした円筒埴輪の特徴から、本埴輪の築造年代を5世紀後葉に位置付けることができよう。



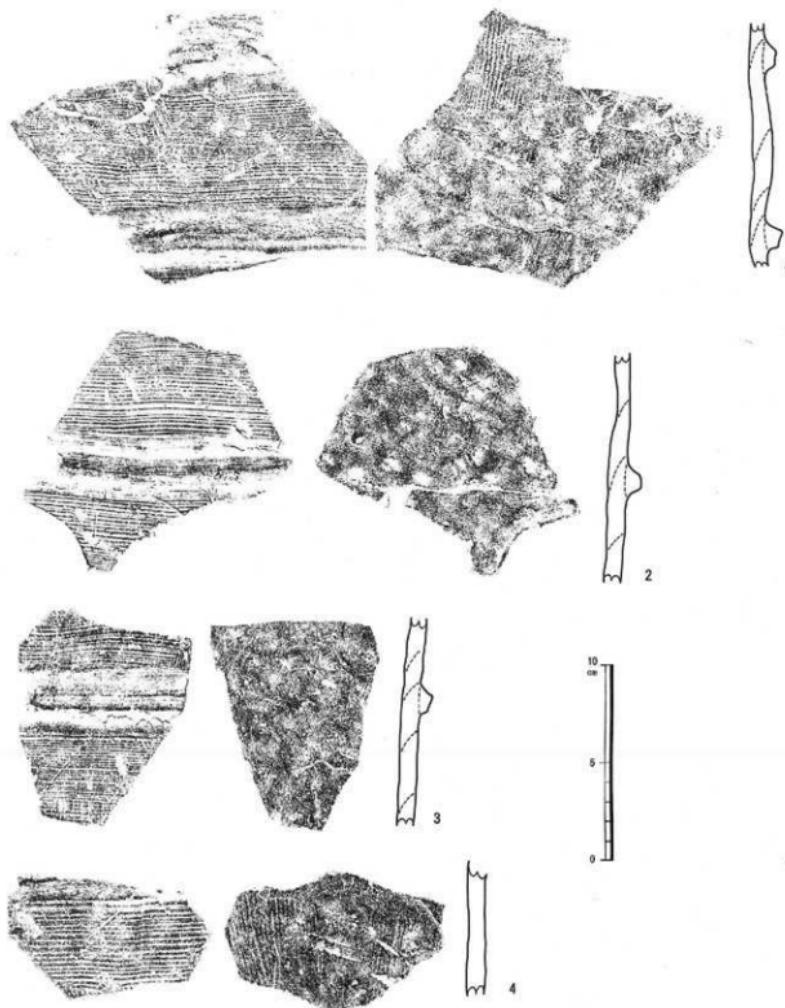
第120図 御曹司塚古墳 周濠出土円筒埴輪



第121図 御曹司塚古墳 周濠出土円筒埴輪拓影（1）



第122図 御曹司塚古墳 周漆出土円筒埴輪拓影 (2)



第123図 御曹司塚古墳 周濠出土円筒埴輪拓影（3）

(3) 土師の里3号墳(道端古墳)(第124~129図)

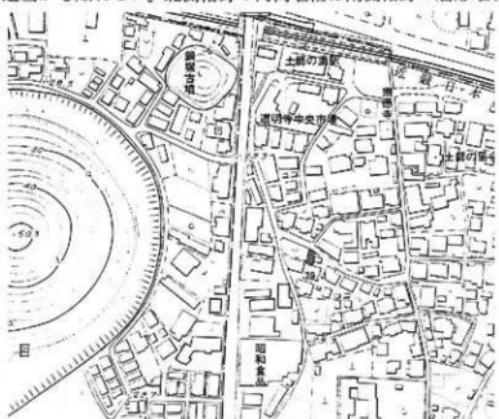
本墳が調査されたのは1979年度である。79-1区で埴輪棺墓3基が並んで埋置された古墳の周濠が検出された。仲津山古墳後円部の西120mほどの位置に当たる。小字名が「道端」あるいは「道ノ端」であることから道端古墳と呼称し、その後土師の里古墳群中の3号墳として登録された。

この土師の里3号墳は昭和初年の航空写真には2階建民家より高く見える墳丘を留めているが、昭和12年頃には既に墳丘を失っていたと伝えられている。

調査区が4×5m余程と狭小なため、検出した周濠も最大長5.1mにすぎない。しかし調査区の部分的拡張により周濠の東・西上端を捉えることができ、その現況幅は5.4m、深さは62cmと測られた。また墳丘は削平のため遺存していなかったが、周濠底が北西に緩く湾曲する形状から、検出した周濠の西に墳丘が存在していたことが明らかになった。周濠の湾曲具合などからこの土師の里3号墳は直径20mを越えることはないと推測されているが、判然とはしない。周濠覆土をみると、奈良時代の遺物を包含する層(4、5層)が最上層として堆積している。その下の薄茶褐色砂質土(6、7層)は早い段階で周濠に堆積した土層であり、両層とも埴輪は包含するが土師器は出土していない。

埴輪棺墓は周濠の外縁の近くで南北に3基が連なった状態で検出された。南に位置するのが1号埴輪棺墓、北に位置するのが2号埴輪棺墓、中央が3号埴輪棺墓である。これら3基は単純に並んでいるのではない。1、2号埴輪棺墓は周濠外縁のラインに沿っているのに対し、3号埴輪棺墓は1、2号埴輪棺墓の間の空間に納めることができなかつたためか、主軸をやや東寄りに振り、しかも南北両小口部が1、2号埴輪棺墓を切っている。また、これらの埴輪棺墓はいずれも6、7層、あるいはそれに対応する古い周濠内堆積土を切り込んでおり、3基とともに周濠の埋没過程で構築されたものである。

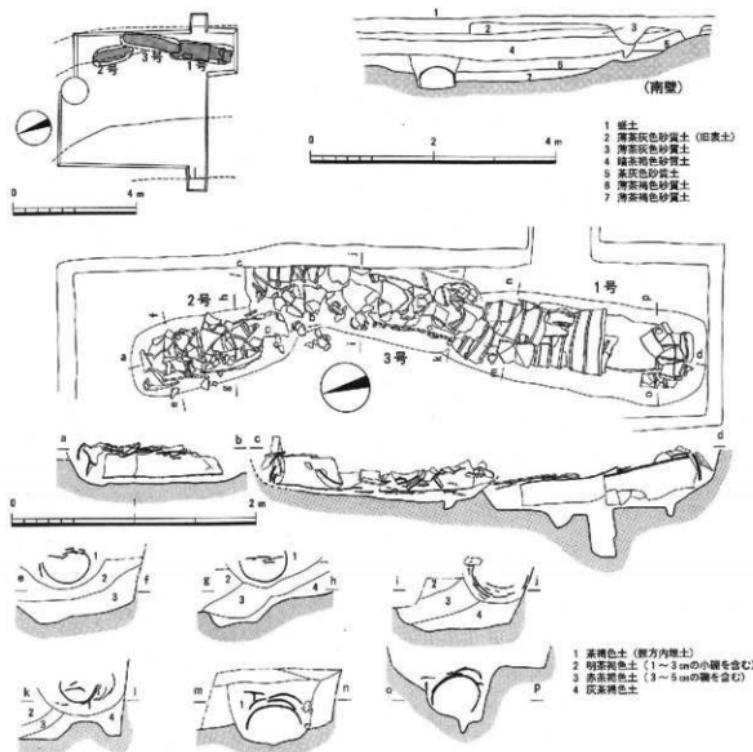
1号埴輪棺墓は、北端が3号棺墓に崩されているため全体の形状や規模を捉えることはできないが、掘方は長さ2.1m以上、幅0.7mを測る。平面形は隅丸長方形を呈する。掘方底面は北側に若干下降している。また棺の上面から掘方底までは25~35cmを測る。棺身は盾形埴輪と円筒埴輪それぞれ1個体の計2個体で構成されている。南側棺身には126-2の盾形埴輪、北側棺身には127-3の円筒埴輪を用いているが、盾形埴輪は円筒部の半身、円筒埴輪も半身が欠かれ、ともに被葬者を覆うように置いており、棺というよりは廟と呼ぶのが適当かも知れない。北側棺身の円筒埴輪は南側棺身の盾形埴輪円筒部の口縁部に重ねて置かれている。北小口部の閉塞は不明だが、上部は北側棺身の一部を棺身と掘方上部に掛け重ねている。北側棺身では上全体を覆うようにさらに埴輪が配されている。一方南小口部は南側棺身の盾形埴輪の一部を直立させ、縦割りにした127-2の円筒埴輪を東西に並置し、さらにその上に北側棺身の破片を重ねるという、非常に入念な方法で閉塞している。また南北棺身間の隙間に円筒埴輪の破片が挿入されている。ほかに127-1の盾形埴輪片も出土している。



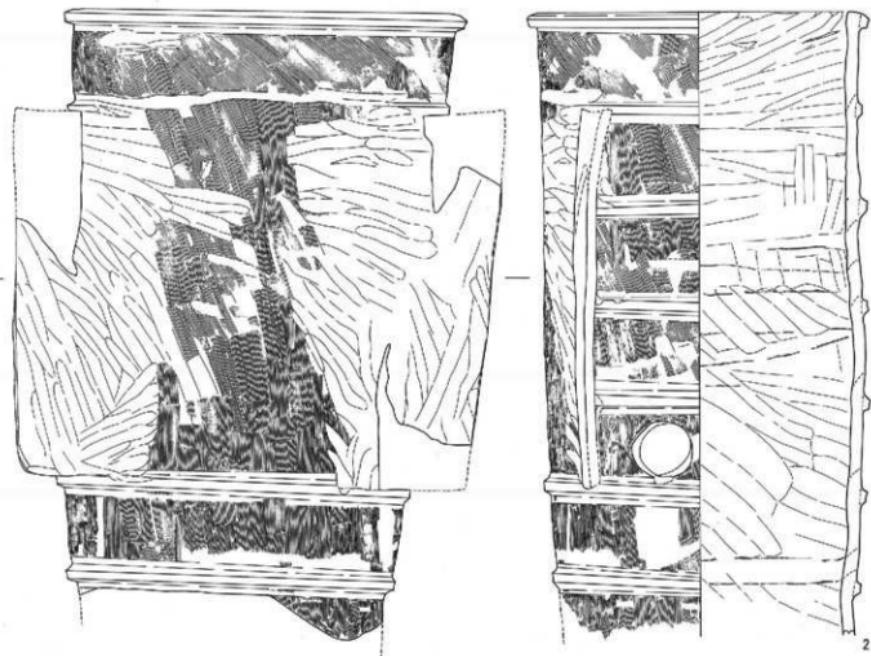
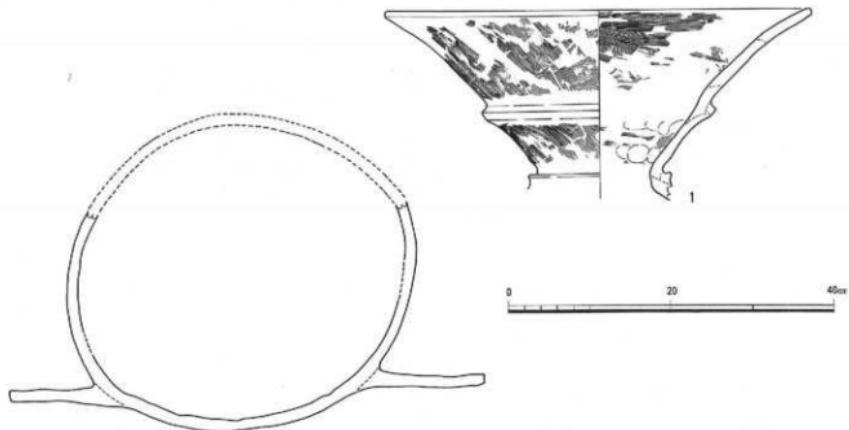
第124図 土師の里3号墳 調査区位置

2号埴輪棺墓は、南端が3号埴輪棺墓に切られているため、1号埴輪棺墓同様、全体の形状や規模は不明瞭であるが、掘方は長さ1.4m、幅0.55m、検出面からの深さは0.35mほど、平面形は隅丸長方形を呈すると捉えられる。また棺全体の長さは1.2m、幅0.4mを測る。棺身は2個体の円筒埴輪により構成されている。北側棺身は128-2であり、口縁部を南に向けて置いている。南側棺身は128-4であり、北側棺身の内側に差し込んでいる。南小口部の状況は3号棺墓による破損のため不明であるが、北小口部では128-1の衣蓋形埴輪の基部を南棺身に挿入するように閉塞している。また棺身の継ぎ部分には126-1の朝顔形埴輪の口縁部を縦割りにして重ねている。

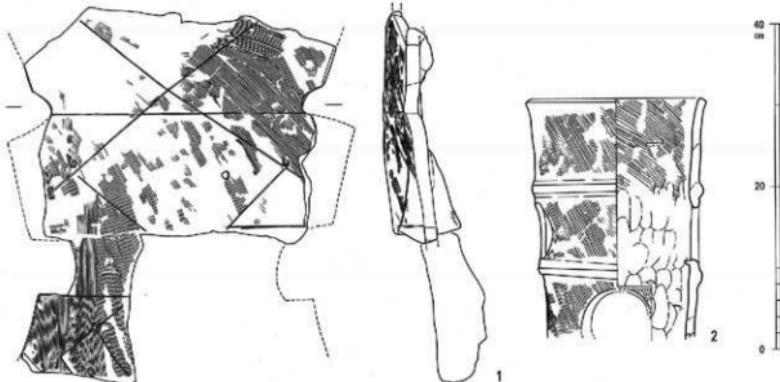
3号埴輪棺墓は1、2号埴輪棺墓の間に割り込むように形成されている。掘方の長さは2.0m、幅0.6mで、平面形は隅丸長方形を呈する。棺全体の長さは1.9m、幅0.4mを測る。棺身は2個体の円筒埴輪からなり北棺身には129-3、南棺身には128-5が使用されている。2個体の円筒埴輪の口縁部を合口にし、接合部には円筒埴輪片(129-2)を下から当てがっている。南小口部でも東側で円筒埴輪片を下から当てているが、それ以外の閉塞構造はみられない。これに対し北小口部では円筒埴輪



第125図 土師の里3号墳 1・2・3号埴輪棺墓



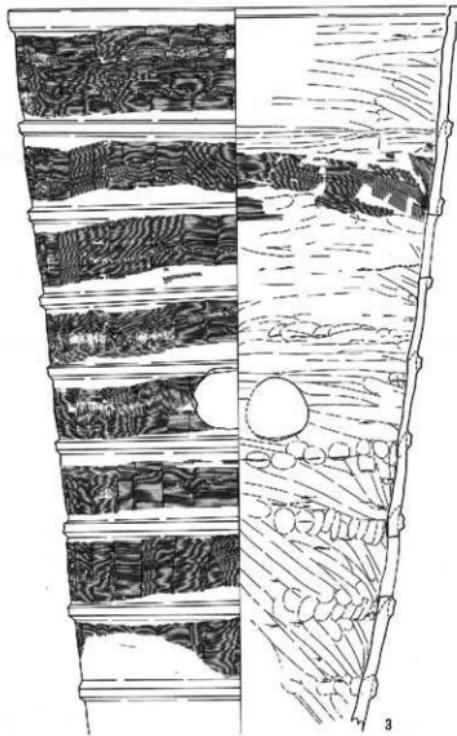
第126図 土師の里 3号墳 1・2号埴輪棺墓構成埴輪



片および129-1の盾形埴輪片で閉塞している。

この3号埴輪棺墓からは土師器2点と鉄製刀子1点が出土した。土師器のうち1点は甕で、掘方の東南隅からつぶれた状態で出土した。口縁部は完存していたが、体部は1/3ほどを欠いている。もう1点は完形の提瓶である。口縁部の形態などは同時期の土師器壺にみられるものだが、ボタン状になりつつある把手や体部の形態および製作技法には須恵器と共通した点がみられる。この提瓶は棺身上面から出土し、先の甕と同様副葬品と捉えられよう。刀子は棺内に落ち込んだ埴輪片の間から出土したが、これも副葬されたものとみられよう。

土師器の特徴から、この3号埴輪棺墓の時期は6世紀末～7世紀初頭に比定でき、したがって1、2号埴輪棺墓



第127図 土師の里3号墳 1号埴輪棺墓構成埴輪